高木卓 著

人間蹣伴

高木卓著

人間露伴

丹頂書房版

開明書店行

人間詞話

嵩木中著

目次

装幀　内藤政勝

人間露件

露伴の思ひ出

私が子供のころ、露伴は向島に住んでゐた。吾妻橋から言問團子まで一錢蒸汽にのり、さらに土手を白鬚のはうへ三四町ほど歩いて右へおりると、まもなく左側に「幸田成行」の標札をだした門構へがあつた。家はごくふつうの小住宅ながら、敷地がひろく、池もあり、別棟の書庫もたつてゐたやうに記憶してゐる。いま地圖でみると、寺島一丁目の見當になるが、當時の地名は寺島新田といつたので、私たちは露伴を「新田の伯父さん」とよんだ。露伴は私の母の實兄で、すなはち私には母方の伯父にあたる。

十二三歳のころから、私は毎年正月、この向島の家へ年始の挨拶にいくやうになつたが、それよりもまへ小學生のころは、母方祖母、すなはち幸田きやうだいを生んだ老母が居た麴町紀尾井町の家で、私は「新田の伯父さん」をいくたびか見かけたことがある。當時幸田一門の人々は、毎年十二月下旬に「クリスマス」と稱する

親睦會をひらき、各家たがひに子供らに玩具や文房具など贈りあつたものである。季節と、この贈り物とからおそらく「クリスマス」の名が生じたので、キリスト教的なものは全然なかつた。當時も今も、幸田の各家はすべて日蓮宗であり、私らの家だけは禪宗である。この一門團欒の忘年會的な集まりは、大正大震災で中絶されるまでおそらく前後十回ほど催されたが、ご馳走があり、くつろぎがあり、遊戲や笑ひがあり、ことに私たち子供らにとつては例の贈り物があるので、一年中でももつとも愉しい日であつた。母方のきやうだい、すなはち露伴の兄弟姉妹がまだ六人そろつてゐたが、男兄弟四人のなかでも露伴はことに體格も血色もよく、私たち子供らの目にも、他の伯父たちにくらべて「新田の伯父さん」はその赤ら顔とあかるい笑ひ聲とで一段と明朗な性格のやうに思はれた。少年の私が、小石川からはるばる向島まで年賀にいくやうになつたのは、父が留學して不在になつたためと、私が中學にはいつたためとのやうに思はれる。露伴は、少年の私にたいしても、いつも正式に屠蘇を祝つてくれたが、伯父の文名を知りはじめた私は、この偉い伯父と對

坐することがなんとなく窮屈であつた。この向島時代は、私の知るかぎりでは、露伴が家庭的にもつとも恵まれてゐた時代だつたやうである。後妻の伯母も居たし、娘のオルガンがきこえたり、息子が犬とふざけたりしてゐて、たしかに明るさがあつた。中學三年ごろの正月、私は生れてはじめて一圓の小遣ひを母からもらつて、露伴の家でいつもの年賀をすませたのち、露伴の息子、私の従兄弟にあたる同い年の成豐、通稱「一郎さん」を映畫見物にさそつた。一郎君（成豐）はその姉（文）とともに映畫雜誌をたくさんもちだしてきて私にみせた。私は非常識にも映畫俳優をただのひとりも知らず、はづかしい思ひをした。一郎君といつしよに淺草の電氣館へはいつて、チャアルス・レイといふ當時のスタアの名と顔をおぼえたが、一郎君が小遣ひとして十圓札をもつてゐたのを羨ましくおもつた。これらのことは、伯父露伴の、子供にたいする態度を窺はせるにたりると思ふ。

大正大震災の翌年、露伴一家は向島から小石川表町の假寓にうつつた。いまの傳通會館の左裏あたりに當る。ながいあひだ私は、震災で家がいたんだためとばかり

思つてゐたが、きのふ（四七、八、五）露伴の初七日に、從姉の文子からきいたところによれば、某出版社が向島の家を買ひとつて、手きびしい追ひ立てをくはせたためださうである。ジャアナリズムは、露伴にたいしても、この程度に苛酷でありうるのだと私は思つた。この假寓に三年ほどゐてから、昭和の初期に同じ表町の、ついさきごろまでゐた大榎のそばの家にうつつた。

「榎ッていふ木ア、つれづれ草にもあるやうに、さつぱり役に立たねえ木だ。鼠がかじれば、歯のはうが減るッていふやつだ。だからこれで米倉をつくりやアいいかつていふと、まづ鋸の目がいたんぢまふ。やつと切つて組みあはせても、こんどア反るからせつかくの組みがねぢれちまふ。箱なんかつくつても、ひとりでにこはれる。不材の木の大将だな。だから大きく育つんで、一里塚なんかにやアもつてこいだ。ところでこの『木』へんに『夏』つていふ字は、日本流の使ひかただから、じつはたしかぢやねえな。實は小鳥がくふが、まへに花がさいても、松の花たアちがふから、花粉を味はふわけにもいかねえ……」と露伴は語つたことがある。（四

二、四、三）露伴の娘文子も「花粉で緣側が黃色くなるのよ」といつた。皮肉にもこの大榎の實は、露伴の庭先にもこぼれおちて、すでに若木にさへなつてゐた。傳通院前から小石川柳町へぬけるダラダラ坂は、この大榎のはえた小さい廣場より下の部分を「善光寺坂」とよぶが、坂上の大榎界隈は、じつは露伴の居住以前から、われわれには緣のふかい土地であつた。露伴の家は榎廣場に面した角家であるが、その橫町の一軒おいた隣りに、私ら一家はほとんど大正の間ぢゆう住んでゐた。しかも私らの前には伯母（幸田延）が、又私らのあとには從兄政吉（幸田本家）の一家がごんどの戰災まで同じ家に住んだ。明治時代から昭和二十年まで、われわれに緣のふかい、變化のすくない古風な住宅地であつた。露伴の榎廣場轉居によつて、露伴一家と、なか一軒おいて幸田本家と、幸田姓の家が二軒ならんでゐたわけである。どちらも借家であつた。

露伴が表町の最初の假寓へうつつたころ、私は一高の寮にはいつてゐたが、そのころから露伴の小說をあさりよむやうになり、大學の文科生になつてからは、圖書

館で鷗外の藏書印のある露伴の作品を借りだしては次々にむさぼりよんだ。一方、岩波文庫が創刊されたり、いはゆる圓本が出はじめたりしたので、ジャアナリズムはふたたび露伴に接近をもとめ、露伴も「觀畫談」や「蘆聲」などひさびさに小說の筆をとつた。私は露伴の健在をよろこんだが、じつは小石川の假寓にうつつたころから、露伴の家庭は急にさびしくなりはじめた。まづ鍾愛した長男（成豐）が死んだ。娘（文子）は結婚して家をはなれた。妻（後妻）も病氣靜養のため不在がちになつた。

私は露伴に接して直接物をきく愉しさや味はひがやうやくわかる年ごろになつた。露伴の、家庭におけるさびしさや無聊をなぐさめるため、私は弟とともに、榎廣場の角家を折にふれてたづねた。一軒おいた隣りの本家從兄の息子たちもよく出入した。私らは將棋を敎はつたり釣りの話をきいたりしたが、たとへば釣りの話にしても露伴の談話は、ふかい經驗とひろい知識によつて裏づけられてゐるので、何といつたらいいか、泉の水面がもりあがつて水がムクムク湧きでるやうな、たうて

いわれわれには受けきれないやうなゆたかさがあつた。しかもすきな酒盃を手にしてゐるときは、日ごろの江戸ッ子言葉がまた一段とべらんめえ的な暢達さをおびて、じつにえもいはれない調子と味があつた。面と向つてノォトをとるわけにもいかず、またノォトは伯父もこのまなかつたが、たとひとらうとしてもこちらが非才すぎるためにとりやうがないものも多かつた。釣りにしても、かつて露伴はみづから釣船をもち、專屬の船頭にこがせて關東の諸川をはじめ各所を釣りまはつた時代があるので、竿、糸、鈎などの道具から、餌、魚の種類から、さらに川や水質や、季節や天候や潮や、それら多面的な大うんちくがあとからあとからと語られても、私などただ茫然ときいてゐるよりほかはなかつた。釣りずきの弟はさておいて、釣りに縁のない私は、わづかに「まぎる」とか「いなす」とかいふ言葉をおぼえたり、「居ねえとこぢや釣れねえ」といふ眞理に今やらのやうにハッと氣づいたりするぐらゐがせいぜいで、そのほかは、藝者が船へのるときの心得だとか、婦人が船から放尿するときの方法だとか、餘談中の餘談しか耳にはいらなかつた。一言敷衍

すれば、昔の藝者は船の屋形に手をかけて足から踏みだして乘つたので腰が後方に出つぱるやうなことがなく、すがたが美しかつたが、いまの藝者は船の乘りかたも知らねえ、といつたたぐひの話である。釣りの話には少々まゐつたが、將棋は私も弟と同樣橫好きではあり、ことにそのころ木村義雄前名人がいくたびか伯父を訪ねてこられたのでいろいろな思ひ出をもちえた。このたびの告別式（四七、八、二）で、私は親戚の列に立ちながらひさびさに木村義雄氏をみかけたが、十餘年前われわれが露伴の家で會つたところにくらべて、おもひなしか、白い洋服の小柄な姿がうらさびしくみえた。ひと昔あまり前の木村八段は、もつと若い力づよい感じであり、しかもその若さにもかかはらず露伴にたいしてもゆつたりと落ちついた態度をみせ、對局後に多少酒がはいつたりすると、われこそは實力日本一といふ自信のほどが、言葉のはしばしにもそれとなくうかがはれた。露伴は關根名人のまへの小野名人時代の四段であるが、木村八段は角をびいて露伴と對局した。私が觀戰したかぎりでは、一勝一敗の戰績であつたが、もちろん花相撲であつたらう。對局中の木

村八段の悠然たる身構へは、たとへば駒臺に駒をおくだけでも露伴が雜然とおいたのにくらべて同氏は整然とおきならべ、指し手を案ずるにも露伴が盤面を凝視するのとちがつて木村氏は數瞬間瞑目したりするなど、まことに心にくいばかりのものがあつた。あるとき伯父の醉興で、私は弟をあひてに木村八段のまへで御前試合をさせられたことがあるが、これほどつらい將棋は生涯もう二度とさす機會があるまいと思ふ。われわれは露伴に二枚落でも齒が立たないへボだつたのである。

へボといへば、われわれ兄弟は、敗局が明白な終盤でなほかつ投げださずにねばることを鷄が首をしめられて羽をばたばたさせることにたとへ、しばしば深更まで愚かしい勝負をしながら、相手の窮境をみては兩手で羽ばたきの眞似をしてたがひに揶揄しあつたものだが、ある日、露伴宅に木村八段が來あはせてゐたとき、弟がこのことを話すと、微醺をおびてゐた伯父は呵々大笑しておもしろがり、手をうつて筆墨をとりよせるや「愚棋(ぐき)を嘲り、賢姪(けんてつ)に似(しめ)す」といふ諧謔的な即興詩をかいた。姪はもちろん甥のことで、われわれをさす。かりに、かなまじり文にかきなほせば

左のごとくである。

ただ雄を稱せんと欲す、あに雌を守らんや、
金鼓矢石、橘中にしたがふ。
戰ひ鶏鳴にいたり、天色白し、
まさに休む、ふくはく一ぴやうの棋。

嘲愚棋 露 伴 老 人
似賢姪

「橘中」とは幽怪錄に出てゐる碁をうつたのしみをいひ、「腷膊（又ひよくはく）」は鷄の羽ばたきの音、「一枰」とは一面または一局の意で、鷄から思ひついた即興の揶揄詩である。これをかいた筆がまた穗さき二分ほどの鳥の羽のもので、墨がすぐ枯れやすい筆であるため、おのづから文字が力をぬいたどこか飄逸なおもむきとなり、じつにすばらしいものであつた。弟が表裝させて軸にし、ひじやうにたいせつにしてゐたが、例のさきごろの大空襲につひに灰にしてしまつたのは、惜しんで

もあまりあることである。

たしか去年の冬か、ことしの正月ごろであつたが露伴は病床に眠られないままに初盤の新趣向を考へだして弟にかたつたことがあり、弟は私といつしよにそれを實驗してみたが、どうも趣向だふれのやうにわれわれには思はれた。病床にあつた伯父の、さいごのころの、最大關心事は、きのふの初七日に從姉の文子がわれわれに語つたところによれば、何よりも將棋の名人戰であつたといふ。木村名人が塚田八段につひに敗れ去つたときいたとき、伯父は病床で、とつぜん「馬鹿野郎!」と大喝したさうである。木村氏への愛情、さうしてその一方、自分の老衰をもふくめて不動のものがつひに搖らいだことへの何か名狀しがたい焦慮や憤懣、それらが「馬鹿野郎!」となつて爆發したのであらう。病床にはべる人々はふるへあがつたといふ。

露伴の無聊を慰めかたがた、親戚がいつともなく日をさだめて露伴の宅にあつまり、露伴からいろいろ物を敎はるといふ一種のならはしが生じたのは、釣りや將棋

の話が終つたころからであつた。さいしよは周易の講義、つぎは書道とその稽古であつたが、この書道のときは私は水戸の學校に轉任してゐたので、ざんねんながら參加しえず、ときたま歸京しては弟たちや老母までが王義之（わうぎし）がどうの褚遂良（ちよすゐりやう）がどうのといふのを羨ましく思つたものである。比較的ちかくは四十年（昭十五）十二月から四十二年十一月にかけての、斷續的とはいへ滿二年にもおよぶ俳諧講義であつた。聽き手は、露伴の妹である私の母や伯母たち、七十老婆から若い金ボタンの學生にいたるまで十二三名、それに未亡人となつた露伴娘文子、孫の玉子らで、文字、どほり老若男女の一むれであつた。これらまつたくの初心者に對して、露伴は懇切に講義してくれたうへに、われわれの駄句に朱まで入れてくれた。しかも申譯ないことに、われわれは、親戚のありがたさに狎れて、そのすばらしい俳諧講義に對して必ずしもつねに熱心とはいへなかつた。私は俳句の才能は甚だ乏しいが、しかもなほ努力がたりなかつたことはかへりみて慚愧にたへない。露伴の俳話をきくことは、しかし私にはこのうへなくたのしかつた。露伴は、缺席者が多かつたり、われ

われの句が通歩しなかつたりすると不機嫌であつたが、しかもその不機嫌をおさへながら、いつも二時間あまりにもわたつて、手をとつて導くやうに教へてくれ、誰かが一句でも多少なりとも形のついた句をよみだすとたちまち上機嫌になつてほめてくれた。われわれが句をつくるのに手まどつたりしてゐると、露伴はじれつたがつて、いろいろ示唆をあたへたり、また場つなぎの雑談をしてくれたりしたが、私には俳話とともに雑談が又このうへなくおもしろく、下手な句などつくるよりも、日ごろ面とむかつてはとれない雑談ノオトを、俳句ノオトの整理にまぎらはせつつ懸命にとつた。さきの榎の話もその一つである。しかも全體の何分の一しか筆記しえず、また筆記したものも、こちらが淺學のためすこぶるおぼつかないところも少なくないが、數日まへ二三の新聞に露伴の思ひ出を寄せたとき、私はこの、露伴の雑談を主として紹介したので、ここでもさいごにそれらの拔萃をかかげておかうと思ふ。露伴のいろいろな面をじつによくあらはしてゐると思ふからである。文責はもとより私にある。なほ露伴は、これらをかたつたとき、しらふのときと一杯機

雄のときとあつた。

「菊は日本では芽からだが、西洋では種からそだてる。その種からそだてた菊を逆輸入したのが、何玉（なにぎょく）といふやつで、玉の字のついたのはみんなそれだ。三瓣具足してゐるのが日本の菊ではいいので、大菊はさしわたし二尺もあるやうなのがそれだ。三瓣具足？　まんなかの瓣が將軍で、あとの二つが左右大臣だな。つぎに中菊といふのは咲いてから藝が要る。右や左に狂ふ藝だから、狂ひ菊ともいふ。作るにはこの中菊がいちばんむづかしい。咲いたときを『ふッきり』といつて、それから先が藝だ。それから小菊だが、これァ數無しだから、たくさん……三百も咲かせたりする。野路菊また山路菊などいつて自然的な原始的なつりくかたをするので、戸隱や富士の大宮あたりにある。

『ふじの雲散つて裾野の小菊かな』（露伴の句か）

いや、ただ懸崖（けんがい）づくりぢやいけねえ、菊の懸崖づくりといはなくちやあ。あれァ素人くひつきのものだ。俳諧の百菊といふのは百鉢菊をつくるんだが『けふになつ

て菊つくらうと思ひけり』」人情の句だが惡くない。『黄菊白菊そのほかの名はなくもがな』」（嵐雪）いい句だ。『菊の香や奈良には古き佛たち』」（芭蕉）これはよそへがうまいので、べつに奈良にいい菊があるわけぢやない。陶淵明がめでた菊は大きなもんぢやない。中國の詩のはさうだ。こんにち俳諧で作らうつてのは大菊だが、平安朝のころア、菊に綿をつけて顔をなすつたりして、美顔術にもした。紫式部なんざア、これをやつたかもしれねえね。ハハハ。菊は毎年おなじところにつくれば、嫌地（いやち）になつて消えちまふ。大菊の菊の親木をとつて有性繁殖をさせようとしたことがある。三千の種から八ついいのができれば上々で、メンデルの法則でわるくなるんだな」（菊の話はなほこの倍ぐらゐある。―四一、一〇、二九）
「いまの世界（五月）は銃後の者は餓鬼道、戰地の者は修羅道だ。飢餓感をへらすには松脂がいいさうだが、ハハハ。世界情勢が雁木鑢（がんぎやすり）でよくなりやいいが。イタリヤは泳アはげねえのをドイツがかけえてるんだからてえへんだね」（四一、五、一〇）「音は合性でねえものにはつたはつてこねえ。地球の自轉の音はきこえねえ。

吾聲常在論を考へてみたが。……わり算とかけ算の論だ、二で割るのも五を掛けるのもおんなじで、片つ方ばかりぢやどうかね……。アルミにアルファ線をかけると燐になるが、ふつうの燐とちがつてやがて硅素となる。岩のたねで、泥だね。この、燐に途中でなるつてえのがをかしい」（四二、四、三）

「『ひる寢して虻のうなりをききにけり』（伯母の句）か。わざわざ寢るやうでをかしいし、ききにけりアいらねえ。うらむ、『まどろめば寢させぬ虻のうなりかな』とでもするか」（同右）

「柳はすつかり黄色くなつてから散るつてわけのもんぢやねえ。『散るものに極まる秋の柳かな』ッていふふうに、上から流してもいいが、やつぱり、何が何とかして柳散る、とやつたほうがふつう無難だな。橋の欄干なんぞに散るよりも、ただ板橋に散つたはうがいいね。（四一、一〇、一一）

「世の中がへんになると退歩したはうがあたりめえになつてくるから、陶器も漆器もおちてくる。漆は日本の空氣とあふから、ドイツの研究もまにあはねえときく。

日本の漆をドイツあたりにおくと古物のやうに時代がつくらしい。漆器は空氣を漆にふれさせるときの空氣の溫度が祕傳だね」（同右）

「今の世ほど、ぶちこはし道具が發達してゐることァねえ『微妙なる』ものァ、今の世ではほろびるほかはねえやうだな。人間は破壞の競爭がすきなもの。デンギス汗といやァ破壞の王みてえだが、じつァ懷柔しちやァ進んだから進めたので、西洋の歷史書にあるやうに、やたらに壞しちやァ進めるもんぢやねえ、智慧者の耶律楚材がそばにゐたからよかつたんで、今の日本が中國でやることたァこの耶律楚材がゐねえから、まるで笊で水をくむやうなもんだ」（同右）

「黃色いタンポポはにげえが、白いタンポポはにがくねえ、白いのは奧州にある。野の草はたいていにげえね。」（四一、四、三）

初七日の翌日（四七、八、六）愚姪誌「群像」、

露伴の片鱗

露伴がなくなつた市川市菅野の家は、八疊、四疊半、二疊の三間しかない小さい家であつた。小石川表町の戰災跡におそらく印税でたちかけてゐた家は、普請がおくれてつひに間にあはなかつた。「お父さんは、生涯、家には縁がうすかつたわ」と。私の從姉、露伴の娘幸田文子は、初七日のときかたつた。「ここでも私ちつとも恥づかしいとはおもはない。だけどお父さんほんとにお氣の毒だつたわ」

庭もなく、南むきの縁先から二間ほどの距離に、隣家の裏側の羽目板を見るやうになつてゐた。そのかはり東が四ッ目垣ごしに陸稻や茄子の畑になつてゐて、風とほしのいいのがせめてもの取柄であつた。それにしても葬儀のとき親戚たちが坐る餘地さへもほとんどなく、われわれ甥姪どもは、靴や草履ばきのまま、縁側ぞひのベンチに目白押しに並ばなければならなかつた。

戰爭で燒けた表町の家は、有名な大榎のはえた廣場にそつた角家で、さいごまで借家のはずであつた。露伴が越してくるまへに、私は一軒おいた隣家にながく住んでゐたことがあるので、露伴の角家の前住人たちの名前や、家の模樣がへのことな

ど、いまだにおぼえてゐる。門ははじめ南の榎廣場に面してゐたが、露伴が移つてきたころは、横町ぞひの西向きとなり、板塀も新しくなつてゐた。大正大震災にも堪へたし、ことに前住人が二階へピアノをあげたほどゆゑ、古い家ながらしつかりしてゐたはずである。家賃は、物價がやすいころ百十圓ぐらゐときいてゐたが、せいぜい五六十圓程度にしかみえなかつた。

家に運がわるかつたやうに、露伴は、家庭的にも惠まれたはうではなかつた。つとに妻を失ひ、つづいて長女、のちに長男をうしなひ、後妻とも別居し、晩年は、寡婦となつた次女文子、その子の孫娘玉子との三人ぐらしであつた。そのさびしさを慰める意味もかねて、すでに昭和七八年ごろから、親戚の有志たちが露伴の家をたづねては、將棋や釣りや、周易や書道や俳諧などの話をきくやうになつた。俳諧の話は、昭和十五年十二月、私がたまたま七年間の水戸勤めから歸京したころにはじまり、斷續的ながら十七年十一月までほぼ滿二年ほどつづいた。露伴の妹である私の母や伯母ら七十老婆たちから、金ボタン服の豫科生や中學生にいたるまで、老

若男女の、しかもまつたく初心者ばかりの聴き手をあひてに、露伴はよろこんで講義してくれたうへに、聽き手たちの駄句に加朱までしてくれた。親戚なればこそのありがたさであつたが、しかもそのありがたさに狎れて、われわれ、否、私が俳句の勉强が十分でなかつたことは、いま思つても慚愧にたへないことである。私は俳句素質がとぼしく、そのうへ先入主もあつて、つひにさいごまで俳諧に沒頭することができなかつた。しかし俳話そのものはじつにおもしろくきいた。さらに俳話以外の雜談も又じつに愉しかつた。雜談はたとへば、

「菊は新種をつくらなきやア、よその人の苗をもらふわけにいかねえのが、昔からの不言律だ。親木になる菊に、毎年ほぼ同じやうな花が咲くやうになつたとき、はじめて名もつけ、ひとに頒けることもできる。いい菊でも、つくりかたがまづけりやア片咲きになる。中心から左右への長さがちがつてくるのだ。ふつう苗からそだてるが、種からのときア、花をかげぼしにして來年まく。種はほとんど目に見えねえ。菊は、いくらでも變種ができるものだから、いまは五千種もあらうか。つくる

のに人を延三千人からつかふ者もあるし、費用だけでもたいへんだな。ところで、けふは誰も、菊に市松の油障子をたてたのや輪臺なども詠んでねえのは、どうしたのか。ん？　花瓣のほそいのは伊勢性で、色がかはつてるのは錦物だ。何錦などといつて菊あはせに出す。支考の菊は、いまの者にやアむづかしいだらう。菊枕たア菊のほしたのを枕に入れるのだ。いつたい菊は、うるさくいやア『きく(菊)』と『よく(薏)』とある。くさかんむりにこころの意の字で、ヨクは味がにがい。酒をにがふくべの中に入れるとにがくなるが、菊にもにが菊とあま菊がある。食ふのは小菊で、大きい菊はめつたに食はねえ。牡丹色の赤いのもあるが、ふつう食ふのは濡鷺といつて白いのがいい。菊は谷間にさいてるときその水をのむと長生きするといふし、被綿なんかのこともある。食つてあたるわけがねえ。菊をつくるのにじやまな虫の菊吸は、蜘蛛みてえなやつだ。うん、除虫菊はまた別ものだな。菊は蕾のとき、まはりを摘まなきやアだめだが、柳芽といつて柳みてえな芽のあるのを、うつかり育てることがある。懸崖づくりの菊は、俳諧に『けんがい』ぢやア言葉からい

けねえ。あれはもとに花を咲かせるのが素人にやアむづかしい。『つくりつくり、つくらぬ誇る小菊かな』大菊つくりがいつのまにか小菊あひてになり、ことしはひとりでに咲いた小菊を自慢したといふところだが、いい句ぢやねえ」（四一、一〇二九）

このやうな雑談は、俳話ノォトにまぎらはして取つたので、じつに多岐多様にわたつてゐた。ことに一杯機嫌のときこんこんと湧きでる談話は、その口調といひ味はひといひ、まつたく名人藝といつた感じであつた。こちらに素養がないのと、露伴がノォトを好まないのとで、あつたら大部分をいたづらに聽きすごしたことが殘念至極である。しかも、取つたノォトもなほ確實さは保しがたい。

「おれア伊東の湯のなかでうたつてみたがじつさい下手だね。ちがつてるのがよくわかる。耳と咽喉が彗星と地球みてえだ。『思へばすまぬことばかり（紙治）』とうたつてまつたくさう思つた。彗星の軌道がゆがんでるのは地球をもとにするからなので、人にアみんな腦髓のむきむきがある。繪に向きがねえ者は、かけさうな氣で

もできねえ。右手の左文字は横にかくとかきいい。頭のむきをかへるとできるんだな。暗闇のなかで前のはうを考へるのは、心理學ぢやアどういふか、ともかく頭が前にむいてゐるから前をおもふんだな。眞空のことも考へた。空氣は『空』と『氣體』のまじつたもの。われわれの身體にも木のやうに『空』があるはずで、それだから舌に薬をのせりやア、血管とかさういふものでなく、つたはつて治るところがあるのは、空があつて通るからだ。空は排することがないから。いまの科學は、地球上の高さ二十里ぐらゐからさきはあまり論じねえやうだが、はるかに大きな『無の世界』をみず、有無の交渉を科學が扱はねえのは物たりねえ。仁科といふ人が谷川嶽のトンネルのなかで研究してるさうだが、宇宙線がとほるのは、地球に空があるためと考へられねえものか」（四一、一二、二一）

このときは、つづいて音聲常在論、燐の話、さらに化學や醫學や薬學の話をした。水素と同位元素で別物である水素のこと、重水のこと、窒素から水素がとれることなどは、私のノオトもきはめておぼつかないが、「昔とちがつて窒素が窒素ち

やすまねえ」とか「T（藥名）は雞のめんざいだ。藥はインチキなのが多い」などといふ繫ぎの言葉がまざつてゐた。

墨や石をみせてもらつたこともある。圓形の墨で表に山水畫、裏に「御題關槐山水」「臣關槐敬書」とあり、厚さといはうか横緣に「乾隆三十年造」の文字があり、それらの繪や字は型に入れて浮かびださせることや、そのついでに李廷珪、程君房、方于魯らの墨のこともきいた。「程樣博にやつつけられた方氏がやつぱりおんなじやうな墨譜を出してる。この方氏の墨譜の繪が、九谷燒の下繪になつてゐるのでさうおもへば、九谷なんかはくだらねえものだ。この墨譜にア西洋の銅版畫みてえな木版がある。李廷珪の墨は、水に一年ひたしても全然くづれず、すつて稜をつくれば木がけづれる。刀なら正宗だ。いい墨は墨氣がちがふ。墨はすつてつかふもので、やたらに貯へるのは東坡の『墨、人をする』で、心ないわざだ。駿馬でなきア宇治川の先陣はできねえ、墨がわるくちや墨氣が出ねえ」（四一、九、二七）

私は人の名さへろくに知らず、まして文字を露伴にきくことなど思ひもよらず、

ひそかにノォトにとるのが、愉しい反面につらかつた。
「顔骨柳筋といふことばがある。顔眞卿は骨つぽく、柳公權はすぢばつてゐる。やはり唐の虞世南、これは綿裡針で、針を綿でつつんだやうだ。褚遂良は、うつくしくととのつて美人が立つて待つてるやうだから學びにくい。若いときの褚遂良は歐陽詢に似たものがある。歐陽詢は中央ステエションで、誰でもいくところだな。蘭亭は太宗が墓のなかへもちこんでしまつたが、のちの蘭亭は二百種もあつて、なかにア鷺と烏みてえなのもある。字は、力がついたところでやめちやア奴性になる。奴隷の字にとどまる。米元章は、元來うまいひとで、褚遂良でもなんでもそつくりにかき、快馬、陣を切るといつたそれほど上手な男だのに、奴性になりたくなさにへんな字をかきだした。つかみどこがなくて、どこが米元章だかわからねえ。日本では、弘法大師や逸勢はえらいはうだが、行成卿からくだつちやア、いいものはねえ。墨をするにア、いい硯にアまづ滴をたらし、すつては水をくはへていくので、水のはうをこきだすのはいけねえ。いい墨は、おのづから平らにすれるもので、小

ふくなつたとき他の器とすり口をあはせるとちやんとつく。又いい硯は、いま洗つてきた手をこすつても、指がすれてしまふものだ。ただつるつるしてゐるだけが能ぢやアねえ」（四二、五、一〇）。（このあとの啓蒙的な俳談は、今回補訂して次章「露伴の俳話」のはうへくりいれた。）

老若男女の初心者に、露伴は、このやうな心づかひをみせてくれたのである。人間露伴は、多分に悲劇性をおびてゐたやうに私は思ふが、このことについては又べつの機にのべることにしたい。—四七、八、一一（「光」）—

露伴の俳話

○昭和十五年（一九四〇年）十二月一日

「俳諧はもと形容のことばで、異つたもののハルモニイ、これがとりもなほさず俳諧だ。わが國の俳諧は古今集の俳諧歌から出てゐるが、すでに萬葉集に戯笑歌もある。

連歌はべつだ。これはちがうた人の句と句の照合がおもしろいので、甲人の句に乙人の句をつけると別な味が出てくる、それを三句四句、五句十句とつづけ、百句からさらにそれ以上のもある。和歌の獨りだちなのとちがつて、連歌なる所以だが、しかしもともと和歌に始まつてゐるから、連歌のなかには古句も多い。したがつていはゆるピンとこないものも少なくないわけだ。

さて連歌の席のあとで、たはむれに當世風によんだのが、すなはち俳諧連歌だ。だから俳諧連歌は連歌より新しく、連歌は和歌よりも新しい。すなはち和歌、連歌、

俳諧連歌の順序となるが、この俳諧連歌よりも俳諧はさらに新しい。さうしてすぢからいつてももとは戯れの意味をふくんでゐる。いつたい俳諧連歌は連作ゆゑにすべてが揃つてみな立派といふことはありえない、そこで獨りで立派によんでたのしんで而も同時にやはり人にも見せよう、といふやうなところから發句だけをつくることがおこなはれだした。發句も、前述のやうにもとは戯れの句だつたが、芭蕉のときになつて戯れをやめて詩のこころを重んずるにいたつた。それからは俳諧といへば何よりも發句のことになり、發句を俳句ともよぶやうになつた。もちろん戯れをふくめた俳諧連歌もべつに殘つてゐたので、芭蕉のころにはこれもさかんにおこなはれた。しかしこの俳諧連歌は規則がなかなかやかましい。だからさういふところから發句の獨りだちが促されもしたのだ。

發句はもともと連歌の頭にあたるものゆゑ、格をそなへてゐなければならない。のちの俳句といふよびかただが、「俳」の字は元來不正の意味ですなはち戯れのこころをふくんでゐるから、さういへば芭蕉さへ始めは戯れてゐた。つまりもともと

俳諧は俗談平語を主とするから芭蕉の師季吟も

『一僕とぼくぼく歩く花見かな』

のやうにふざけてゐたので、かういふ戯れをのちに芭蕉がしりぞけるやうになつたわけだ。

『白露や無分別なる置きどころ』

これは宗因の句だが、たとへば稲の穂のやうなきれいなもののうへにも、さうでないきたないもののうへにも同じく白露がおくのがおもしろい、といふので、

『夕立や細首宙に大井川』(宗因)

これは大井川の連臺わたしで、『白露や』もこれもどつちもいい句にはいい句だが、かういふ戯れふざけた調子の句は芭蕉にはまづ無い。もつとも芭蕉は俳諧連歌にもずゐぶん骨を折つてゐるがこのことは又べつに話さう。

俳諧の、發句を一つよんでたのしむといふ慣はしは、歴史的にみれば本道から離れたものともいへようが、詩の本質からいへば一句だけのはうが却つて願はしいわ

けだ。それに俳諧連歌は例の規則もあり、よほど手だれの者でなければよめないやうになつてきたのに、發句ひとつの俳諧はそこへいくと先達も規則もいらないからますます盛んになつた、といつても俳諧は、だから自己流にかつてによんでもいい、といふわけではけつしてない。

いい句か、わるい句か、これをみるのもそもそも人々それぞれの觀點があるから一概にはいひえないが、ともかく俳句はややもすれば形式を重んじすぎることに傾きやすい。形式ばかりに傾けば俳句は衰へるもので、たとへば明治時代の前などがそれだ。句をみる宗匠は判者または點者で、この宗匠がもつともいい句だとみとめたのを一卷の奥にかき、かかれた句の作者がこの一卷を頂戴するわけだが、じつはしばしば宗匠が存外まづいこともある。へたな句を「點者吟」などとふざけてよぶのもこれからくるのだ。べつに衆議による判定もあつてこれは衆議判といふ。……

即席でよむのが當座吟だが、この當座吟には遲吟はよくねえ。また、持ちよりだからといつて一句だけしか持つてこねえのは、那須與市みてえに一本だけで當てよ

うといふんで、よからざる心がまへだな。ことに初心者はとかくさうだ。うん？句にアもちろん季が要る。それア森羅萬象がおのづから季にふくまれ、季をふくんでもゐるからだ。もつとも季なしの句もなくはないが、季がなくちやあ神武天皇にアならねえ。さうさ、平句と發句との差もわからなくちやア連歌はできない。……うむ、むかしの歌をひいてもいい、さういふのを古歌取りの句といふので、『秋來ぬと目にさやまめ（鞘豆）のふとりかな』

だがかういふ古歌取りはむづかしい。……」——

露伴はそれからわれわれ聽き手が持ちよつた句の批評にうつつた。親戚の老若男女の聽き手がいかに初心者であり、いかにでたらめの句をよみ、また露伴がそれにもかかはらずいかにいちいち相手になつてくれたかは、つぎの幾つかの例でもわかるであらう。課題は「冬季雜吟」ででもあつたらう。露伴は微醺をおびてゐたが、句評のときは、必ずしもべらんめえばかりは使はないのが例であつた。——

「『末枯の郊外に來て富士見たり』（聽き手の句、以下同じ）

さしつかへない。本來は、來たら見えたりのはずだがこれでもいい、幼稚だがかまはない。

『流れ木や川面に白くところどころ』

季が不十分なので景色がはつきりしてこない。『冬川の流木白しところどころ』とでもすればまだいいだらう。

『寺の庭落葉かさかさ冬の風』

季が重なるのは必ずしもわるかアねえが、かういふのは重複感がつよいし、さいごも、「かはき風」「からッ風」などもつてくるところだ。

『落葉かく乙女の顔やかがやかし』

もつと工夫をして、奉戴日なら奉戴日らしくはつきりしなきやいけねえ。

『除夜の鐘蒴玉賣も耳にとめ』

蒴玉は春の感じだからへんだ、わからねえ。

『門松も打ちつけをへて暮れにけり』

けつかうだが「も」がいけねえ、「を」だ。
『鈴蘭の實ひとつあかし冬の庭』
冬の庭が重複「寮の庭」とでもするか。
『新兵の眼は何となくかがやけり』
工夫がないし季もないやうだな、新しい歳時記か。
『紙芝居落葉の庭の集ひかな』
庭は「街」あるひは「辻」だ。
『初雪に鼻赤くせる童かな』
初雪がへんだ、またわらべたアかぎらねえ。
『冬空に浮びいでけり富士の山』
秋とも冬ともとれる。「浮びいでたり」だな。うかぶもまづいが。
『うす氷われ目に跳ねて緋鯉かな』
一茶ばりで毀譽褒貶なかばする句だ。われた所ではねたのか、われさうな所では

ねたのかわからない。あぶねえ句だがおもしろいにアおもしろい。

『かきたてる襟のすきまに牡丹雪』

ぼたん雪は春がちかい雪だから、襟を「かきたてる」があはねえ。

『雪女郎かげもおぼろの吹雪かな』

これはもつと缺如しないやうにすれば味もふえるが、このままでもいい。

『下駄うらなひ當りて降るかぼたん雪』

また牡丹雪か。「淡雪」同様これは春の雪だ。

『羽根のさきとひのなかよりのぞきけり』

羽根は「羽子」だ、季も春だし冬の句ぢやねえ。」――

聽き手の駄句をこのやうに數多く羅列することは、私はこの後さうたびたびはくりかへさないであらう。ただ以上の例によつてもいかにわれわれ聽き手が駄句を、否、それどころか俳句と川柳の區別さへもわきまへてゐず、しかも露伴がそれほどでたらめな初心者たちに對しても、いかに懇切に心こまかく指導してくれたかが推

察せられるであらう。露伴は、たださへ血色のいい顔を微醺に一そう赤くしてときどき愉しさうにカラカラとわらひながら敎へ、聽き手のわれわれも又ときに多少とくいの北叟ゑみをもらしたり、又より多くは苦笑裡に大てれになつたものである。いづれにせよ、まことになごやかな空氣ではあつた。——

「ぢやあ一つ問題を出してみるか。

『應々と云ふも叩くや雪の門』

こちらが返事をしても相手が叩くのだ、嵐雪の句をちよつと變へたのだが、さあこれを直すんだ」——

誰もわからず、露伴はみづからなほして

「『云へど』とすればいい。ぢやあ、これアどうだ。

『鯛も花も見ぬ里はありけふの月』

鯛や花は見たことのない里があるがけふの明月はすべての人々があまねく仰ぎみる、といふこころで西鶴の句だが、さあこれアどうなほす」——

やはり誰もわからなかつた。
「『鯛は花は』とするのだ。……それぢやあ、エェこれは誰でも知つてゐるが、
『朝顔につるべとられてもらひ水』
これに採點するんだな。
さう、これアつくりものだから、零點でもしかたがない。この句に、なるほどなどと感心してはいかん、かういふのは、だまかす手で、手妻の句だ。技巧でなく、まあ虚僞だ。『秋來ぬと目にさや豆のふとりかな』ああいふのが技巧だ。
『龜の甲煮らるるときはなきもせず』
これは季なしの句の例だが、さあこれアどう採點する。……わけがわからないやうな句だ。さう、おれも零點だが、しかし芭蕉は買つてゐる。これが發句とされたのも認めてゐるくらゐだ。一見季はなくても發句にもされたほどだから、何か故事があるはずと思ふべきだが、元祿の者にア通じたらうが、いまの者にア通じねえ。かういふ技巧もどうかと思ふ。だいたい初心者ははじめは寫實から行くのがいいの

で『朝顔につるべとられて』などは、技巧といふより才氣を弄するのがよくないのだ。『龜の甲』のつぎの句は

『ただ牛糞を風のふく音』

ハハハ、むづかしいだらう。技巧は又とかく澤山もりこもうとしがちになつて、いきほひ慾ばりのひとり合點になりやすい。寫實的にすなほなのがいい。

うむ、「けり」と「たり」のちがひもむづかしいな。抽象語もさけたほうがいい「入營」などさうだな。「高尾」はいいが、「新橋藝者」はいけねえ。ひとの名前は具體性をもつもので「次郎松」のやうな、何といふこともない名もときには味がある。

うむ、さういふふうに句を集めたのを世話役がとぢて、袋に入れて宗匠にわたす。宗匠がそれを添削してやはり袋に入れて世話役の幹事にかへし、みんながあつまつたとき披露する。これが「開巻（かいくわん）」で、宗匠はそのとき秀句を句集の奥にかいておく、これが「奥抜（おくぬき）」だ。奥抜になつた者が、師匠からその句集をもらつて天狗に

なるといふわけだ。ハハハ。いや連歌はまだ早い、表六句、平句十二句、つぎに又十二句、それから六句で、あはせて三十六句、これが俳諧連歌のふつうのいきかたで、そのときたとへば誰かの長句に自分が短句をつけるとき「頂戴いたします」といひ、つまりありがたうと受けるわけだな、もつとも句主がその附句に不滿なら、もうひと工夫願ひますとなつて又つけなほしだ。『打添ひの附け』といふのは、さつきの紙芝居なら紙芝居の句に、子供の衆團とか何なり街頭の風景をつけそへるわけだが、さういふのはとかく小さくなつていけねえ。そりやあ小さければ手柄もたてやすいし、その反對に大きい句になると手柄はずつと立てにくくなる。故人の名句を發句にえらんで練習するのもいいが、古池やが發句ぢやあ困る。おなじ芭蕉でも『枯枝に烏のとまりけり秋のくれ』などはずつとつけいい。『礫發句』といつて、子供が石を投げるみたいな、へんな主題のを誰かがよみだす場合もある。つけるには

『大膽に思ひくづれぬ戀をして』

『身はぬれ髪のとりどころなき』――とか
『魚の骨舐ぶるまでの老を見て』
『能登の七尾の冬は住み憂き』――とか、
さういへば七尾など邊鄙な地名をよむのもおもしろい。なんでも月なみは、いちばんおもしろくねえ、德川末期の梅室なんぞがさうだ。技巧でも妙にこらずにさういへばさつきの千代女の句でもさらりと、
『ほととぎすほととぎすとて明けにけり』
これなんかは千代女が相手にされずほととぎすの句をつくりつづけて夜をあかしたので、はじめていい句になつたのだな」――

昭和十五年(一九四〇年)十二月八日

「なに、『殘り火や赤さわびしき夜ふけかな』か。「や」と「かな」の重複はとん

でもねえ。「や」は「の」とするんだな」——
いかにわれわれが初心者であつたかが知られるであらう。聴き手の駄句をくりかへさずに、露伴の評だけをしばらくあげてみるならば、
「菊の花は落ちねえものだ。かういふのを實相違背（じつさうゐはい）といふ」
「鐵門は營門の意味にァならねえ」
「犬は戶迷（とまど）ひはしねえものだ」
「『からころと響く』ぢやあ重複だ」
「『下駄の齒に蹴られて光る霜柱』ぢやあ句の切れがないし、川柳だ。どこかで『光りぬ』のやうに切れてなきやあ」
「『埋火』は『うもれ火』より『うづみ火』とよむのがふつうだ。火鉢よりもここは火桶だな。『思ふこと積んではくづす炭火かな』といふ句がある」
「ちやんちやんこは言葉としてまづい。袖なし羽織、を略して袖なしとでもしてみるか」

「しもやけは作るものぢやない、できるものだ」
「言葉の參酌といふことがある。縁起のわるい言葉は、つかふところをわきまへなきやあいけねえ」
「『早梅のふと目にとまるいで湯かな』か、この「ふと」がへんだ」
「『や――けり』もいけない、一つのことが二つになりやすいからだ。『や――かな』『や――けり』『や――たり』みなをかしい。かういふ二段切れは避けるにこしたことはない。もつとも二段が三段切れになつても、それだけ風情がゆたかになれば又べつだ」
「禿鷹は日本にアさうゐねえものだ」
「冬の蠅は『にくまれて長らふるひと冬の蠅』といふ使ひかたがある」
「ただご尤もといふ句はいつかうおもしろくねえ」
「『手水鉢こほる柄杓の引きかげん』。おもしろいが、云はんとほつして云ふあたはざるところが物たりない。引きかげんにとくに工夫がほしい」

「凍つた手拭ひを、はづすといふのはをかしいぞ」

「しぐれの種類は、初しぐれ、朝しぐれ、小夜しぐれ、むらしぐれなどいろいろある。かつて日光で

『賢人の片袖ぬらすしぐれかな』（露伴）

これは陽明門の彫物の賢人だ」――

「『借金を瀬戸からぬけて踊りかな』は、いかにも昔の句らしいおもしろい句だがかういふのが發句にならないのは格がひくいからだ」

「讀みあやまりは誰にもある。其角の『柴の戸や錠のさされて冬の月』これは『此（この）木戸（きど）』すなはち城（しろ）の木戸が月下に頑としてゐるのがおもしろいのを、芭蕉が「しばの戸」と讀みあやまつたのだ」――

○昭和十五年（一九四〇年）十二月十六日

「いい句でも「や」なり「かな」なり切れ字がなければ雜俳となつてしまふ。俳句は雜俳とはべつだ。「きれ字」とはいやな言葉だが、そこで一句がシャンとなる。きれ字はこだはるにはおよばないが、やはり從ふべきものだ」

「『年くれぬ數へたうなき齡かな』これでは「ぬ」と「かな」が例の二段切れだ。よろしくない」

「塵塚に一年の塵をすてたといふのは「一年の塵」が大げさすぎる。處實の境の微妙さを知らなきやいけない」

「『年の瀨や琴をつまびく誰が家』か。うむ、これは「たれが家」では小さいから、誰さんのお邸といふふうにして「たれ殿の家」とするとずつとちがふ。琴をつまびくはをかしい、琴はひくかしらべるかだ。「年の瀨」よりも、年末ことに大晦日の夜はおちついた家はめつたにないのだから、そのときおちついて琴をひいてゐるといふそのおもしろさをあらはすには、「年の夜」とでもするはうがはるかにふくみがある。そこで、

『誰(たれ)どのの家(いへ)ぞ琴ひく年の夜(よる)』

と、かうすればよからう」――

このやうに露伴は、われわれの句の格や位や調子を、しばしば見ちがへるほど引きあげてくれた。このときは奥書に「有閑三章」として「星」「月」「日」の位の三句をかき、私の弟や從弟たちが拔かれて大いによろこんだ。私は俳句はへたで、このときもその後も拔かれたことの最も少ない一人であつた。右の「誰殿の」の原句は從弟の作である。「誰殿の」はこのとき「月位」となり、「日位」になつたのは、べつな從弟の

『みいくさは三年つづきぬ年のくれ』

といふのであつた。原句のままである。

「これはおのづからすなほに柄も大きくよめた。かういふ句が出ると大關がゆるぎでたやうなものだ」

と露伴は大いにほめた。日華事變の三年目であつた。

「着想がいい。もし自分と同じやうな句を誰かがよんだら、さういふのはいはば類想だからその場合は自分の着想が至らないことを思はなきやいけない。調子といふものもたいせつだ。いつたい詩歌は、理るのでなく調べるものだ。琴のしらべの、あのしらべるのだ。……」

「煤拂ひのすんだあとで花を活けたといふこれはただ「花」では漠然としすぎてゐる」

「福引で箪笥をねらふ連中などは着想が下品だ。雑俳だ。それに福引はだいたい春だ」

「けふはひとつ席題をしてみよう。もつともたぶんかういふ題が出るだらうといふので「孕み句」をしていくことがある。和歌も同じだが「はらみ歌」とはいはないな。ハハハ。例の「歌書よりも軍書にかなし吉野山」わざわざ吉野山まで孕み句をしていつたやうなものだからご苦勞な話だ。いつたい支考の句にアあんまりいいものアねえな。乙由もさうだ」——

郎吟の題は「寒月」であつた。

「『寒月』は『寒の月』といつてもいい。『冬の月』たアちがふ。冬の月は三ケ月にわたるのだ。

『寒月のかけらかじるや鬼瓦』

芭蕉以前のかういふ談林調のアよくねえね」——

露伴が一杯かたむけてこのやうな雑談をするあひだにわれわれ十人ほどの老若男女の聴き手は、何とかいい句をつくりださうとあれこれ苦心するのであつたが、十分、十五分……と時ばかりいたづらにすぎ、露伴はじれつたがつて「さあ、まだかまだか」とうながすのが常であつた。われわれは細長く切つた半紙の短冊を手にして、つひに半時間あまりもすぎてからやうやく三句か五句を差し出すのがせいぜいであつたが、この日露伴はわれわれにまづ相互間で點を入れさせ、そのあとで批評をすることになつた。

『やれ寺の池に光れり寒の月』

『わたどのを行く僧もなし寒の月』

といふ二句が最高點と次點にはいつたが、このやうにたとひ弟子どうしの間でも私の句がいい點をとつたことはその後二度となかつた。

「『やれ寺の』はもう少し點がとれる句だが、『光れり』がまづい、だからこれだけで終つてゐる。『わたどのを』は、寒の月があることはわかるがそれほどのものでもない。「もなし」の「も」も、ぢやアほかに何があつたかと意地わるくも出られかねないし、句作りにはもつと工夫が要る」

ほかの弟子たちの句については

「ふくろふが森になくとはいかにも類想の句だ。猿の聲も同様だ。この「こだませし」の「せし」も、いま反響しているといふ感じがしない。なに、「大川に渡しを待つや寒の月」か、これア夏の月でもよからう」――

私の記錄には「要スル＝露翁ヨリ見レバ高下ナキハズナリ」とある。

○昭和十五年（一九四〇年）十二月二十四日。

前後滿二ヶ年にもおよんだ露伴の俳話をきく集まりは、この最初のころが最も規則的にほぼ一週間ごとにおこなはれた。「冬季雜吟」のいはば宿題にも少しづつなれてくるにしたがつて、私らは、否、少くとも私は、多忙なままに、又俳句にたいするある先入主のままに、ちやうど一夜づけの試驗勉强のやうなあはただしい句作りをしては露伴宅に行つたのは、いま思つても申譯なくかつ慚愧にたへないことである。私はまづ拙句について露伴からうけた二三の言葉をあげよう。

「すきま風だけでは季は十分とはいへない。すきま風は冬の季に、もし入れれば入れられる程度のものだ」

「『坂のうへ思はぬ街の雪見かな』は工夫すれば買へさうな句だが、「坂のうへ」では、街が上にあるやうだ。「坂にして」とでもしてみるか」

「雪の夜に妾宅の塀が蹴あげられるといふのは、妾宅が下品だ。「よい家」とでも

したはうがいい」――

露伴の小説「雪たたき」を私はたぶん思つてよんだのであつた。

「着想は逆にするとおもしろいことがある。これが反對句で、たとへば

『風邪ひきたまふ聲のうつくし』(芭蕉)

これはつまり、風邪をひけば聲がわるくなるはずなのにさうでないので、ふだんはどんなに美しい聲であらうといふところを狙つたもの、反想といつてもいい。もつとも、概して反對句はむづかしいものだが」――

いかにわれわれ初心者たちがおなじ誤りをくりかへしたかは、ふたたび二段切れを避くべきことへの注意の記錄からだけでもうかがはれる。私は露伴の言葉で耳についたことは、誰彼の句をとはずできるだけ書きつけるやうにしてゐた。ノオト整理を當時おこたつたため、今となつては誰の句かわからないものも多く、私自身の句かどうかさへ判然しないものもある。

『『わびしらに』は形狀のわびしさをいひ、『わびしげに』は心のわびしさをい

ふ」

「『むく』では木か鳥かわからない。鳥なら「むくどり」とすることだ」

「花柳街を「はなまち」はいけねえ」

「『冬ざれ』はわからないから避けることだ」

「『初雪や盆にもりたる玉うさぎ』か、「もりたる」では菓子か何かのやうだ、「つくれる」だな。名詞を羅列した句はだいたいよくねえ」

『『春日和江戸より富士を眺めけり』。重韻もこれぢやあおもしろくねえ。重韻は詩ではしばしばおのづから生ずることがある。そのおもしろさはことに杜甫にみられる」

「『寒げいこ籠手をとられる痛さかな』これは「籠手とられたる」だな。ううむ……」

『雪はねかへす竹の一竿』」（露伴の即吟附句か）

「『ぬ』は否定と過去とあるから注意するがいい」

「古歌どりはむづかしい。

『眺むれど花にもいたし頸の骨』（宗因）

昔流のふざけで、西行の歌をとつたものだが、この馬鹿にしたところがをかしい」——

この日露伴は聽き手が出した句集のなかから六句をぬき、「頂戴」としてその下に「耄六」と署名し、六位から一位までを並べかいたが、うち三句は露伴が加朱したものであつた。

『街の灯はみぞれの舗道に光りけり』

といふ私の句はそのままで二位にはいつたが、私は一位になつたことはいちどもなかつた。一位の句は前に「みいくさは」をよんだ從弟の句に露伴が加朱したもので

古枯に椎の大木の黒みかな』

といふのであつた。この從弟は正確にいへば私の從兄の息子で當時たしかまだ早稻田の理工科學生であつたが、老若男女の聽き手のなかでももつとも熱心で、作句

も誰よりもうまかつた。そのうまさには私も感心したが、ひところ短歌會にいくたびか出席したとき感じたのと同樣、私は俳句つくりを遊戲と思ふところを、つひにさいごまで棄てきれなかつた。とくにまだ若い學生の、十德か何かを着こんだやうな身ぶりには、どうしても一緒になれないものをおぼえた。しかし、それはそれとて、露伴の俳話そのものは私にもひじやうにおもしろかつた。それらをノオトにとることにつとめた所以である。右の一位の句に露伴は

『雲みな去つて寥廓（りやうくわく）の天』

と附句した。

「初一念（しよいちねん）（最初の考へ）はわりあひにいいもので、なほすと却つてわるくなることがある」

「大晦日は狂歌にはいいが俳句ではとかく下品になりがちなものだ」

「例の反想はなるべく避けたはうがいい。

『どう見ても雪ほど黒いものはなし』

これは芭蕉以前のふざけた句で、なるほどさういへばさうだが、うむ？　なぜつて雪景色のときはけつきよく雪がいちばん黒いわけだからだが、ともかくかういふへんなのはよくない。すなほに

『門を出づれば雪山に滿つ』

これなど何でもない句だがよろしい。……うむ？　初雪か。さうだな、

『初雪や今年も誇きてかへる』

か。遊ばうと思つても宿直か何かをやらされて家へ歸つたのだが、ちよつとおもしろいだらう。ハハハ。いや、隣りの娘さんだつて見かた使ひかたがあるので

『らうたげに物讀む娘かしづきて』

となればおもしろい。いやいや、わからねえ句はいけねえ。歌にしたつて定家や家隆がわからねえ歌は歌ぢやねえ、ひとり合點だ。それから諸君は俳句にふりがなをつけるがあれアいけねえ」――

○昭和十六年（一九四一年）一月八日

「『願はしからざる言葉』つまり俊成のいふ『庶幾すべからざる言葉』は、用ひちやアいけねえ。わるくはないが決してよくはない、さういふ言葉だ。芭蕉は俗談平語を主張したが、そこには俗談平語をただすやうにといふ含みがあることを忘れないことだ。すがたといふものがたいせつだ。「姿先情後」と芭蕉もいつてゐるやうに、句のすがたがよろしき姿になるやうに注意すべきだ、さうでないといつまでたつても驅けだしの恰好からぬけきれねえ」

「けふは五句をぬいたが一點以上のものがないし、點者のはうからは主座はきめられない。庶幾すべからざる言葉がどうも多いやうだ。「初結の」など今の歳時記にアあるかもしれないが、願はしからざる言葉だな。

「とぼしき川」は水量がない川、あるひはいつそ水があるかないかの川ならば「ありなし川」などといふ言葉がある。

川が「さんざめく」はまるで三味線だな。水がすくなく流れるのなら「さざれ」といふ言葉がある。又「とぼしき」は古くは「うらやましい」の意味だから注意が肝要。これは

『初東風にありなし川もさざれかな』

とでもするのだな。

「屋根々々のいらか」は「家々の」だ。京にしたければ「朱雀路の」とでもしてみるか」

「やぐら太鼓が墨堤の春にひびくは「大河の春」のはうがいい」

「郊外に富士山がクッキリはまるで地圖だ。ただ「門を出づれば富士の山」でいい」

「『松のうち早くもすぎて』は「松のうち過ぎて今年も」だ」――

露伴はぬいた五首に「一花五瓣」とかきそへた。まさりおとりがない意味である。

「句は鍛錬しなけりやあがらねえ。雑兵の矢ばかり射つてもしやうがねえ。このつぎは一つ源平にしてみるか。甲君、乙君がそれぞれ大將になつて味方をあつめるといい。源平あらそひは點の合算で、これは奥ぬきの勝とはまた別だ。——へんな題は、ときにア手柄になつてもたいていは損だ。「鳥總松」なんかさうだ。門松のあとにさす松の殘りをいふのだが。ところで源平のときは敵方にうまい句があると、「感氣あり」などといふ　もちろんふつうは味方を辯護し敵を非難するので、それがいはゆる「難陳」だ。難陳のたつしやな者がそろふと、ときどき勝敗の位置がかはつてくる」

「『梅林や獨りたづぬる雨あがり』『梅林のいまだみえねどかをりけり』（即吟「梅」私の句）かういふのはただご尤もといふばかりだ。もつと出拔けなきやア平凡でおもしろくねえ。見つけものをして、平凡なところは通りぬけるのだ。駿馬とならなきやいけねえ。『暗香浮動す、月の黃昏』これア詩だが、芭蕉がたくみにとつて、『梅が香にのッと出る日の山路かな』

またべつに

『梅白しきのふや鶴をぬすまれて』（芭蕉）

この、梅が白いところにきのふまで鶴がゐたのかしらんといふ、そこがおもしろいのだ。さつきいつた鍛錬をだいじにして鍛冶糞は叩き出さなきやいけねえ。梅林の句はもつとすがたをよくする工夫が必要だ。あれではかをりがあるだけで俳諧の味はねえ。ふむ、これは誰の句だ？　『朝まだき山路を行けば梅かをる』この「行けば」と「かをる」が不要の鍛冶糞だ。丙君も和歌はやつたか。いつたい和歌をやつたひとは動詞などことに長びきがちになりやすいものだ。俳句は長びいては無駄になる。芭蕉の晩年の句には無駄がない。一見無駄のやうにみえても、それはゆめてのどやかにした姿だ。鍛錬が肝心で、おたがひに「芋洗ひ」で攻めあふのだな。「東海を傾けて乾坤をあらはんと欲す」（杜甫）。この意氣、この氣魄を學ばなけりやいけねえ。一句ひとを驚かさずんば、つまり感歎させなけりやあ死んでしまへと杜甫はいつた、その意氣だ。芭蕉も

『荒海や佐渡によこたふ天の川』

じつに大きな氣魄だ」――。

○昭和十六年（一九四一年）一月十九日

この日露伴は句をぬくことをやめて、左のやうな奥書をした。

「情眞にして姿とゝのひたらんは願はし。その然らざるものは人誰かこれを喜ばむ。

十目十指、

公評は敵に在らん」

前述の源平試合のときで、露伴は句集にはこれだけをかき、評はおのおの相手方にまかせよ、すなはち「難陳」でも何でもしあへといつたのである。しかしわれわれは、露伴のまへで難陳などしあふにはけつきよく至らなかつた。あるひはこのと

き出席者が少なくて全體の氣勢が何となくあがらなかつたのでもあらうか。いづれにせよ露伴ほどの者が、親戚のありがたさなればこそこれほどいろいろ心をつかつて俳諧をおもしろくたのしく敎へてくれようとしたのに、われわれはあまりにも不甲斐のない總じて怠惰な弟子どもではあつた。

「桃、花、流、水、鱖、魚、肥」

この七字を露伴は別紙に横がきに書きつらね、その下に選んだ七句をかいた。露伴の娘文子が桃位と肥位とに二句はいつたが、娘の句には露伴はとかく點がからかつたやうに私には思はれた。

『溝川の枸杞青みたり春の雨』

これがこのとき最高位になつた文子の句である。私にはおよそ緣のない世界の句であるが、そのくせ私は例によつて露伴の談話をかくことには熱心であつた。――

「この『白帆あげて岬めぐれば春の富士』だが、かういふのは享保以後には多いが、切れがないから初心者は避けたはうがいい。句情はわかるが。それから『峠茶

屋思はぬ方に春の富士』これも同樣で、やはり句情はあるが、帶ひろはだかで姿がよろしくない。初心者は手足をはつきりさせるべきで、いはゆる「玄妙切れ」などは試みないはうがいい。上達するまでは、ぼんやりのずるずるは、やめるにこしたことはない」

「昔なかつたものをもつてくるものも利口な方法で、誰かの「石垣つくり苺かな」などは、なかなか妙でおもしろい。もつともあれは元來「つくりいちご」と續くべきものだ。あきらかに古人からとつたと思はれるやうな言葉づかひはよろしくない。といつてやたらに言葉を、まして地名などまで變へて、たとへば利根川を「利根の川」などは感心しない。利根の川などどこにも存在しない。「の」といへば「加茂の河原」はいいが、「加茂河原」はいけない。「隅田河原」ならいい」

「湯泉場の春の句ぢやアおれの句に

『湯の村や夢のやうなる春の雪』

といふのがある」

「しもがかるのは感心しない。野雪（嵐雪の弟子）がかういふ句を奥にしてひとつ話となつてゐる。
『元日や餅で押しだす去年ぐそ』
これなど、野雪は元來おとなしい句風のひとなのにどうしたものか」
「蝶のしやれには
『世の中は蝶々とまれかくもあれ』（守武）
これは兎まれ角もあれの洒落ながら、なかなかおもしろい」
「相手方に題を出すのに、「霞」「鶯」はいいが「夜の梅」などは「傍題」になりやすいからよくない。また題がない結果となる「落題」はもちろんよくない」
「短冊を手にして墨をするときは三すり半ときまつてゐる。その間に句を考へてしまふのだ。「半」で、墨が硯の中ほどにとまるわけだ。あまり遲吟はよくない。句會ことに狂歌の會などでは兩側から一人づつ出てきて、伏せた題を師匠があけたとたんに詠みあふこともある」

「『春寒き案頭詩巻俳書かな』か。これは『小室詩巻薬爐かな』とでもするはうがいい」

「切れがなくても

『ぼたぼたと椿の落つるおぼろ月』(園水)

園水は西鶴の弟子で、これなど切れがないやうだがわるい句ではない」

「ふるい洒落は今は通じない。六の字づくしなどといふのがあり、助六、双六、兵六など六の句をよみあふのがこれだ。双六か？　酒屋の亭主だ」――

○昭和十六年(一九四一年)二月一日

「ハハハ『鶯や眼かへせば春の雲』ぢやあ鶯がまなこをかへすやうだ。英雄ぢやああるめえし、鶯が頭をめぐらすものか。『かすみにむすぶ鶯の聲』(西行)などは、霞が黄粉ぢやあるまいしと思はれるかもしれないが、うまい云ひかただ。かう

いふのはむやみに眞似しちやアいけねえ」

「願はしからざる言葉があひかはらず多いな。この「筧水」それからこつちの「かげろへり」などさうだ。いはゆる「不束」だな」

「『春の夜や新内流す加茂河原』か、この間君は居なかつたか、「加茂の河原」と云ひならはしてゐるものを勝手につめちやいけねえ。又これぢや夜が新内を流してゐるやうで、かういふ自他の分明のないのもよくねえ。大文字や大文字山も感心しない。だいたい大文字はお盆のお精靈さまに緣のあるもので、俳諧では忌まれるものだから、常識からいつても俳諧に大文字山などは甚だよろしくねえ。それに大文字の火なら夏だ。「加茂河原」のやうなのは「てづつ」といつてむりにつめた感じがあり、「春若芽」「木の芽谷」などもさうだ。「春の若芽」「木の芽の谷」だ。さつきの「かげろへり」だがこれは「墓も卒塔婆も」がへんだ。ほかにもゆらぐものはあるのに墓をもちだすところにむりがある。『塔にのぼれば甍十萬かすみけり』猿ぢやあるめえし、塔にのぼるはをかしい。それに塔といへば佛塔の感じだ。また何

ものぼらなくつたつて甍はかすむし、それくらゐならむしろ三越の屋上あたりのはうがいい。いまの歳時記には願はしからざる言葉がよくあるから注意するがいい『爆音はかなたに消えぬ春霞』か。爆音ぢやあ飛行機か自動車かモオタア船かわからねえ。「かなたに消えぬ」も速力がのろくてまだるつこい、これア『飛行機のあと一天のかすみかな』とでもするか、あるひは『飛行機の見る見るかすみかすみけり』とすれば韻律などもおもしろくなる。韻律といやアこの『燈臺の白の著さよ春の海』などはむしろ『燈臺の眞白う春の海靑し』としたはうがいい。『春の海白帆につづく白帆かな』か、これア白帆は元來風が變るときにつづくものだ。海も潮としたはうがましだ。揃ふものは、ときに「揃はで」と逆にするのも却つておもしろい。「揃はで」といつてもやはり揃つてゐる。だから並木など「揃はで」のはうがときにアはるかにおもしろいのだ」「『鶯に迎へられたる湯宿かな』これぢやあ鶯が番頭か亭主だ。『導かれたる湯倉か

な」とでもするのだな。『朝日さす梢にあかき木の芽かな』は、赤いところを見つけたのは結構だが、これだけぢやァ何の梢かわからねえ」
「おだやかな日に、この、海苔が流れるといふのはをかしい。おだやかな日にァ海苔は流れねえものだ。また「ながれのり」は海苔のなかでもいいものだからめつたに流すはずもねえ」
「『三原山煙はきえて霞かな』これァ煙がパタッときえたやうだ。句柄の大きいのはけつかうだが、つまりこつちから大島を眺めるわけだから
『大島の煙もたたで霞かな』
いや「たたで」は「見えで」や「とけて」でもいい。動詞でなく「けふは」「春は」としてもよからう。「煙はなぎて」でもいいだらう。ともかく。寫眞機のありどころをかへるやうに句は鍛錬しなきやいけねえ。……これァ、やはり「煙もとけて」かな」
「『かげろふの中にゐすわる乞食かな』……ハハハこりや珍だ。どうしても戸塚の大

ぎんたまを思ひだす。戸塚に大睪丸で動けない乞食和尚がゐた。幕末の、繪などにもかかれた有名な「乞食桃水（たうすゐ）」又は「戸塚の大ぎんたま」だ。この句はさういふをかしみがあるから、なんとか工夫をしよう、「ゐすわる」を「いしかる」とすればもつと強くなるが、ハハハ。それとも「居ねむる」にするかな。ともかく、いろいろ動かしてみることが肝要だ。いはゆる「ためて見る」といふので、ためて見たあとでやはり初めのはうがいいこともあるが、なほしたはうがふつうはもちろんいい。例の鍛錬だが、句を作つたあとで動かすにも、いつたい柄の小さい句は動きの餘地もすくないものだ。『かげろふに屁をこきまぜる乞食かな』これは談林風の滑稽で、ちよつと古歌どりのやうでもある。ところで、……むづかしい、まづ

『かげろふのもゆる乞食の手先かな』

とでもするか」

「さつき『梢にあかき木の芽かな』を『樟（くす）の芽赤し山の峽（かひ）』としてみたが、樟は遅いものからやつぱり別の木のはうがいい」

「かげろふと巡禮では古句に『巡禮死ぬる道のかげろふ』といふのがある、この「道」がうまいのだ」

「うむ、甲君は入營か、それぢやアこの次はみんな送別の句をよむがいい。ぢかに「悲しい」とか「御無事で」といふんぢやいい句にアならない、入營にも季は要る。『物かいて扇ひきさく別れかな』か、ハハハ、餞別に一句かいて渡さうとしてうまくかけず引つ裂くのだ、ハハハ」

「『歩きだす』ことが、たいせつだ。いきなり端的にいい句ができるといふこともむろんあるが、これアまづよほどえらくなつてからのことだ。こねくることは、芭蕉もいつてゐるやうにまくはなし、又いつかの初一念といふこともあるが、しかし工夫は怠つちやいけねえ。ほととぎすの句なら、ほととぎすが飛ぶところ鳴くところを見るか聞くか想像するかして、また花なら花にまづレンズをむけたらシャッタアをあけるまへに工夫しなきやいけねえ。句は、はつきりしたのもよし、幽玄なのもいいが、歩いて、動いて、ためて見る、さういふ工夫や鍛錬が必要だ。かうして

句ができて、それにみづから確信がもてたらいいのだ。もつともいくら確信があつても道理にはづれちや困る。又、はつきりといつても法律や算術とはちがふ、算術の答はふつう一つだが、詩歌には數かぎりなくある。明の某は詩經の註の詳しいのをつくつたが、この註をみて金銀七寶づくめながら得體が知れないと評した者がある。工夫も、ただやたらにこらすのぢやおもしろくない、といつて安全確實ばかりでもつまらず、しかも不細工アもとよりよろしくねえ。

『並みたてる松の下枝をくもでにて

かすみわたれる天の橋立』（俊頼）

これは天ノ橋立の霞の景で、松の下枝を橋の「くもで」にたとへたもの、くもでは橋桁の、蜘蛛の巣のやうに放射狀に橋板をささへてゐるところだが、この歌はいはゆる「詠みあはせてゐる歌」で、どの部分も引きぬきやうがない。そこがたいせつだ。景色はおなじでも、寫眞機の向けかたで變つてくるのだ。無駄はいけねえ、かぢくそはとばしちまへ。「かげろふの中に」は「の中」がかぢくそで要らねえ。

又こねかへすのは、ことに古いものをこねかへすのは、損だ。寺なんぞも芭蕉以前にさんざんつかはれてゐる。しづが家、あだし野、などもさうだ。獸でいへば狐なんぞは蕪村がもう使ひつくしてゐる。生きものでない道具も同樣だ。もつとも新らしくてもスキイで轉んだなんぞは一向おもしろくねえな。古いものでも、それ自體がわるいわけぢやなく、使はれつくしたのが物たりないので、そこをすぎると、たとへばあだし野なんか今の和歌にやアめつたに使ふひともねえ。ともかく古いのは、たとへば「わさびが芽ふく」なんざあさつぱりおもしろくねえ、考へが古いのだ。變つたものも、平句なら燒場などおもしろいが、しかし平句は妙なふうになりやすいものだ。

順序もたいせつで、「雪殘る」ぢやあよくねえ。「殘る雪」または「ざんせつ」だな。

組みあはせもだいじで、「わさび」なら「皿」といふ字をいれるとおもしろくなる。「芽ふく」も、「ふきのたふ」なんぞならいい。さつきの流れ海苔だが、海苔

や茶と同じく芽先がだいじなものだから、業者がやたらに流すわけがねえ。流れてきたのを漁師がひろふと、まづ客のところへ、それから料理屋へもつていくのがふつうだ。海苔屋へなどけつしてもつていくもんぢやねえ。すべて、事情を知ることがたいせつだ。其角などはここの邊がなかなかうまかつた。だから、――ともかく宗匠になるのは、苦勞もよほど積んでからでねえといけねえ。いまどきの宗匠のなかにア書生俳諧流の淺い者もかなり見かけられるやうだ。新歳時記などに注意が要るのもそこだ」――

○昭和十六年（一九四一年）二月十日

「ききどころがキツカリきいてないのはよくない。『吹きくれて川音しげき柳かな』ぢや、ききどころがあいまいだ。『すて舟のそのまま暮るる柳かな』このはうが句情はいい。だが「すて舟」は「すたり舟」だな。漕ぎすてられたとしてみても「す

て舟」ではよくないことがわかるだらう。「朽ち舟」も感心しない」

「『ひたき』は俳諧では『馬鹿ッ鳥』といはれてゐる」

「檀林（談林）とは、もとはお寺の學校の意味だ、俳諧では談林とも俳談林ともいふ」

「庶幾すべからざる言葉がまだまだ多い。八卦見を『うらなひ』とはいへない。うらなひ者が『陣取る』などもおもしろくない」

「花吹雪が山になるなんぞはをかしい。物を逆にいつて「雨白く櫻けぶる」などとやつて曲をだすこともあるが、花吹雪の山はへんだ。それから、蝶が迷ひ入るなんぞは類想的だから、よつぽど工夫しないとおもしろくない。

春の夜にあかず語らふなどもずゐぶん變だ。これア秋だ。春宵は短い。それから、この「青柳」を、「あをやなぎ」と讀めといふのはむりだ。理くつではなく、慣はしだ。この「ふくべを枕」なども氣どりすぎてをかしい。江戸時代の花見なら樽を枕だ。句がわれてゐるのもよくない。どつちが主ともつかない二つ重點がある

やうな「われる」のはよくない。

「綾を織る」などはいかにも類想的だ。うむ、『行く舟を柳のまねく日ぐれかな』これは句情はいいが、何か故事でもあるやうであいまいだ。つぎもまた柳か？　この「芽柳」はまだ葉になつてない柳のことだ、これは生かすのはむづかしい。つぎは紅椿か。「紅」とことわらなくてもいい。椿はたいてい紅い。白椿ならばことわるのだ。また椿は「散る」のぢやない、「落ちる」のだ、散るといふ言葉にはもつと輕い感じのものがほしい。

あまりあれこれとりいれようとしてはいけない。『牛の背をこえゆく蝶や畑かすむ』これなどはさつきの「われる」句だ。霞はいらない。次もまた蝶の句か。ひなげしを蝶と見まがふなどはよくない。ひなげしでなく、ただ「けし」の花だ。芭蕉の句もあるし、注意すべきだ。

『長安の大道柳々かな』は、「やなぎやなぎかな」はちよつとおもしろいが、なにも長安などにする必要はない。

「信濃の國境」では、甲斐との境か越後との境かわからない。また「遙かかな」などといふ言葉はむりだ。庶幾すべからざる言葉では、この「乏しら」などもさうだ。また、妙なならべかたはいけない。花の雲を凌ぐ天主閣などは、さつぱりおもしろくない。わからない句には前書きが必要だが、しかしおのづからさういふ句ができたとき前書きをそへるので、その逆ぢやアない。

鴫立澤（しぎたつさわ）を地名にしてはいかん。西行のは、しぎ立つ澤だ。

柳の糸がそろふなどは、揃ふことのおもしろさがなかなか出るものでない。つぎもまた蝶か？　蝶が湯宿に迷ふなどは感心しない。

古句に『湯の宿や凪も螢も通りぬけ』春の季ではないが、かうなるとおもしろい」――

依然私がいかに俳句つくりが拙なかつたかは、このときも『常陸より歸れば江戸は櫻かな』といふ一句が、まだしもましなはうだつたことによつても知られるであらう。にいはり筑波の故事や櫻が三日で散ることなどもあつて句としてはおもしろ

いがしかし前書きが要ると露伴は云つた。のちにも兩三度、この句は引きあひに出されたことがある。弟たちは、何々すれば何々かなといふ句が私に多いといつて、これを「れば句」と揶揄した。なほ私がこのときうけた注意を一括すれば「『柳影』は願はしからざる言葉だ。酒に「柳影」といふ名のがある。「心なや」もよくない。「花つなぎ」も感心しない。「櫻三日の長さ」と逆にいつたのは故事もあるまいのにへんな句作りだ」

末弟の入營を送る句では、伯母の一人がよんだ

『海を山を勇ましく飛べよつばくらめ』

が選ばれ、「ともかくこれは「びたつき」でなく離れてゐるところがよろしい」

といはれた。

「送る又別れるといふときは、なるべく何かになぞらへて離れてよむがいい、直接送る別れる悲しいお名殘惜しいではさつぱりおもしろくない」

「言葉をつくるのは、元來だれでもがむやみにやるべきことではない。『日盛りや

歩き神つくうねり傘』この「歩き神」などといふものはもともとないが、ともかく凡人がやたらに造語するのはいけねえ。造語に凝りすぎるとひとり合點になるばかりだ。新しいものは言葉でも題材でも、ともかく昔はないのだからとくはたしかにとくだが、しかしよつぽど注意が肝要だ。ひとり合點ぢやあつまらねえ。いつたい自他の區別は、もとはずゐぶんやかましくいはれたもので、ことに初心者は氣をつけなきやいけねえ。かういふことなども、古人の句をたくさんよめばおのづから會得できるやうになる。ともかく俳句は古人の句を數多くよめばしだいにうまくなる。よんでもわからねえ句は致しかたないとして「あゝうまい」と思つたらそれを書きぬき、その書きぬいた句がすこしづつ千句もたまつていけばおのづとうまくなる。我流の手習ひは上達が困難なものだ。――はじめはよくわからなくても、なんでもかまはず讀むはうがいい。「朝顏につるべとられて」や「井の端の櫻あやふし」などに最初は感心してゐてもしだいにさうでなくなる。我流は、さうたうな所までいつた者でもなほへんにかたまりやすい。『春雨や枕くづるる謠本』（支考）「枕

本」といふ名の本もあり、これァうまい句だ。しかし支考は芭蕉が死んでからはまづくなつた」

「新しいのと反對に、わざと古い言葉を萬葉などからとり出してくる手もある。古いもの、耳なじまないものもときにはいい。うむ？　「すぐろ野」は、燒野原、ことに薄の末が黑く燒けてゐる野だ」

「席題は『餘寒』。「春寒」もおなじことだ。「冴えかへる」もよからう、これは寒さのぶりかへしだ。……さあまだか、西行法師はおそろしく早く作つて人々のさまたげをしたくらゐだといふ。……さあ、茶がさめるぞ、『うづくまる藥鑵の下の寒さかな』（丈草）これァいい句で、芭蕉も感心した。……さあまだか、あんまりむづかしくしなくつたつていい。『須磨のあまの矢先になくやほととぎす』須磨に鳥捕りの仕掛矢があるので、これなどは前書きがなきやァわからねえ。いつたい前書きが要るやうな句はなるべく避けたはうがよく、ことに大勢ゐるとき自分だけまへ書きをつけるなあ感心しねえ。おどかしもいけねえ、『閻王の口や牡丹を吐かん

とす』ゑん王はゑんま王、牡丹は植物の王とされるのでかうなるのだが、こけおどかしの句だ。さあまだか。……ところでつぎの宿題は「中春亂題」とするか、さう、「雜吟」といつてもよし「雜詠」でもよし、だがだいたい「雜吟」は感心しねえ言葉だな」――

○昭和十六年（一九四一年）二月二十二日

「こんどア拔いた句が多い。直さなきやアならねえ句も少なくなつたし、めいめいの句の出來ぐあひのひらきもつまつたし大いにけつかうだ。
　だがやつぱり惡いはうから云つていかうか。
『雲端に雲雀のぼりて聲となり』この「聲となり」がわからねえ。
「ひなまつり」は、今は誰でもつかふが、元來は感心しねえ。「ひいなあそび」ならいい。祭るには、祭るべきものがあるはずだ。

夜店は「ひやかす」のぢやねえ、「あさる」のだ。ひやかすのは遊廓だ。

ひばりが、渡し舟をまつ間を「つなぐ」つてえのはよくねえ。また「春光や」といふ呼びかけもをかしい。『住みなれし山家去る夜やきぎす鳴く』これア去る人が定住してゐたのか假りずまひか、また雉も去つていくのか、わからねえ。『花咲くや二階より見る人の數』二階よりはをかしい、樓なりたかどのなりが來るところだ。

ひばりを聞くのに「磯山」はへんだ。

玄關に「朱履の數」もをかしい。玉のくつならいざしらず、朱いくつなんぞアめつたに見かけるもんぢやねえ。

「くすし」ぢやア醫者か藥屋かわからねえ。

「遠山裾」なんぞア庶幾すべからざる言葉、書生俳諧だな。

いまの歳時記は、行事も氣をつけて使はなきやいけねえ。

躑躅にア古來佳句がすくない。つかまへどころがむづかしいのだ。黄水仙もおも

しろくねえ。水仙は、芯は黄色いが花は白い。黄色いのア西洋流だ。

「黒堤のおぼろ月夜や四ッ手網」これア「くえ土手の」つまり壊えんとしてゐるはうが味があり、また四ッ手網をうつよりも鰻をすくふはうがおもしろい。

また「雛まつり」か。まつるのアふつう神さまをまつるのだ。「古雛」より「昔雛」のはうがいい。ひなは灯がつくとおもしろいものだが、そこをよむのアなかなかむづかしい。

芭蕉の弟子の路通は乞食をしてゐたのが芭蕉の弟子となつたもののやつぱり食へないので芭蕉の僞筆を賣つた、とさう綾足はかいてゐるがつくり話だらう。

「雪涅槃」なんぞアいけねえ。庶幾すべからざることばだ。塔婆もいけねえ。椿の毒々しく黒ずんでゐるなんぞもおもしろくねえ。元來これらは吟じてはならねえといふのではないがどうも感心しねえ」——

露伴はめづらしく十句をぬき、「頂戴」として下に「露」の一字をかき、十句をつらねた各句のうへに左の十字をしるした。

「柳塘春水漫花塢夕陽遲」

「塘」は水のそばの堤、「塢」は水のない堤で、「柳塘春水ゆるうして花塢夕陽おそし」とよむ。「夕陽がおそい」などといふのが唐詩のなかなかうまい使ひかただと露伴はいつた。文子の話によれば、この奥拔の筆を露伴がとつてゐるときたまま齋藤茂吉氏がたづねてきて十句をかきうつしていかれたさうである。われわれはこのことをきいて大いに氣をよくしたが、じつは、十句中六句までは露伴の朱筆が加はつてゐたのである。「春」位になつた伯母の一人は、『加茂川や友禪さらす水の春』を「よくぞ『春の水』とせず『水の春』とやつた」といはれて大とくいであつたが類句があるさうである。原句は「加茂川に」であつたが、「に」と「や」ではいかに大きな相違があることか。「漫」位の弟の句『信濃より越へ一はき霞かな』は、露伴の「春霞國のへだてはなかりけり」からの着想であるが、原句は「越後へ」であり、その他又もや「柳々かな」などもあり、露伴の好意ある言葉にもかかはらず聽き手の進歩の程度もうかがはれるであらう。最高位の「遲」位をしめたべつの

弟の句は、もとは『筏師の鳶口に散る櫻かな』といふのであつたが、おなじ着想が露伴の手にかかると

『筏師の水竿露ちる櫻かな』

となつたのである。すべて推すべきであらう。――

「『越後へ』を『越へひと刷き』としてみたが昔のひとなら「はきこす」意味で、「一はき越へ」とやるだらう。順序が逆で、そこが新風と舊派とのちがひだ。また筏の句はああ直すと眺めも韻律などもすつかりかはつてくる。『碧き淵いこふ筏や』といふのもあつたが、筏はとまることが少いものだから、いこうてゐてはおもしろくない。筏場といつて最後に止まる所までは、筏は乗る人が變つてもとまらないやうに流すものだ」――

私はこれらの話をききながら、席題などはほとんどそつちのけにして、おもしろい言葉をノオトにひろひつづけた。

「仙人の洞窟のまへに白梅があつて、水がその洞から桃をうかべて流れてくるの

らしくなるので、こゝらが中國人のつかまへどころだ。例の工夫だ。同様に、白蓮も碧蓮とすれば、またべつなおもむきがでてくる。――盆栽の梅を「盆梅」なんざあいけねえ、ハハハ」

「馬上、厠上、船上、の「三上」は詩をつくるのにいいといはれるが、信玄の雪隱は疊敷で、信玄はよく考へごとをしたため長かつたといふ。家來どもがこの雪隱を「山」とよんだのは、草木（臭き）があるといふ洒落だ、ハハハ」

「年中行事では、ことに今おこなはれないものには注意すべきで、左義長なんぞアそこらの街なかではわかりつこないはずから、やたらによむのは感心しねえ」

「わからねえのはすべてよくねえ。田鼠化して鴽となる、から、『鴽とふ鼠も花にうかれたり』だが、とくに幕末の句なんざあ寢言みてえなのがよくある。そんなのア三十年もたてばわからなくなる」

「點者は元來抜きながら誰の句かなんぞと思つちやあいけねえ。さういふ思ひはす

ぐ打ち消さなきやアほんとの點者にやアなれねえ」

「俳諧連歌ぢやあ暦の月をひじやうに嚴格にいふことがあるが、これア程々にすべきだな。また大勢で俳諧連歌をするときア、順廻しにしちやアたいへんだから「出勝」（早い者勝）にする、さうなると又調子が出てきて、「今夜は二巻まかう」なんぞとなつてくるが、又さうなつてくると平句（第二句以後）にアずゐぶん奇妙なのが出てくる。すべてが程の問題だな」

「およそ上座といふものがあるため、めんだうなことも出てくるので、たとへば第五句を月なら月ときめたとき、第三句の者が意地わるく月をよんでも宗匠がそれを認めればそのままとなる。大勢のときは誰が何番目と前もつてほぼきめておくものだのにかういふ意地わるが出てくる。また表六句をすぎれば、もう戀の句もよろしとなるので、ここで大手柄をしようと、前の句を蹴る者も出てくる。さうなるともうその先は試合一方だが、あとの句の方がよけりやしやうがねえ。たとへば『床ふけて語ればいとこなる男』

『緣さまたげの怨み殘りし』

なんぞまるで小說みたいなよみかただ。みんな趣向をこらしたり目先をかへたりして波はうとするので興に乘じては「夜ふけて歸る俳諧師」といふことにもなるわけだ。

もちろんいつもそんな浮いたのばつかりぢやねえ。

『棄てし子は柴かるたけにのびつらん』

『みそかを寒く刀賣る年』

なんぞアじつに味がある。浪人の寒げなありさまだな。

『襟に高尾が片袖を解く』

若えときア芭蕉も高尾の袖のえりまきたア豪勢だ、ハハハ。うむ、平句なら代用食なんぞでもかまはねえ。もつとも、いまは發句が墮落して平句になつてゐるともみられるな。

故事などの妙なのを引つぱりだしてこられちやア堪つたもんぢやねえ。

『口惜しや強根（瘤）をちぎる力なし』

これァ故事ぢやないが、へんなのをひつぱりだした例だ。その一方には

『わが月いでゝ身はおぼろなる』

月の座へきてよんだもので、何でもないがいい句だ。

『初戀の花ものいはで別れけり』

これなんざァ異例の發句だ。戀で三十六番やつたものの發句だが、しかし異例の句がよそにあつてももともと規則は俳諧をよくするためにできたものだから、初めはすなほに從ふのが本すぢだ。たとへば、はじめまづ春三句、つぎは春をすてて、第五句で月を出すが、かういふとき第四句のものがいきなり秋を出しちやおもしろくねえ。ところが第四句は宗匠とか執筆とか又は手柄のほしくない者に押しつけて第五句のとき自分が月をひつさげて陣張りたがるといふのが人情だ。

なるべくおだやかにすなほなのがいい。

『春めくや人さまざまの伊勢まゐり

さくら咲くなか馬長く連れ』

これなんぞアおもしろい。

俳諧師の名は、とかくわからないのが多い。諸君も、あんまりへんな俳名は避けるべきだ。川柳のとくいだつたのに雲鼓といふ者がゐるが、どうかと思ふ。雲鼓は俳句もよんだ。繪かきでは何村などはよくないといはれる。梅村、櫻村といふ兄弟の繪は語呂が倍損大損だからさつぱり賣れなかつたさうだ、ハハハ。女子も何女とアかぎらない、秋色、菊舍などといふのもある。ま、俳諧師は、何々庵何々、または何々齋何々あたりがまづふつうだな。それにしても妙な名の多いのが俳諧師の特徴で、其角などといふ名はよくわからない。蕪村もさうだ。いや諸君はめいめい自分で自由につけたらよからう。なに狸村？　ちよつとをかしいな。ぷふう、こんやは寒い

『みぞるるや狸のきんたま二疊敷』か。寒いから二疊敷だ。ハハハ。」――

○昭和十六年（一九四一年）三月四日

「石切りの音がやんで山静かなり、といふやうなのはむしろ反對にすべきだ。つまり石の音がしてゐればこそ山の靜けさは又却つて一しほなものがあるので、唐詩の「鳥啼いて山さらに幽なり」を思ふべきだ。もしこれが「一鳥なかず、山さらに幽なり」ではすこしもおもしろくない」

「『春の雨むかしの反故を見る夜かな』は、なぜ夜だかわからない。「見たりけり」でいい。また反故を見るといふ考へも古い」

「『返したや手折りしのちの初櫻』か。かういふ狙ひでは「云ひ了せる」ことがむづかしい。つぎは『菊の苗かならずわけてと彼岸まへ』、こりや川柳だ」

「歳時記をぶちまけたやうな句は、はきだめをひつくりかへしたやうなものだ。この『すぐろ野の雉たつ丘のしどみかな』など、ただごとただごとしてゐる。いつたい句情そのものがおからないのは仕方がないとして、言葉が不十分でわからないのはお

もしろくない。「屋臺」は俳諧では「踊り屋臺」としなけりやあ、また「とかげ」は「這ふ」ぢやいかん、あれは「とりかける」が「とかげ」となつたのだから「走る」だ。身延の古寺ぢやおもしろくない、奥の院とすれば、身延の奥の院は妙見山だから、味が加はつてくる」

「分裂はいけない。『永き日をかげりて寒き寢ざめかな』は、すつかりわれてゐる。『櫻餅味はふ武士や長命寺』わけがわからない。餅を味はふ武士が櫻の散るやうに短命なのかと思ふと長命寺ときた。『長き日や棹さしのぼるうららかさ』は、どこを棹さしのぼるのか。「長き日」と「うららかさ」も重複だ。『霞たつ野末の草や露光る』は、ばかに目がいいな。それにやたらにごたついてゐる…」

これらの句の作者は前述のやうに名の判然してゐる者とさうでない者とあるが、もとより名をあげる必要もない。ただのちにきいたことだが、露伴の娘文子は「露」といふ字は遠慮して使はなかつた由ゆゑ、右の「露光る」ごとき文字づかひの句が文子の句でないことだけはたしかである。同時にわれわれの勉强や進步が露伴にと

つてさぞ腹立たしかつたらうほど春日遲々としてゐたこともたしかである。――
「俳諧は、自然を描くのにただそのとほりぢやア感心しない。工夫だ、工夫だ。はづれるのはいけない。『つり舟のゆくてはかすむ河口かな』は、霞が題だから

『つり舟のゆくて河口の霞かな』

とするのだな。それからこつちの句だが、田螺が舟の中にゐるなんざァいけねえ。田螺は舟底なんぞにア住まねえものだ」

「俳諧はちよつとでも前の句のことをくりかへしてよむんぢやア腕はあがらねえ。さういふのを「輪廻」といふ。これは絶對に避けるべきで、りんねに迷ふんぢやアいけねえ。ことに附けあひの俳諧では第一句のあとに第二句をはさんで第三句が卽くのア「觀音びらき」といつてあなどられる。すべて「ふんぎれない」のァいけねえ。また俳諧の雜誌に「連作」といつて一つの題で同じやうな事や物を三句四句五句とつづけてよむのがあるが、あれア元來よくねえ」

「『楢・櫟』『楢・柏』この二つの組みあはせはどつちがいいと思ふ。「ならくぬぎ」

のはうがいい。楢や柏ぢや同類であるうへに「ならがしは」と濁つてつづけてよまれかねない」

「かけことばは、多くのことを少い言葉でいふとき始まつたものと思つて、ただやたらにかけるのアいけねえ。また、例のむやみにへんなものをもち出すのもいけねえ。『紅梅やかのぎんかうが唐ごろも』かういふのア變なものをもちだして、説明して人をへこまさうといふので貞徳流だ。「みなしぐり（虚栗）」の時代にア唐の物などやたらにもちだして凹ますことがはやつたが、芭蕉にいたつておとなしくなつた」

「無心所着體といふものがある。心なく着くところなきもので、もとは和歌のはうで、ごたごたしたもりだくさんのものをいふ。たとへば

『わが戀は障子の引き手峯の松
　火うち袋に鶯の聲』

なんざア何のこつたかわけがわからねえ。こんなのア作らうつたつてさう作れる

もんぢやねえ」――

この日われわれは露伴の家で「雞冠石（けいくわんせき）」といふ石をみせてもらつた。中國産の朱い色の石塊で、一部は風化してゐたが、風化してゐないところは血肉さながらの不氣味なななまなましさがあり、風化してゐる部分も紅味をおびた樺色であつた。この石はうはばみが忌み嫌ふ石ださうで、粉に碎いたものを印籠にいれてたづさへてゐると、うはばみが怖れて近づかないといふ。またこの石は年月とともに目方をましてくる不氣味な性質があるさうで、事實昭和九年（一九三四年）に一貫二一一匁七分あつたのが、その後わづかづつながら年ごとに重さをましてきているといふことであつた。なほこの雞冠石のほかにも「菊石」といふ、赤い花瓣さへまざつた菊花模様のある石、および「末の松山」といふ。山に浪がうちかかつた模様の石などをも見せてもらつた。いづれも有名なものださうである。

○昭和十六年（一九四一年）三月十七日

この日露伴は季吟の著といはれる「誹諧埋木」を示しながら、聴き手の初心者たちのため俳諧系統の雑談から話をはじめた。

「季吟の俳諧のすぢは、まづ祖父の宗龍といふ者が紹巴とともに俳諧をまなんだが、紹巴の弟子に長頭丸すなはち貞徳がある。「長頭丸」は「ちようづまる」とよんだらしい、ともかく貞徳はそのころ天下の大宗匠で、季吟はその弟子となつた。さらに季吟の弟子となつた者に、芭蕉や、芭蕉が仕へた藤堂の殿さま蟬吟公良精がゐるわけだ。

北村季吟はもと近江のひと、家は醫者だつたが京へ出て貞徳のもとに入門、のちには俳諧にも連歌にも和歌にも物語にもあかるくなり、公卿の烏丸光廣が江戸へくだつたとき公儀へ推擧したので、つッかけ五百石の高祿で江戸へ召しよせられた。博覧多識で「源氏物語湖月抄」をはじめ古典の註釋書、また俳諧の方面の著書も少

なくないが、この「誹諧埋木」も、やはり季吟のものらしい。ここ（露伴宅）へ回覧でまはつてきたのだが、よんでみると芭蕉以前の俳諧をつたへてゐるし、たしかに季吟が弟子に傳授した一巻のやうだ。

文字は季吟が書いたものかどうかわからない。それに、いつたい俳諧の書は裝幀など華やかでないのがふつうなのに、この書はさうでない」——

私の記錄は表紙についてはふしぎに何もかいてゐないが、表紙を折り返したいはゆる見返しには金泥に綠色で萩が描かれてゐたこと、また本文の紙は數種の色にわかれて金粉で雲や市松や花などあしらつてあつたことを記してゐる。表紙はこのときあるひは蔽ひ紙でおほはれてでもゐたのか、いづれにせよその目次である「誹諧埋木目錄」は左のごとくである。

誹諧之事。　　六義。　　發句の切字。

本哥之發句。　　脇第三付面八句名殘之裏。

祝言無想之會之心得。　　手爾於葉。

本歌ことわる誹諧。　　　　皮肉骨之誹諧。
眞草行之誹諧。　　　　有文の句作無文の句作。
二五、三四、五二、四三。　親句疎句。
篇序題曲流。　　　　十躰。

「芭蕉の弟子の許六の「歴代滑稽傳」に季吟が「誹諧埋木」を傳授したとあるからどうもほんものらしい」と露伴はいつた。

それから繼紙（つぎがみ）について話があり、京都の田中某が古書模造の大家で、三十六歌仙で知られ、その他御堂關白集や嚴島の願文など巧みに模造したこと、またこんにちでは大塚巧藝社などかなり巧妙であることなどが述べられた。

「だが巧藝社のは機械だ。機械でない繼紙には、繪や箔や泥（でい）の技術が要る。繼紙のことは紫式部もたしか梅枝卷にいつてゐる。繼紙はもとは紙が惜しいところから起つたのだらう。古い本の、虫がつくのをふせぐ一つの方法は、いい墨をつかふことだ。いい墨の書はわりあひ虫にくはれないものだ」

『本歌の發句』などといふことは芭蕉以前のことだ。また發句の切字は、「かな」や「よ」や「れ」――たとへば「散る花をおひかけてゆく嵐かな」「暮れてみようすずみ色の綸旨梹」「わびて折れ七重の腕を八重櫻」……そのほか「よりたまへ」の「へ」、「根なほりそ」の「そ」、「子供生みをけ」の「け」、「祝へや」の「や」、「見るを」の「を」など切字はいろいろある。これらを「かな切れ」「よ字切れ」「れ字切れ」などといふ。前にもいつたが「玄妙切れ」は、初心の者はしないにこしたことはない。

「大廻し切れ」などといふのもあり、「たまりやせぬたまりやいたさぬ花の露」では、はじめの「たまりやせぬ」も、「いたさぬ」と同様「花の露」にかかつてくるのだ。「三段切れ」の例では「咲いてみよ、なゝの香もなじ、梅の花」――かういふのは甚だよろしくない。二字切れも感心せず、「深し、遠し」など「し」が切字になるから注意しなきやいけない。また「ぬ字切れ」には、「了んぬ」のやうに切れるものと、「せぬ」のやうに切字にならないのとあるから氣をつけなきアならない。

古歌どりも昔は多く、

『年を經て花のかがみとなる水は

散りかかるをやくもりといふらん』から

『年をへて坐るや花の鏡餅』

また「人一首でおなじみの歌では「足びきの」とか「なにはがた」とかから

『さみだれや山鳥の尾のじだらでん』

『なにはがた短い鴫のあしべかな』

つまりかういふのは俳諧の初期のころによろこばれたものだ。

「てにをは」ではことに「や」がたいせつで、――「口あひ」の「や」、「切り」の「や」、「棄て」の「や」その他「疑ひの」「中の」「偶の」など、「何とかの『や』がじつにたくさんある。口あひは言葉の調子で、つまり「君や來む」の「や」、「とりの子や」は切れの「や」、「思ひきや」は棄ての「や」、「懐けばや雉も野心うせぬらん」は疑ひの「や」、このやうにいろいろある。それだけに「や」の輕卒なつかひ

かたはくれぐれも愼しむことだ。

句は「こころ」がだいじで、人情の句、自然の句、兩者のまざつた句、といふふうに分けられても、人情ならばまことが、自然ならば景色のいいのが、何よりも詩歌のこころにそふのだ。淸水濱臣も

『言の葉のしげらんのみは甲斐もあらじ
　こころのたねを花になさずば』

といつてゐる。言葉ばかり費してもしやうがない。こころがおもしろくなけりやアならないのだ。

それから「とりはやし」がたいせつだ。うまく配つて表現するのだ。刺身も並べかたがたいせつなやうに、言葉のくばりも、言葉どうし、また内容とも、つりあひがよくとれてゐることが肝心だ。むろん文法にも背かないやうに氣をつけることだ」

「けふは奥ぬきをしないで、鍛錬のいるものには傍點をつけておいた……」

これらの言葉は露伴がわれわれ聴き手の怠惰を、おだやかな表現ながらつよく戒めたものであつたらう。われわれぼんやり者も、さすがにこの日の露伴の何となく不機嫌なのに氣づいて、座がいつものなごやかさとはどこかちがつたものがあつた。しかもそれを又いちはやく感じてわれわれの氣をひきたたせるやうに言葉の調子をかへてくれる露伴でもあつた。

「『奈　にして夢殿にして月おぼろ』これなどは、ぼんやりしてはゐるが何か味がある。一見われてゐるやうだが、さうでないし、うまくとりはやした。まあ幽玄體のはうだな。

「けふは、だがあんまりいいのアねえな。刺身のしかたがどうもまづい。「煙々（けむりけむり）」と重ねるなんぞア「柳々（やなぎやなぎ）」たアちがふ。またこの「歸雁（きがん）」はさう騷がねえもんだ。ぎやあぎやあ啼くのは雁が去るときではなく、來るときだ。「窓の下に種をまく」といふのもどうかな、窓の下ぢやなくつて前だらう。茶の花にア露はさうたまらない。又たまりやア花も落ちまい。「眞砂」は「濱路」のはうがいい。「まさご」

は夕立のあとなんかに砂が濡れたとき生きてくるのだ。一方、十七字のなかに「春雨」があるのに又「濡れる」つてのはごていねいすぎる。かういふのア「ことわる」つてんでよろしくねえ。それからこの、釣師が風の吹きつけるところに坐つてるなどは、なんとも變だな。花がとんでくるのならいいが。『闘せず落花の飛んで面を打つを』（露伴の詩句）だ。「雨はれて」夕日がどうしたといふのもどうか。「雨あがり」ならまだいいが。かういふ「雨はれて」などは閑文字といふ。

若への古いのや、又ことばのつづきに障りがあるのもいけねえな。挿木をしておいたらそだつて蔭ができたなどは『心なくして柳をさせば柳蔭をなす』……もう千年もまへによまれたことだ。連歌では「何々かな」のつぎに「敷島の」なんぞとアやらねえものだ。「かなしき」とつづくのを忌むんだな。

「しづの女が又とりにくるつぐしかな」か。とりに「行く」んだな。「くる」では、そこに地主か何かがにがい顔で見張つてゐるやうでをかしい。またここは賤の女にしなくつたつて、きれいなお孃さんで「よき人の」としたはうがむしろいいだ

らう。

曲も與もなく、ただ「ごもつとも」おやいけねえ。天保の梅室なんかが迫る力がないのはこのためだ。梅室は云ひまはしはうまいことはうまいが。

香はたきつぱなしにアしねえ。たいたら又すぐ火から離し、たきがらをとつておいて又たくのだ。香にア六國五味があり、「きやら」「らこく」「まなが」「まなばん」「さそら」「すもだら（スマトラ）」これが六國で、甘辛酸鹹苦、これが五味だ。「鹹」はしほからい、「辛」はぴりつとからいので、「蘭奢待」なんざあこれだ。句になるのは「伽羅」だな。句會でも揚句のときなど香をたくことがある。めいぼく、めい香、又は名香木とはたとへば、中川、鷓鴣斑、菖蒲、白梅、白菊、八重梅、梅花、藤袴、柴舟、浮舟、松風、あやめ、十文字など、それに蘭奢待、猛荀……でこれをきくと伽羅のすぢがわかる。まあ揚句（擧句）が出たし、ひとつそろそろ附けあひもやつてみるか。うむ、だいぶ暖くなつたから植物園もよからう。

『藤さけばたこ木にのぼる景色あり』昔は馬鹿な句をよんだものだ。だが、みんな

も泥を一とほり吐ききるのアまあ一年も先だらう。嵐雪の『女もまじるはぜつりの船』魚來らざるときはすべからく詩を釣るべしだな」――

○昭和十六年（一九四一年）四月六日

「其角ト越人トノ話アリシモ遅參シテ聞カズ」惜しいことをした。記録によれば、「次回は三月三十日正午植物園、雨ナラバ夜表町宅」とあるのに、四月六日となつたのはどういふ支障があつたのか。植物園その他よそでわれわれの俳句の集まりがひらかれたことは、けつきよく唯のいちどもなかつた。

「ケフは人數少ナケレバ附ケアヒヲスベシ」と露伴がいつたと記録にあるのを見てもこの日の集まりが少數だつたことが知られる。あたかも講習會などで始めは机や椅子がたりないやうな大盛況でもしだいに聽き手が減つていくやうに、習得すべきもののむづかしさ、その道の深さ遠さがわかるにしたがつて、當初の好奇心も意氣

込みもしだいにさめ、いつぽう長い期間中には支障などもじじつ生じがちなもので、われわれも、小石川表町宅に老若男女の聽き手たちが揃ふといふことは、すでに講話も五ケ月におよんだこのころは、ほとんどなくなつてゐて、元來ならば十餘名あるべき聽き手が、七八名、少ないときは露伴娘の文子や孫の玉子まであはせて五人かそこらといふときさへあつた。露伴は、附けあひを敎へようといふ氣はかねてからたしかにもつてゐたらしいが、それにしても露伴ほどの者が「けふは人數がすくないから」といつたこと、否われわれがさう云はせたことは、おもへば哀しいことではあつた。

はじめは例によつて、聽き手が宿題として出した句について講評があつたが、前述のやうに、この日遲刻した私は、其角や越人についての話とともにこの講評の大部分を聽き落したことはまことにざんねんなことであつた。

「噂の句はいけない。この、『花だより花は見ずしてほがらなり』のやうなのア感心しない。もちろん噂でも現在の動作がはつきりしてゐればいいわけだが、しかし

総じて風評の句は避くべきものだ。それから、「餓鬼」を子供の意味につかふなんぞアいけねえ。また、「青葉」は春ぢやない、夏だ。この、毛虫をとつたらぼけの花が咲いた、などは、季もをかしいが、だいいち毛虫と花とのあひだの期間が長すぎる、かういふなアよむのはむづかしいものだ」

「附けあひには、まづ發句にする句がたいせつだ。發句はまづ何よりも柄が大きくなけりやならない。ただし小さければ、附けいいことは附けいいのだが、この「牛のせて霞の里へ渡しかな」もわるくないが、やつぱりさつきの「ひと谷は」のはうがいい。

1『ひと谷は梅の花なり水の音』

これはもと「櫻」とあつたのを「梅」になほしたのだが、梅にすると「水の音」が生きてくる。べつにどこの谷ときめなくてもいい。地名や人名など發句にはないはうが、あとのひとが附けいいものだ。

まづ表六句だが、じつはこれがすんだあとのはうがおもしろくなる。といふのは

互ひにしのぎをけづりあふやうになるからだが、ともかくさしあたつては發句の「ひと谷は」へ脇句をつける。十四字の第二句で、やはり春の季だが、前の句がおとなしければ、そこの景色のものをよんで終りは字止まり、つまり名詞どめにする。さあ、それでみんな作つてみることだ。この場合、前の句も字どまりだが、さしつかへない。もしみんなが達者なら、べつにもう一句を發句にして同時に兩系統それぞれ「一卷まく」といふこともできるわけだが。

さあ、どうだ、まだか。昔の俳諧行脚ぢやアわらぢをぬがないうちに一句といふことがある。主人が一句だしたら行脚の客はすぐその場で附けなきやならない。芭蕉がある田舍の俳諧の座へいつたとき、連中が芭蕉をばかにして

『名木の中ともしらず行々子』

とやつたところが、芭蕉がただちに

『もまれもまれてにほふ茶むしろ』

と附けたといふ。噓話だらうが、おもしろい。

附句にア場所や時刻も考へることだ。うむ？「水車」はいかんな、「水の音」のあとだから、水は同字でよろしくない。「朝霧はれて鳴きたつる雉」か。うむ、朝や雉は見つけたが、「鳴きたつる」が前句と音が重なるのア感心しない。「峰うすうすと霧のたそがれ」「岩の緑をつたふせきれいうむ、これアどつちもわるくない。「霧のたそがれ」は「月のたそがれ」といふ句もあるが、まあ黄昏よりもここではやつぱり朝がほしいな。もつとも霧はどうか。……（と朱筆をとつて直しながら）

かうすればよからう。

2『雉の長尾に日のわたる朝』

さあつぎは第三句だが、やはり同季だ。春秋は三句までつづける。第三句は「て止め」又は「らん止め」だが、「て止め」のはうがふつうだ。第一句とは緑のないものをよむやうにする。緑があると、それ「観音ひらき」となつておもしろくない。第三句は發句に負けないやうに丈たかい句がほしい。いや「草もえて」植物を

ぢかにもつて來ちやだめだ。「草」とか、「ふきのたふ」などすべてよくねえ、第一句とついて「觀音びらき」になるからで、瓜を一つおきに食ふわけになる。瓜は二つつづいて食ふもので、一つおきに食ふもんぢやねえ。うむこの「山肌の色も春めきて」は、「山肌」が願はしからざることばだ。むしろ山そのものよりも、「山莊」……いやそれでは里がちかいやうでおもしろくないな。ううむ……『空の色もきのふにけふは春めきて』とするか。それとも「も」はやめて……

3 『空のいろ云はず語らず春めきて』

うむ、これでよからう。

さて第四句は季を入れてはいけない。ここから先は「て止め」でもさうでなくてもいいが、さらりとよむことがここでは肝要だ。つまり第四句はわりがあはないところだから、わざと大天狗にわたすこともある。ハハハ、止めの規則がないからといつて「かな」なんぞア感心しないな、「足どり輕き歌の旅かな」か、これア「敷島の旅」とでもなほすか。「始めておろす杉の庭下駄」これア「燒杉の下駄」のは

うがおもしろい。

いや、病氣などひとの忌むものはいけない。病氣や述懐、それから鬼やお化けなんぞアいけねえ。表六句ぢやぁ「神祇、釋教、戀、無情」はすべてひかへるべきだ。……「思ひがけざる人のおとづれ」なるほど、だがこれは「思ひもかけぬ」か「思ひまうけぬ」だな。うむ、これでいい。

4『思ひもかけぬ人のおとづれ』……

さぁ第五句、こんどア秋で、月もけつかう、手柄もたて放題だ。もつとも例の第三句に意地のわるいのがゐて月をよんでしまふことがある。それやこれで月の句が出しにくければ、次へこぼしてもいい。「こぼす」とアまはすことだ。「や」や「かな」はやつぱり避け、それに地名もやめたはうがいい。うむ、できたか？「松風の月にかよふや嵯峨の奥」と。なるほど、これアわるくない。うむ、この「かよふや」の「や」は「口(くち)あひの『や』」だからさしつかへないのだ。だいたい第五句は第三句と同様やはり丈(たけ)たかい句がほしいところで、これなどその點もわるくない。だが

「嵯峨」はまあひかへて「露の奥」とでもするんだな。

5『松風の月にかよふや露の奥』……

さ、第六句は、秋であれば何でもいい。この句はちやうど紙の後半にかくことになるから——つまり折つた紙の裏側へうつつたさいしょの句で、いはゆる「裏うつり」の句だから、ここもたいせつだ。いや戀はまだ出しちやいけねえ。それに、さう前の句へべつたりつけちやいけねえ。「べた附け」は忌むもの、ぢかにベッたりでなく、味や匂ひや響きなんぞで附けていくのだ。「かな」はここでも避けることだ。「なき」などで止めるのアいい。うむ、なるほど「荻ききやう咲く竹垣のなか」か。この竹垣といへば、嵯峨は竹の名所だからそれもよからう。おなじく「荻ききやうさく隠れ家の椽」か、さうだな、ここは兩々あはせて「竹の濡椽」としてみるか。うむ、「屋形に近う尾花そよぎて」「尾花は白う虫のすだきて」か、うむむ、荻ききやうそれから尾花と、つぎつぎに七草が出てきたな。早いのはけつかう、だがみんなして尾花なら尾花をよむときはさういふ類想をのがれるやうにすること、こ

れも一つのいきかただな。うむ、尾花とア薄の赤光りしたのが白くほほけたやつで、お化けなどにも緣がふかい。狐狸妖怪のつきものだな。狐狸といやア、ある句會でおれが

『日や雨や狐よめいるむら紅葉』（露伴）

とやつたら、みんなが笑ひやがつた。ハハハ。さうだな、ここはやはり『萩桔梗さく竹の濡椽』かな……」

しかしこの句はのちに左のやうに改められた。

6『墨繪にほひて萩桔梗さく』——

このやうに露伴はわれわれの駄句に、のちになつてもなほ加朱してくれることもあつた。したがつて、たとへば右の「墨繪にほひて」の句の下に、原句の作者の名を一一そへるやうなことはほとんど意味がない。私のノオトには、これら附けあひの作者たちの名はほとんど誤りなく記錄してあるつもりだが、しかもそれらの名は讀者にはもとより不要であり、かりに私がたとへば第三句の「空のいろ」および第

六句の「墨繪にほひて」の下に私の名をそへるやうなことをすれば、それはおそらく不快でさへあらう。私はこの表六句の箇所だけをさきごろ某誌に紹介したときも自分の名は再度伏せた。讀者にとつても私自身にもほとんど意味がないからである。ただ私は甚だはづかしくかつ又ざんねんなことながら、私が依然として拙劣な句作者であつたことを、ここでもくりかへして言明せざるをえない。なほ私は發句乃至ひとりだちの俳句はまだしもとして、連句、乃至一卷まく附けあひにたいしては、否定的なことばを今のべたいのであるが、みづからが見られる句ひとつ、作りえず、しかも俳諧の知識もきはめて乏しいがゆゑに、さういふうしろめたさから私は、否定的なことばをつらねるのに逡巡せざるをえないものをおぼえる。その一方私は、いかに俳諧びいきの人でも、獨立の俳句はともかく、附けあひの連句は言語遊戯にすぎないことを内心背はざるをえないだらうことを信ずる。遊戯としてはたしかに附けあひは、おそらくもつとも高級なはうの言語遊戯であらう、さうしてそれに耽りうればうるほど愉しくもあり又耽りがひもある遊戯ではあらう。句才のない

私でさへ、露伴ほどの者から手をひいてもらつてこの遊戯を敎へられては、その愉しさがわからないわけではけつしてなかつたつもりであるが、……否、このへんで冥利がつきるやうな言葉はもうやめて、ふたたび萩ききやうの咲くところへ讀者とともにもどらうとおもふ。――

「表六句はここで終り、つぎの第七句もやはり秋だが、この第七句からは、もう神祇、釋敎、戀、無情、なんでもいい、といつてすぐ戀は「待ちかねの戀」になつて感心しない。だが發句ぢやアなし、いはゆる事情、それも平生そこらにいくらもあるやうな事情をよんでさしつかへなく、ただ秋の季さへはいつてゐればいい。まあもし戀ならばいつかいつた「風邪ひきたまふ聲のうつくし」（芭蕉）ああいふのが戀の句としてはほどのいいところだ。もつとも戀をだすと、これア一句でやめず、ふつう三句まではつづけることになつてゐるからそこもむづかしい。うむ、わざと否定的ないひかたをしてもいいので、「風邪ひきたまふ」なんかもやはりそのはうだ。だがすぐ戀にしなくてもいいのだから「みやこ人は紅葉たづねて迷ひこよ」で

も「射そんじて走れる鹿を追ひゆけば」でも何でもいい。ばかばかしいことでもいいので、「南無般若はらみ女のおん祈禱」かういふ莫迦ッ句でもこれからさきならいい。をかしくおもしろいのア元來俳句ではけつしてわるいことではないので、さういふ點だけからみても、いまの俳諧はどうも理づめでおもしろくない。それア一つには、よむことが「唯の事」にすぎるからだ。しかしさうだからといつて、ああでもないかうでもないでいたづらに足ぶみしても困る。ほどほどに決定(けつぢやう)にして先へ進むべきだ。」——

昭和十六年(一九四一年)四月十五日

今回も私は遲參したのであらう、記錄は第九句にうつり、第七第八の兩句はただ「見渡し」としてのみ書いてある。

7 『しろじろと秋の扇のすたりゐる』

『見わたし』はつまり概觀だ。このやうに發句から一枚の紙にかきつらねて一目でみてとれることをいふ。さて季なしの第八句のあとをうけて、第九句は「雜」の句だから何をよんでもいい。しかし「何句去り」といふことは忘れちやならない。同じやうな題材の前句とのあひだに何句を置くかといふ意味で、泥棒の二つ三つ先にまた泥棒を出すやうなのは、「さりきらひ」（去嫌）といふ。だいたい「二花三月」といふことがあつて、三十六句のうち花は二度、月は三度、とおほよそきまつてゐるのだから、むやみに花や月をだすのはよくない。月花は上座といつて表では五句目に月、七句目に花、十一句目にまた月、といふふうにやつていくのがならはしだ。……うむ、「白壁の香のなまなまし宵の雨」か、これは前の句の「よき門の家」と即きすぎる、もつと離れてなきやアいかん。そりやあ門に箒目のあるのをよむなんかよりアましだ。が、ともかく前の句の「門」のなかへは決して首をつつこんぢやいけねえ。ううむ、「池ありや鷺の聲のする夕まぐれ」か、これアよからう、鷺

鳥もよくみつけた。鶺鳥といふやつは犬とおなじく知らない人をみると鳴くものだ。だが「聲のする」は、「聲遠き」としたはうがいいな。そこで

9 『池ありや鷺の聲とほき夕まぐれ』

これでよし。……

第十句がまた「雜」だが、やはり戀でもいい。俳諧の戀といふのは、戀に關聯したすべてをひろくふくめていふのだ。あとの者が附けいいやうに戀をよむのを「よびだしの戀」といつて、第八句の「ふりかへりみる」などはまづこれだが、鶺鳥が出てきちまつた。なに、「小間物賣りのはッとたたずむ」か、ハハハこれア珍だ、「はッと」は「驚く」ので、「たたずむ」んぢやねえ、それにここでたたづんやア、前の「ふりかへりみる」と觀音びらきになつておもしろくねえ。いやいやここへ白壁の土藏をもつてくるのもおんなじ理屈でやつぱりいけねえ。うむ、僧侶とか、坊さんをよぶにア御坊だな、うむ「御坊をよびて」か。これア「とめて」だな、「急に風呂たく」か。よろしい。

10『御坊をとめて急に風呂たく』

ところでこれは釋敎だから、無情や述懐もおのづから出てこようもの、第十一句はもう一句釋敎と行つてもいい、やはり「雜」で、季はまへに秋があるから秋は避ける。五句はあひだを置かなきやアいけない。「春秋五句去り」だ。まへに月、萩白扇、と秋が三句つづいたが、あのときは五句までつづいてもよかつたのだ。なに「數々の誤診をおもふ鄙の醫師」か。どうもなんだな、すこし屈したな。狹いところへはいつて動きがとれなくなるのを屈するといひ、これを、しりぞくの「退」とあはせて「退屈」となる。醫者ぢやア『糸脈の切れはててより早七日』……ん？糸脈は相手が高貴のときだが、そればかりでなく、これは阿彌陀の手にもかける。つまり病床で死に臨んで五色の引接の糸であみだ佛にすがるわけだな。さう、戀、無情もなかなかむづかしい。戀の無情？　それをうらむのか。ハハハ『すてられてくねるか鴛の離れ鳥』……『憂きははたちをこゆる丸顔』これア不美人でまだ賣れのこつてるので美人ならば『迎へせはしき殿よりの文』となる。……さあ、まだか。

これアいまの「雑」にすれば『迎へせはしき夜の自動車』だ、ハハハ……さあ冗談はおいてここはやつぱり無情または述懐のしみじみしたものがほしいところだ。述懐といつても、噂はいけねえ。「何々とやら」「何々とか」いふやうな云ひかたたな。ううむ、これァわるくない、だがかうあらためよう……

11『力なき灯に勳章の輝きて』

さあ、このつぎ又はその次ぁたりで月を出すことになるが、いづれにしても、抽象や噂はいけねえ。なにこんどア早いぞ、「隣りのラヂオわめく歌聲」か、見つけかたはなかなかおもしろいが、「歌聲」はいけねえ、「鷺の聲」がすぐ前にある。「夕風さむく霧香をたく」か、うむ、だがこれも「焚く」がちよつと前に風呂があるからなあ。……「あやされたりや寢顏わらふ子」これア戀の句にもなる。「雨さびしくて靈魂ただよふ」これア「魂まよふ蕭々の雨」とでもするのだな。さうだなあ、やつぱり「隣りのラヂオ」か、「聲」はやめてかうしよう。

12『隣りのラヂオわめくわりなさ』

さあ、第十三句は夏だ。夏は一句ですててもいいし季なしが五句もつづいたし、ただ秋でない季を入れればいい。水や山の使ひかたに氣をつけることだ。よし早いぞ。「打水によりそうてみる夏の月」か「よりそふ」はへんてこだ。「打水の早くも乾く」とでもするか、さあ、つぎ、早いとこ。ラヂオがやかましいばかりぢや話にならねえ。よし「月の夜の逢瀨に木蔭もとめたる」これア「夜」がいらねえ。月をみんなさかんに出しはじめたが、月だからといつて夜たアかぎらねえ。「蔦の輪のはづれにけろり夏の月」なんぞア平句としちやア人があつと感心する句だ。なに、「夏の宵椽臺にだす將棋盤」か、川柳だな。「碁の工夫二日とぢたる目をあきて」「一輪ひらく窓の芍藥」かうこなきやいけねえ。うむ、「あげ潮になりての夏の八ッあがり」か、なるほどこれア見つけた、だが「なりての夏の」がいけねえ。ええと「風なまぐさき」だな。また「八ッあがり」つてことアねえ、さがりだ。

13『あげ潮に風なまぐさき八ッ下り』

これは「風むしあつき」とすれば季がはつきりする。さあこんどア第十四句目か。

季はいつでもよし、題材も月でもよし、戀でもよし、さう、「裏」になつたのだからどこへ入れてもよし、また月でなくても名所などでもいい。

なほすことはたいせつで、七部集など芭蕉はなんど直したかわからない。だから芭蕉が死んでから弟子の句が見劣りがするやうになつた。一卷まくのはまづ六句。つぎに十二句、また十二句、そのあとがまた六句で、あはせて三十六句になるから「歌仙行」また「鯉鱗行」などといふのだ。さいごの句が揚句で、このとき香などたいて祝ふことは前にもいつたと思ふが、そのまへの句を花の座のにほひの花といふ。ひとりでやるのは獨吟歌仙行で、まあ百吟をひとりで十冊もやれば宗匠らしくなる。それ以上のは矢數といつて西鶴などは一氣に三千句もよんだ。「大矢數」などがこれだが、宗因にも「十百韻」がある。

つけかたには、貞德のころは「四ッ手づけ」なんぞといつて前の句にべたべたに引つかけたのがあるが、芭蕉も禁じてゐるし、感心しない。うむ、なんだ？「波蹴たてくるモオタアボオト」「蝿のたかれる古き干網」「けふぞ封切る梅酒の壺」

うむ、「砂濱のレエル光れる暑さかな」か、こんどア早い早い。「たかれる」は「光れる」のあとにおけば「たかりし」だな。……

この邊りは私の記錄が不備のため、第十四句以下が遺憾ながらはつきりしてゐない。それればかりでなく、この最初の一卷が果してまきをへられたか否かさへ不明である。戰災で弟たちのメモも燒けてしまつたし、第十四句以下を紹介しえないのは甚だざんねんであるが、かりに揚句までの三十六句がそろつてゐても、露伴の評話がそれに伴なつてゐないのではほとんど意味がない。このころから世情やうやく多端を加へ、應召出征なども相ついだので、あるひは最後まではいかなかつたのではないか、いづれにせよ私の記錄は、第十三句までしか明瞭でない。

○昭和十六年（一九四一年）五月十七日

「牡丹をボォタンとよませるのは、和歌のはうぢやアときたまあつても、俳諧ぢや

アよろしくねえ。
二輪活けたなどといふのもいけねえ。花は偶數にア活けないものだ。諸君はすぐ「ひとり」とか「寺」とかを出して淋しさをあらはさうとするが、これほど古いこたアねえから、氣をつけなきやいけねえ。
このキセルだが、やたらに馬子にキセルをすはせるなどは損だ。馬子張りといつて、馬方用の煙管のとくべつな張りかたがある。
いやしくきこえたり、世俗すぎたりするものア避けるこツたな。芭蕉は俗をきらひすぎるほどきらつてる。俗が多くちや風雅にならねえ。一茶が俗のあつかひがうまいからといつて、やたらに眞似るなあ禁物だ。連句にア大俗もときにはおもしろいが發句に俗はいけねえ。また、そこらにありふれた寫實なんぞもいけねえ。
『はしたなきもの中庭の塵』（露件）
これアなんでもない附句だが衆評がわるくなかつたのは目のつけどころでも買はれたのか。

「くせ」といふことがある。「春の海ひねもすのたりのたりかな」なんぞアくせのある句だから、あとに附けるにはそこを利用することだ。まさか「ひよろりひよろり」ともいくめえが、ハハハ。ともかく「くせ」の句のつぎの句ば却つてやりいいものだ。

やりいいといへば謠曲をもつてくると作りいいことがある。

散逸十八句といふのは、例の嵐雪と越人の連句が芭蕉に切られて十八句だけ殘つてゐるあれだ。もとはたしかに三十六歌仙だつたらう。

一句附けを試みるのもいい。たがひに出しあつて一句だけつけるのだ。……けふは、みんな氣勢があがらねえなあ。」……

この、量的にも不十分な記録は、遲參のためであらう。さらに、「次回は二十九日（木）午後六時半」とありながら、その日および爾後九月まで記録がないのは私の缺席や署中の休會のためであつたらうと思はれる。

○昭和十六年（一九四一年）九月二十七日。

席題は「露」「虫」「萩」で、例によつて露伴は、われわれが考へてゐるあひだに雑談をした。

『みみず』を「歌女」と書くことがある。みみずが鳴くと世にいふのア、じつは「けら」だらう。メメズは鳴くめえ。

『けら鳴くや高粱の闇蓼の闇』（露伴の句か）

こほろぎを餓ゑさせておいて泥鰌をくはせると骨ばかりこまかくのこすはずだ。

虫はもちろん、鳥なんぞでも名前がわからねえで困るのがある。蘇東坡の詩の句に鳥の名のわからないのをよんだのがあるが、いつだつたか鹽原へいつたとき、「ひイう、ひイう」となく鳥があつて名前がわからねえ。そこで、

『雲こりて岩をはなれぬこの朝

杉むら深くひいう啼くなり』

とやつてみたが、その後土地の古老にあつて名前をきくと「水戀鳥」だといつた。歸京してからしらべてみると、ただしい名前で、西行の歌にもあづた。よし、けふはおれがよみあげるから、點はめいめいが氣にいつたのに入れるがいい。……ううむ。

『鈴虫の鈴をかぞへて留守居かな』が六點、

『飯盒を流るる露や夜行軍』が五點、

『露おりし公園のベンチ灯のうつる』が四點か。

鈴虫の鈴は願はしからざる言葉だ。かういふのアひとりできめた「てづつ」でかまきりの鎌なんぞもやつぱり「てづつ」だ。まあ談林調ならいざしらず、舊派（芭蕉）となつたらもう通用しねえ。芭蕉以前ならかういふのもおもしろがられるが。

飯盒はそんなに大きいもんぢやねえ。また行軍中に前の者の飯盒をちよつとみるといふのもをかしい。

露はよつぽど更けなきやアおりねえものだ。ベンチに灯が映るも古くさい。この「朝露に下駄の緒ぬらす散歩かな」などは「ぬらす」がへんだ、「ぬるる」だな。……」

われわれは露伴の俳話をきいてゐながら、露伴自身の句は、句集も見ないままに案外數さへしらず、そのくせたまたま知つてゐる句を席題のときなど思ひうかべると、着想を模倣することがあつた。右の「飯盒を」の句なども露伴の「名月や」の句を模倣したことはほぼあきらかである。

『名月や露の流るる鐵兜』

この露伴の句もいつごろよもれたものか、われわれはさういふことなどもしらず、また生前つひにたづねもせず、思へばまことにざんねんごとであるが、かねてから、露伴の話とは關係なく、私は右の句、そのほかいくつかの露伴の句を、弟らにもきいてノオトの餘白へつらねておいた。

春霞國のへだてはなかりけり

獅子の子が親を仰げば霞かな

蘆いまだ芽ぐまず春の水しよろり
名月や露の流るる鐵兜
鮒つりや厚着すぎたる肩の凝り
藍甕に鼠ちよろつく夜寒かな

右のうち「名月や」が哨兵をよんだ句だといふことだけは何かの折に露伴からたしかにきいたことがある。

この日はまた「墨苑圖面」といふ黒のカタログ（墨譜）をみせてもらつた。そのときの談話は三三頁にすでに紹介したが、なほ少々それを補ふならば、

「徽宗帝の捺した印肉はほかのものがぼやけてもいつまでも新鮮だ。いいものはいい」

「筆の鋒がながくなつたのは柳公權あたりからだ。そのころの諸葛の工の筆はいまはねえ」

「紫毫の筆はたいしたもので、かすれなど一つもねえ。筆のいい毛をぬいておいて

それで又一本つくるといふふうにしたさうだ」

「墨譜は、日本のぢやアやつぱり日本橋の古梅園のかな」

○昭和十六年（一九四一年）十月十一日

「今の世は、棡にはいつた鷄みてえだ。右翼の極端なやつらが、くそえばりにえばつてるが困つたこつた。近衛も一發やられたとかきくが、人の矢がさゝるために押し出されたんだから仕方がねえなあ。あれはすつかり楠木の藁人形になつてる。大臣はみんなさうだ。おれの附句だが

『うき世の馬鹿が大臣になる』

大臣になるくれえがうれしくて大臣になるんぢやあろくなこたアねえ」

じつはこの話のまへに、漆器の話（二二頁）やヂンギス汗の話（二四頁）があつた。なほ前には省略したがヂンギス汗の話で「人間は破壞の競爭がすきなもの」の

あとに「ことに（何々人）は大好きだ、まつたく性がちがふ。猛獸の智慧のあるやつだからかなはねえ。奸智のある毛物だな、これがヂンギス汗にやられたんだから、さあヂンギス汗を一そう毛物あつかひにしないぢやアゐられねえ」といふ言葉があつた。

「さんまはエモチがだいじだが、そのほろにがさが今はねえ。あゆもエモチをとつちやア食へねえ。エモチから魚は腐るが、しかしエモチをとつちまつちやア、あゆやさんまはほんどの味がねえ。さうさ、けつから腐るなアさわらばかりさ」

「昔の男の子はよくいくさごつこをしたものだが、いまの男の子は、いくさごつこは却つてしねえやうだ。これが世の中かなあ」

「この十六日から魚が一そう手にはいらなくなるさうだが、營養不良で病人ばかり多くなるか。はんぺん、かまぼこも、今の世のものはあぶねえ。どこでもここでも病人をかかへて、儲かるのは藥屋ばかりだといふ。着物もスフだし、ことに足袋のスフなんぞア感心しねえな。雲南の苗族ならいざしらず、足の裏に脂をつけて岩山

にのぼるわけにもいくめえ」……

露伴は、新聞に出ないことなどもかなり知つてゐた。またそのころ人種の特性などについてもいろいろ語つたが、それらは今はしばらくひかへることにする。――

「『名月や客を送りて橋の上』か。これぢや送つたあとで獨りで橋の上にゐるやうだから「溪の橋」とでもすれアいい。「名月や濡椽の露しとどなる」これア名月と露と二つにわれてゐる。「一億の心の寄るやけふの月」こらア芭蕉の「秋ふかき心の寄るや」を思はせるから損だ。うむ？　いや、新聞の投書句などはあんまり見ねえはうがいい。つい近い低いものに、とかく人はひかれるものだ。それよりも昔からのいいものをみて、自分の句を引きあげるやうにしなきやアいけない」

「新そば」はむづかしいものだ。『三日月の地はおぼろなりそばの花』といふのがあるが、これなんぞア「地はおぼろ」がうまいのだ。一茶は信濃の男だが、そばの句にいいのはねえやうだな。たべるそばは「そばきり」としなきやア食ひものにならねえ」――

なほ柳の散りかたについての話は前出（一二二頁）、また今回の總評としては「とくに抜きたい句もない」と露伴はいつた。——

「俳諧の試合には例のはらみ句をしていくことがかなりある。甲乙兩組から一人づつ出て、隱した題をみて即吟したものを判者がみくらべ、それから例の難陳などもあるわけだが、かういふ試合はもともと俳句よりも狂歌のものだ」——

○昭和十六年（一九四一年）十月二十九日

「雲の句はとかく夏や春になるから、氣をつけなくちやいけねえ。うむ？　電線の碍子に秋の雲がかかつてる？　凧ぢやァあるめえし。秋の雲はたかく、春の雲はひくい。夏の雲はかがやき、冬の雲は黒い。

『すいすいと流れて早し秋の雲』（露伴の句か）

「すいすい」で秋らしいんで、この、雲が「湧いたり消えたり」はいけねえな。せ

めて

『來りけり又去りにけり秋の雲』

とでもすれば、なんとか姿が整つてくるが……」

「うむ、冠木門か？　柱に衡木をわたした門で、郊外などによくある。もちろん句につかつても結構だ。だが、これァ何も門から送りださなくてもいい。旅へ出るひとを送るのは、しかしわりあひいい句ができやすいものだ。その反對に、こつちのは結婚祝ひの句だらうが、祝ひの句はいい句にァなりにくいものだ」――

この日は菊について長い話があつたが、それは二〇頁と二九頁にすでに紹介した。――

「狂歌のはうぢや、兩方から歌が出てくるので「角力」といふが、俳諧にやアべつにさういふ言葉はない。ところで、どうだ、そろそろできたか……うう、む、……こいつアどつちもどつちだなあ。

右『秋風に吹き倒されし案山子かな』

左『豊年の祝ひに案山子さきだちぬ』

案山子が倒れたんぢや句にアならねえが、祝ひに先だつなんぞアまるで案山子が歩くやうでいつそうをかしい。倒れたはうがまだしも歩くよりはましだろ、右が勝ちだ。

つぎは「湯あがりの子の椽にあり雁わたる」、かこいつアいけねえ、夏だ。……さうか、もう一句あるか。それでは

右『渡る雁月のおもてを通りけり』

左『繪物語こころにきこゆ雁の聲』

ううむ、月のおもてを雁たアどうも平凡だ、といつて繪物語は、抑へるものがないとだめだ。この勝負は持ちだな。

右『ハイキング目にしみいるや唐がらし』

左『人けなき納屋の裏手や唐がらし』

納屋の裏手はみつけた。それにくらべるとハイキングは雅味もとぼしい。これア

左の勝ちだ。

右『一口の水をのみたし唐がらし』

左『軒の端や見てさへからし唐がらし』

これもなあ。いいのァ「のきのはや」の五字だけだ。見てさへかれえなんぞァ、干してあるのがいきなり味になるんだからへんだ。勝負はもちだ」——

斷續的ながら小一年も露伴の話をきいて、いかに素人の卽吟とはいへ、なほかつ右のありさまでは、露伴も內心ほとほと愛想がつきたであらう。しかも露伴はこの後さらに一年間も俳句の相手になつてくれたのである。——

「狂歌ぢやァ持ちのときは、判者が先に讀んだはうを勝ちとするし、また判者がそのとき狂歌を詠んで判をすることもある。俳諧ぢやァかういつた試合はまつたく座興だな。それにしても遲吟はいけねえ。信州白上の鬪などといつて、信州人は玄鬪で一句うかがはうといふのがすきだ」

「カオルは、香居るだから「かをる」とおぼえればいいので「かほる」ぢやねえ」

「俳諧は、寒いときのはうがいいものだが、歸りがつらいね」

「そろばんぢやねえが俳諧ももつと攻めなきやだめだ」

右の二語などわれわれの怠惰を戒めたものでなくて何であらう。

「『日向埓(ひなたべい)』は庶幾すべからざる言葉だ。「ひなたの埓」だ。この「青銅の屋根」は、うむ？　博物館か。それぢやあ前がきがなきやわからねえ。かういふ屋根はめつたにねえから。いや、……ひねつてはいけねえ。

『うらやまし思ひきるとき猫の聲』

へんな句だ。これで越人は芭蕉の氣に入らない」

「『大陸に秋思はする風ふきて』うむ、これア滿洲からか。さうだなこれは……

『大陸の雲ものいはず秋立ちて』

とすればよくなる」――

○昭和十六年(一九四一年)十一月十一日

「分裂スベカラズ、願ハシカラザル言葉ハ避ケヨ」(記録) ああいくたび同じ言葉をわれわれは露伴に云はせたことであらう。「うん? 『しめきりに句もまにあはぬ夜寒かな』か。『句も』は『句の』だ」と露伴を苦笑させた不甲斐ない弟子どもではあつた。「句ができたらいくどでもよんでみる。へんなところがあればそこが落ちつかないから、落ちつくまでなほせばいい」ああいくたび同じ注意をうけたことか。

この日露伴は依然奥抜きをせず、聴き手がかねて提出してゐた句はいはゆる衆議判にまかせたが、そのけつくわ

『舞ひ舞ひて我を追ひぬく落葉かな』

といふ句が一位に入選した。二位は

『北風の大竹藪に入る日かな』

といふので、一位は弟、二位は從弟の句である。いづれも露伴の手がはいつてゐるはずであるが、その加朱がどの程度のものであつたかは今あきらかでない。かへりみるに、われわれ弟子どもが露伴のひじやうな好意にもかかはらず、毎度いふ親戚のありがたさになれて精進を怠つたので、露伴もこのころは何となく氣のりがしなくなつて奥ぬきなどもあへてさしひかへたのであらう。しかもわれわれは、露伴の奥ぬきがなくなつたことを甚だ物たりなく思つたものである。罰あたりのことではあつた。

「みんなが句のよしあしをおたがひに論じあふのもおもしろい。けふはいささか難陳の氣味もあつたな。あらをさがすといへば

『きつつきや枯木をさがす花の中』

などといふのがある。

落葉が舞ひ舞ひて追ひぬくといふのは見つけた。大竹藪に入る日の句だが、丈草の

『ほととぎす大竹原を洩る月夜』

といふのがある。月や日が洩れるのはおもしろいものだ」

即吟の席題も露伴は聽き手たちに選ばせたが、そのけつくわ「冬の朝」「木枯」「寒さ」の三題が選ばれた。

「『木枯に二日の月の吹きちるか』（荷兮(かけい)）

荷兮はかういふ繪になる句がとくいで、三日月よりもほそい二日月(ふつかづき)が吹きちるやうだといふところだが、文法はあやしいものの、風情はなかなかある。吹きちるなんぞといふ言葉は元來はなからう。

『木枯の果(はて)はありけり海の音』

これは言水(ごんすい)だ。……いや、席題も諸君がおたがひにやはり點を入れたらよからう。……うむ「厠にたちてそつと子をみる夜寒かな」一點か。これアもつと工夫が要るな。「凩(こがらし)や盛り場の灯のまばらなる」二點か。盛り場と疎らの對照もあまり効かないやうだな。「木枯や村はづれなる石地藏」、ほう、これが四點で最高點か。「村はづれなる」は曲がねえ。もう少し考へてみるんだな、地藏さまが古いとか缺

けてるとか、なんとかもうちよつと工夫するのだ。うう む……「首のとれたる」としてみようか、

『木枯や首のとれたる石地藏』

かうするとずつとおもしろい。「老木の切りたふされし寒さかな」か。どうも平凡だ、これは

『大木の切株白き寒さかな』

だな」――

次回の會は二十六日、提出句の締切は二十二日（土）ときめられたが、私の記録には「コノ日伯父上御病氣休講」と補入されてゐる。宿題は依然「冬季雜吟」であつたが、記錄にはさらに左の二行がある。

「伯父上柱ノソバニ立タレ、背中ハ柱ニツケド後頭部ハツカズワガ背曲リタリト云ハレタリ、可悲」

○昭和十六年（一九四一年）十二月二十一日

すでにわが國は眞珠灣奇襲を敢行したあとであつたが、露伴の俳話はひきつづいておこなはれた。――

「水仙はめでたいことに用ひるものだから、埃りがついてゐるなどといふ句はよくない」

「煤拂ひの句は、いつたいにむづかしいものだ」

「人情としては當然だといふことが必ずしもいい句になるとはかぎらない。『しうとめの出たあとぬくきこたつかな』なんぞア、人情はたとひふつうであつてもかういふ句はよろしくない」――

この日露伴は天保時代の『俳諧職業盡』といふ本を見せてくれた。

「この時代のいいはうのものが集つてゐるわけだが、しかし、いつたい時代がちがふと何か別の國のひとの話をきいてるやうだな。この時代の句にア細工があつて、

みんなちよつと素人ばなれのした口のききやうをしてゐる。そこが今とアちがふな。それぞれ宗匠ぶつたところがあつて句ぶりがかはつてゐる」——

『俳諧職業盡』は乾坤二巻、天保十三年三月刊行で「選者茶靜。校合梅令」とあり、編纂は「春の部」以下四部、それをさらに左右にわけて

「一番　左元日　右霞

二番　左鶯　右蛙

三番　左梅　右柳……」

さうして、さいごは

「三十六番　左煤拂　右歳暮」

となつてゐた。なほ印刷でない奥書があつて

「撰者井上清七

筆者松本菫齋

畫師橘　尙山

彫工飯田源三

　江戸日本橋通四丁目、書林須原屋佐助」

の五行があつた。

「繪入り本だが、べつに繪は句と關係はない。淸七といふひとの俳號がたぶん茶靜なのだらう。また董齋（とうさい）といふひとはわりあひ上手だ。職人づくしは、俳諧だけでなく和歌のはうにもあるが、職人とは大工、左官はもちろん、虛無僧や琴の師匠なども含めていふので、それらの職業を季節にあはせるのだ。職人を露骨に出してはおもしろくない。仕事にしたがつてよんでいくので、これはおれの昔の句だが、

『吹けや吹け扇車（あふぎぐるま）に青あらし』（大工）

『荒打（あらうち）に塗りこむ風の木の葉かな』（左官）

『屋根ふきの笠にとんぼの眠りかな』（屋根や）

　のやうにする。扇車は、扇をひろげたのを三つ葉形に圓くならべ上棟式のときに立てるものだ」

「俳句はねばるよりも、ひよッとできたはうが本來はいい。しかしそのひよッとでてくるまでの努力もたいせつで、例の『ほととぎすほととぎすにて明けにけり』などがそれだ。またおのづから風雅であることもたいせつで、『焼けにけりされども花はとりすまし』なんぞァよむ人が風雅でなければできない句だ」

「一巻まいて宗匠に見せるときは、招んでご馳走などするのがならはしだ。またほかの宗匠に見せることもあり、さうすると見方がべつになるのも又おもしろい。『庖丁をこんにやくに入れる寒さかな』これは明治の句だが、みんなから罵倒されたけれども、夜雪はかういふ句をえらぶたちがあつて大いに褒めたさうだ。選者に見てもらつたお禮は貞徳のころは點賃といつた」――

右の話は、われわれの句を露伴が拔き又は加朱してくれたものを誰かに見てもらふのもおもしろからうといふ話がでたときの言葉で、露伴は伊藤松宇氏のところへ持參するがよからうといつた。

「松宇は八十いくつかで、正風（しやうふう）のひと、字もまづくはない。もしもうひとりに見て

もらふなら、まづ松根東洋城だらうか。このひともへんでないひとだ。いや、〇〇は粗雜だ、點賃とりにいそがしいのアいけねえ」——

この日は「俳諧職人盡」のほか、あとでさらに二三冊やはり繪入りの本をみせてもらつた。

「七十一番職人歌合」歌集、上中下三卷、檢校保己一集。

「職人畫發句會」句集、天地二卷。

「今樣職人畫歌合」歌集、上下二卷。——

「うむ? おばけの繪? 妖化變化はまづ石燕だな。「百鬼夜行」なんといふのがある。いまどきの子供らは、垢なめ、家鳴なんておばけは知るまい、ハハハ」——

〇昭和十七年(一九四二年)四月三日

この日はまたも墨の話や、榎の話(一〇頁)などがあつたが、方氏墨譜目錄の

うちから、例として第四巻「博物」のいくつかを私のォトは左のやうに記録してゐる。

『大玄山、五岳、百花香露、五清、三娟、七香、倶飛蛺蝶、九英梅』――

「今回の句はどうもよくない。日ごろいいものを、芭蕉なり誰なりを見るやうに心がけないからだ」――

まことに慚愧にたへないことではあつた。まもなく即吟にうつることになつて、「蝶」「蛙」「燕」その他たくさんの題が出た。

「よく知つてゐても、躑躅のやうにいい句になりにくいものは避けたはうがいい。蝶は一應つくりいいだらう。ほう、早いぞ「わが庭へも蝶は來りぬ春たけて」か、これア題が「蝶」よりも「春たけて」でわれる氣味がある。そこへいくと、一見われてゐるやうでも

『散る花やみな蝶になれ蝶になれ』

などはわれてゐない、もつともこれア蝶でなく散る花の句だ。

『もし鳴かば蝶々籠の苦をうけむ』

これア蝶の句だが、これでむろんわれわれちやゐねえ。……なに、「電線にぴぴッと尾をふる燕かな」か。「ぴぴッと」はせきれいだなあ、これアちよつとどうも直しやうがねえ。つぎは虻か（前出一二一頁）それから蛙か、「江戸の客耳かたむくる蛙かな」これぢや東京から人が來たんぢやなく、江戸時代になつちまつた。「江戸の客」はただ「まろうどの」でいい。

蝶にア句が重くなつちやアいけねえ。おれの句だが

『飛ぶ蝶々にわが俳諧の重たさよ』（露伴）

だ。さつき蝶と春をよんだのがあつたが、俳諧の古歌にも『花ちらふ日中うらうら舞ふ蝶の翼にのれる春の心や』この『翼に』は『羽袖に』ともあるが、いづれにしても、まことに輕い。『盗人の晝寢をぬける蝶々かな』これアいろは歌留多をもとにした句だが、輕くてしやれてゐる。例の宗因の『世の中は蝶々とまれかくもあれ』かういふおもしろさはむづかしく、さつきわが庭へ蝶がきたといふ句があつた

がおれのに
『葦垣をへだてゝ蝶のきたりけり』（露伴）
葦垣をへだつる仲といへば、仲のわるいのをいふ。蝶は一應つくりやすいがむづかしい。虻を誰かがよんでゐたが、あれァ晝寢よりも『虻におはるる春の山道』附句だがかういふいきかたがある。うむ、汐干狩か？ この、女の汐干狩はどうも品がわるくなりやすいものだ。それに「汐干狩」よりも「汐干」や「干潟」のはうがいい。川柳に『蛤の出るまでまくる汐干狩』これァ女ががんばつてるところだな、ハハハ。うむ、燕と溫泉か。これァいつだつたかやはり鹽原へおれがいつたとき燕がたくさんとんでゐたことがあつて、
『ふるき湯の街の日なかを燕かな』（露伴）」――
「わからねえ言葉はどうともしやうのねえもので、「醉眼纈」――「纈」は「絞纈」で、「しぼり」だが、しぼりの目がぼうッとしてゐるのか、あるひはよんだ人が醉つてゐたのかわからねえ。こゝ幾日かときどき考へてみたが、年寄りになると、苦

にもしねえでそんなことを考へるものだなあ」――

露伴はこのとき漢語の句をあげたが、遺憾ながら私の記録は「句（聞キトレズ）ヲアゲテ、千年タツト物ハワカラナクナルト云ハレタリ」とある。しかしすぐそのあとに

「新鐫五言唐詩畫譜（集雅齋藏板）ハジメニ『唐詩畫語叙』（錢唐王迪吉）添ヘアリ」とあるから、あるひはこの書に關係のあつた詩句であつたか。この書の目次は、賜房玄齡、大宗皇帝、以下多數があつた。

「詩を繪にしたものにアときどきおもしろいのがある。詩歌はかならずしも繪にアならないが、しかしいいのはやつぱりたいてい繪になる。芭蕉の弟子の許六は繪もかけたし、繪にすればおもしろい句も多い」――

つづいて伊東の温泉の浴槽で歌つた話（三一頁）以下の雜談にうつり、星の軌道と腦の向きのこと、眞空と有無のこと（三二頁）音聲のこと（二二頁）タンポポのこと（二三頁）といふ順で、この日露伴は酒盃を手にしながら縱横無盡にかたつ

た。
私は俳諧ノォトのほかにべつに日記をつけてゐたが、それには「晝間俳句會、久々にて伯父上にあふ。お元氣なり、紀尾井町祖母（露伴亡母）に似てこられしは伯母上（露伴妹）と同じ。玉（露伴孫）大きくなる。綾子（愚妻）より硯を入學祝ひ（女學校）に贈るをもちゆく。句會のことはノォトにゆづる。皆怠けて申譯なし。夜「現代文學」の會、云々」とある。露伴は前年末からそのころまで伊東溫泉その他へ靜養にいつてゐたのである。

○昭和十七年（一九四二年）五月十日

前回の集まりは四月三日の神武天皇祭であつたが、この五月十日（日）までの間にあるひは今いちど會合があつたかもしれない。もつとも四月十八日に東京初空襲があり、私も二十二日からは赤羽の兵器廠へ學生とともに勤勞奉仕に出かけたりす

るなど、世情も公務もやうやく多端を加へてきたので、私ひとりだけが不參だつたのか、會もじつさい無かつたのか、それらは今となつては明らかでない。

「春なれや、といつたら「切れ」だからあとにまた切れをつけちやいけねえ。廢驛に草がもえるのを見つけたのはいいが。……「空襲やわれはしづかに草をとる」か、これアもう一段ふンごんで考へるんだな。

草が萠える滿洲の野に羊がゐるといふのは、逆だ。草が題だし、羊の野に草がもえると逆にしなきやいけねえ。「をちこちに名もなき草の力かな」か、これぢや曠野らしくない、これア

『大荒野に名を知らぬ草の力かな』とするんだな。

「草むしろ」を草の生えてゐるところの意味につかつちやアをかしい。それからこの「草の芽や」だが、「や」といやア「なる」にきまつてる、「なり」ぢやいけねえ。

山吹が散つた道を「黄金道」は庶幾すべからざることばだ。また、山吹のにほひ

といふのもめつたにきかない。山吹のにほひなどは幽玄すぎていかがとおもふ。
「井さらひ」ならば小さい井戸だから、かういふところにこそ山吹をもつてきて
『井さらひの末山吹の咲きにけり』
とでもすればいい。
また山吹がほろりはをかしい、ほろろだ。これに風のそよろをあはせて、「風そよろ山吹ほろろ……」とすべきだ。
この「ひと莖の」だが「ひとくき」よりも「一莖」といつたはうがいい。「煤煙の港町なる霞かな」これアおもしろく見つけた。「いづこよりこの屋根へきて芽ぐみたる」これアわかりにくい。形からいつても「何々や」がほしい。
今回もあまりいいのがないな。
れんげ草の句が少ないが、つくりにくいのかね。「げんげ」といつてもおなじだ。田に咲いてゐるのは、こやしのために咲かせるんだから、ひとりでに生えてるやうにした句はいけねえ。菫はかつてに咲くが、げんげは田に踏んごんで肥料にす

る。神さまにあげるのに人糞なんぞいァけねえからで、げんげはもともと生えるのではなく蒔いて生やすものだ。こやしにはそらまめもつかふ、水仙もつかふ。もつとも肥料のそら豆は粒の小さいやつだ。『げんげすみれの畑六反』の「六反」からみてもこれァ蒔いたものといふことがわかる。いまの歳時記はかういふところが不十分だ。すみれは萬葉のころから日本人がすきな花で、東京のちかくぢやァにほひのいいのは箱根や下田にすこしある。

わらびは蕨で、薇の字ははつきりしないもの、日本ぢやァ天然にある野豆が「び」だ。さるすべりも「び」で、赤いのは百日紅または紫薇で、白いのは銀薇といふ。伯夷叔齊が食つたのは「び」のうちの野豆だらう。なほ三色すみれのパンジイはすみれとァもちろんべつものだ」

「いやなことばは、ねりなほす工夫をしなきやいけねえ。俳諧はことばのものだからだ。本ももつと讀まなきやいけねえ。我流ぢやァ一つとこばかり歩くことになる。ひとが大勢道を歩いていくのを見りやァそつちへついていくべき道理がおのづ

からわからう。我流や、それから雑誌流もよくねえ」——

この日は書道の話（三四頁）や世界情勢の話（二一頁）などがあつたが、それを補ひつつ他の話をも加へるならば、

「褚遂良の「枯樹賦」はまじめなものぢやないが味が出てゐる。楷書よりも行書風だから、これアすこし習ふと効いてくる。いつたい楷書はちよつとぐらゐ習つても、なかなか効かねえものだ。日本ぢやア日下部鳴鶴なんかも褚遂良をならつた。鳴鶴は、穂のながい筆でやはらかくかいた」

「楷書は隷書から出たが、漢の末にア隷書と楷書の中間體もある。隷書は右へ水平にむいて上へ抜くのだ。曹全碑が參考になる」

「米元章（米芾）はめづらしく回教徒だつたが奇人だな。あるとき天子から望みの物をつかはさうといはれて、ではこの硯を、とそのまま懐中にいれたので、ふところぢゆう眞ツ黑になつた。名石にうやうやしく禮をしたともいふし、別荘がほしさにあるとき名石と交換してしまつたが、あとで石が惜しくなつて泣いたさうだ。又

ある者が「初墨如何」といつて米元章の名石に唾をかけて墨をこすつたので元章大いに憤慨しそんな石ァ相手にくれてしまつたが、あとで相手からまんまと謀られたことを知つてしきりに口惜しがつたといふ。「書史」「硯史」なんぞをあらはしてゐるし、書にも石にも通じてゐた」

「紙では、墨の李廷珪と並ぶのァ澄心堂の紙だ。五代の末、唐のときすでに名があつた」

「十返舎一九は香をすこし知つてゐた。蘭奢待はいくへんもきくことができるといふところから十返舎とした。曾呂利も香を知つてゐたし、香のすきな者にァ滑稽家がしばしばある。香の代用品はドイツのシンメルがいくつもつくつたが、前大戰のとき毒ガスのはうに廻り、あとはふるはず、フランスのコティィに押された。このシンメルやコティィが香ではまあ科學的で、東洋のはろくに記録にも載つてない。香の進歩ァまづその程度のものだ」――

○昭和十七年（一九四二年）六月十四日

「この、金魚が「赤し赤し」といふのは、惟然の句のやうにわざと幼ない言葉をもつてきて「赤い赤い」のはうがいい。『梅のはな赤いわ赤いわ赤い花』の惟然だ」

「五月雨のころは琴の糸はヴァイオリンとちがつて、濕めつて切れはしない。この「積みすてし鐵屑濡るる梅雨か」は「積みすてし」がへんなことばだ　「ぬるる」も要らねえ。

卯の花のころ月が「冴える」なんぞアもののものしい。

「横ぎるとかげの早さかな」は「とかげのよぎる」だ。いつも「走る」でなくてもいい。

「包み運びしだぼはぜ」は、たいへん重いもののやうでをかしい。「よしきりや大東京の端れなる」は無難。「いちぢくのいまだ青くして青蛙」もまづとして、つぎの苗代と蛙の句は兩題になるからいけねえ。そのつぎの、けふも蚊帳をつゝずに羽音

をきいたといふ句だが、さうだ、「蘆むらさきに夏の月」といふのも、それぞれ見つけどこや「紫」の趣向はあるがどつちもなほ工夫が要る。「硝子戸に紙貼る家や夏著し」これァ芭蕉もよまないところでおもしろいが、「紙貼したる暑さかな」とするか。いや「ねばしたる」はどうもまづいな。「紙のまつはる」もをかしいし。……つぎの、くちなしと梅雨は、これも兩題だ、二つあるときはどつちがたいせつかがはつきりしなきやいけねえ。うむ？「金魚の藻」か？松藻だ。……俳諧は短いからといつて片言はいけねえ。半分だけいふのが片ことで、菊の懸崖づくりを「けんがい」のたぐひだな。それからこの句だが、このただ着物をきかへるんぢやアおもしろくねえ。蕪村の

『お手打の夫婦なりしを衣がへ』

かうなると小説めいておもしれえ。つぎの、牡丹を切つて香をたくなんぞァ題を消しちまふ。……さあ、みんなの入れた點ぢやァどれがいちばん多い。ううむ、さうだな、やつぱりこの『風にのる水車の音や青嵐』が一位かな」——

右の句は前述の露伴の「吹けや吹け扇車に青嵐」を聯想させるであらう。意識的にまた無意識にわれわれはしばしばこのやうに露伴の句におぶさりがちであつた。

「よくわからないけれどしかもわかるのを幽玄といふ。幽玄は理屈ぢやねえ。和歌のはうぢや景樹はことわるのをきらふ。いつぞやの、歌はことわるものにならず、しらぶるものなりだ。理屈つぽいのアいけねえ」

「『何々し』は切れるから、川柳になりやすい」

「扇子はむづかしい。奮發して、できない句を十句つくるやうにすれア凡骨がほぐれてくる。換骨奪胎ならぬ生呑活剝なんぞをやられちやアかなはねえ、ハハハ」

「歴史をよむのは詠史の句といふ。町名など入れることもあるが、表町はうまくはいりにくいね。霞町なんざあいい」

「和歌はもとア挿頭足結といつて、『なしと思へば苦はなかりけり』などは「思はば」とするとへんになる。ふつうの云ひかたもたいせつだ。うむ？　おれア、和歌はちかごろアよまねえ」

「白レグホンといふやつは年に三百五六十も卵をうむ。ほかのアたいては百八十前後だな。いまの世にやあアンダラシャンなんぞアなく、卵の白レグホンばかりだが、茶碗むしが卵一箇ぢやできねえ、かういふふうに今の世は悪貨が良貨を驅逐する。けふある會へ出たら農林大臣が來やがつた。稗のめしをくつたが營養價値はねえだらう。伊勢の關取米もわるい飯だ。支那料理のふんじよう、あのぷりぷりしたやつだがあれァ雲南のがいいときく。雲南のそら豆がいいからで、なた豆も雲南のアたいへんうまいさうだ。日本ぢやアなた豆なんぞアあんまり食はねえ。香の物にするのはなた豆の鞘だ。口取りにァ豆の煮たのを食ふことがある。花も、なた豆は風情があるが、實はすくない。向島の家でつくつたことがある。鞘は若いうちでなけりやア、かたくなつてくへねえ。福神漬などにもするが、なた豆はたくさんはとれねえ。花はうす赤い色だ。うむ、そら豆は元來いいときが短いな。ことしアわるかつた。小豆は文三もやしがうまい。日本橋の乾物屋にもいまはねえ。ぶんぞうは八重生ともいつて、あづきの半分ぐらゐのときにもやしにしてくふので、ぶんぞう

を知らねえなんぞァ田舎者だが、當節はぶんぞうもめつたにくへめえ。いまはいいものがみんななくなるときだ」――

○昭和十七年（一九四二年）六月二十七日

「壇ノ浦をよまうッてのか。歴史や故事をあつかふのはやりかたがあるので、ただ古い噂話になつちやァいけねえ。例の、理らねえで調べながら歴史のことをもつてくるのだ。

川柳ならへんなことをいつてもかまはねえ。「義朝もはじめはふりで戰はず」浴場で襲はれたとき兩手をつかつてふりきんで戰つたのはやや時がたつてからで、はじめは片手でおさへながら戰つた、ハハハ。だが俳句はこれぢやいけねえ。

『義朝の心に似たり秋の風』

これは義朝が父を斬るむごさに秋風をよそへたもの、また

『無殘やな兜の下のきりぎりす』

齋藤別當が討死したところに今きりぎりすが鳴いてゐる、といふふうに、古いものを現在へと芭蕉がもつてきたのだ。つまり現在なにかがあるところへ昔のおもかげをもつてくることがたいせつだ。故事をただもつてくるのは文字どほりこじつけとなるから、連歌ぢやアこれをきらふ。ぴたりともちこんぢやアいけねえ、ことに發句はさうだ。その一方、故事がただ向ふのはうにあつちやアいけねえ。

『梅白しきのふや鶴をぬすまれし』（芭蕉）

のやうに直接故事でなく、鶴がたくさんゐた邸の梅の多いのをもつてきながら三井の庭の梅をよむ、とかういふふうにするのだが、いつたい詠史は俳諧ぢやアむづかしいものだ。

人情の句も發句にするのアむづかしい。蓼太（れうた）の

『初戀の花ものいはで別れけり』

は初花に戀がかよふところに風情があるので、

『わがあとに兎口（うぐち）たちよる清水かな』

なんぞも、みつくちの奴があとから水をのんだといふのがなかなかおもしろい。ともかく人情の句や、ことに歴史の句はよみにくいもので、今のことへ昔の影がうつるやうにしなきやアだめだ。狂歌なんぞだとべつに今につながらなくても、をかしささへありやアいいんだが、俳句となると詠史も

『夏草やつはものどもが夢のあと』

と、昔のかげがそこに自然にさしてゐるやうなよみぶりがおもしろいのだ。發句でなく連句になるとこじつけが多くなり、「ただごと」にもなりやすい。源氏物語なんぞの句が前にでてくると待つてましたとばかり故事をもちだしがちだが、狂歌や狂句ならいざしらず、「もう五ごん又七ごんと李白飲み」これア五言と五合のしやれで「李白ハ一斗詩百篇」のこじつけだが、かういふのアいけねえ、ハハハ。高館懐古は「夏草や」のほかにも、蓼太の

『山そびえ川流れたり秋の暮』

などアなかなか柄も大きい」――

「ところで、「濱べ」の「べ」はいらねえ。題でないものに「や」をつけるのも氣をつけなきやいけねえ。だが、「中ひらく勝鬨橋や夏の月」これアよくできた。けつこうだ。「陋巷に低く大いなる夏の月」もみつけどころはいい。「あきうどの團扇くばらぬ世となりし」これア團扇がないことになるからむづかしい。かういふのア損だ。いつたい打消しは、さうもあらうやうなところに打消しが出てこないと効かないので

「あの中にまろびてみたし青田かな」

これなんぞアじつさいはまろばないのがよく効いてる。まだまだ唯ごともつともなのや、工夫が要るのや川柳くさいのがある。「啼くかたをしばし見てあれば蟬のとぶ」なんぞも、蟬のとぶときア小ン便をするものだ。どうも川柳の氣のある句だ。「サイレンの軋みつづける暑さかな」これア軋むといふ言葉が題になじんでゐるところがいい。かういふふうになじむ糊のやうなものはたいせつだ。ぎゆうつと抑へるものがだいじだ。だから反面、へんな題を出されると困る。「辻が花」なんぞとい

ふ。こいつアしやなりしやなりと浴衣で出てくるやうなやつだが、かういふのァ困る。宮中の和歌の題でも「ジョセフィン」、例のナポレオンに棄てられた女だが、かういつた題はこまる。」――

○昭和十七年（一九四二年）十月十五日。

「遅參、弟子ノ連句ノ批評中ナリキ」。私は公私繁忙のままに、遅參のみならず不參をもしだいに重ねるやうになつた。いま思つても勿體なくまた申譯ないことである。しかしこのとき「第四十二回」とノオトにあるのは或ひは「第二十四回」の誤りではないか、いづれにせよ私が遅參や不參を度かさねたのは、たとひ理由が如何であらうとも、私、みづからがとがめられるよりほかはない。

「鷄頭は發句としてもむづかしいが、附句にしてもつながりの糸がむづかしいな。蓮の莖を折つてもつながる糸があるやうに、附句もどこか繫がつてなきやァならねえ。たけ高い第三句のあとの第四句は虛多く實少なきはうがいい。景色よりも抽象

で、句の柄も程々がよくこゝがあんまり立派すぎると第五句がむづかしくなる。――古井戸だから椎の木がそばにあつてもよからう。「露」だから次の句は「衣手」だ、といふふうにどこか何かつながりがなきやいけねえ。芭蕉ほどになるとおのづから次の人が附けいいやうに作る。こゝへ縋つてこいよ、といふふうにやるから、あとの句もまたおのづからいい句になる。これが、なまやさしいこッちやない。蔦があるからつぎは草籠といふふうになつてくるのだから、へんな句は、ともかくつくらないやうにすることッた。今どきの者はとかく發句にならねえのをむりに發句にしてまるで附句ができねえやうなのをわざわざ選ぶ。與奪といふことがあつて、前句へおとなしくつづく附句はつまりに前句に與へるので、前句に逆に附けるのアつまり前句を奪ふわけだ。――

「ひやざけ」は冷酒だから、酒のひえたのとアちがふ。ひえたのなら「ひえ酒」だ。「つゆのひや酒」といやアもう秋だ。「ぴたつけ」はいけねえ。風の句に、また風の字の附句なんぞア「ぴたつけ」「ぢかづけ」で忌むべきことだ。まあ三句ぐ

らゐ先になりやァまだいいが。いつかの「捨てし子はしば刈るころに伸びつらん」「晦日を寒く刀賣る年」ああいふふうにやるのがおもしろいので、附句にァ刀もよし人名もよし、地名もよし、もう裏へ（七句目）になりやァずつとらくになる。季はやつぱり秋、あるひは無季だな。かういふ規則は、困らせるためぢやなく句をよくするためにあるんだと思はなきやいかん。「轉ずる」といつて、附けるにァ轉じなきやならねえ。さうでねえと膏藥を柱に張つたやうにしよつちう一つ事になつてしまふ。ひとつ所に止まらねえで歩き出すんだ。前の句の奴隷になつちやいけねえ。しかし反對をよむといつても、「すずき釣る舟」をみて手拍子を打つたりするのァよくねえ。ともかく、歩きだし始めは、失敗しても川へ落ちるやうな大失敗はできないもの。大失敗はだいぶうまくなつてからのことで、だからいつも遠慮なく歩きだすやうにと芭蕉は弟子に敎へたのだ」――

この日、表六句がすでに二組あつたのをみても、私の度かさなる不參が裏書きされるわけであるが、見渡しの「俳諧之連歌」の「甲」「乙」兩組のうち、いまここ

には、爾後つづけられることになつた「乙」を左にかかげておく。

1『雲の影うつる岩下清水かな』

2『せみのひた鳴くぶなの細道』

3『顛狂に馬の子遠くかけ去りて』

4『鎌の刃光る露の草かご』

5『桔槹の棹のはづれに月淡し』

6『衿にさやかに落ちた秋風』

「第五句は朝だし、第六句も朝をふくんでゐるから、第七句はもう朝でないはうがいい。なに「椎の木のかげのいしぶみ草むして」か、これア第六句の眺めが頭のうへに何にもねえ趣きだから、かぶさつちやおもしろくねえ。前の「えりにさやかに」が「目にはさやかにみえねども衿に」といふところだから、伊豆の「椎木三本」ならむしろ遠矢の眺めだ。何もむづかしくしなくても第七句はとぼけても滑稽でもいふ。狐にばかされたやうな句でもさしつかへない。うむ、「よき人のひろうげ出づ

る小野の莊」か、これアあんまり古い。檳榔毛の車よりも髮の長いはうを用ひたはうがまだ何とかなるだらう。附句は前句の前後も左右も上下も考へ、また過去も未來も東西南北も考へる、といふふうにすることだ。うむ、「よき人の頬を抑へる齒痛かな」か、さうだな、これがまづよからう、「齒いたかな」は「齒の痛み」として、「抑へる」もかへて、

7『よき人の頬をかかゆる齒のいたみ』

まづこれでよし……」

〇昭和十七年（一九四二年）十月三十一日

この日もすこし遲參したがさいはひ連句にはほぼ間にあつた。——

「もう秋は三句出たからこんどア秋でないはうがいい。秋でもいいが。第七句の「よき人の」齒の痛みは戀の句だから、つまり「待ちかねの戀」で、同時に「呼びだしの戀」だな。戀は一句ぢやアすませない。この場合切字を氣にするにアおよば

ない。が「さりきらひ」で、前の句とおなじになつちやよろしくねえ。「この宵たれを待つ屋形船」か、これア屋形船がをかしい。うむ？　冬の季は入れてもよし。句が抽象的すぎるのアいけねえな。なに、「ともしび暗く照らす文机か」うらむ、これはだな。……

8『灯弱く匂ふ玉章(たまづさ)』

としよう。さあ戀はもう一句だ。季は無くてもいいが、前に秋があるから、まづ冬だな。句さへよけりや夏でもいいが、秋のつぎに夏といふふうに逆にいくのア「季もどり」といつてあんまりよろこばれねえ。うむ、そりやあ戀も棄ててもいいが、挨拶だし棄てねえはうがよく、前句も又すてにくい句だ。さあ早く、誰か……植物も生類(しやうるゐ)もよし。神祇も釋教もよし、……うむ、できたか、なるほどこれア紙子着て都落ち、もう一つは出征の夫を思ふ、といふ句だが、それよりも南洋の島へかよふ心の方がやつぱりいいな。これアかうしてみるか。

9『みんなみの海遠々(とほどほ)にゆく心』

つまり抽象的に「出征」といふよりも南洋とか滿洲とか歩きだすことだ。遠くは、とほく心をかよはせるので、さあ、もう一句戀でもいいが、しかしその次はもういけないから、こんどの十句目は、つぎの十一句目が戀でないものをつくりいいやうに附けることだ。たとへば第四句の「鎌の刄」は朝だから第五句が附けいいのでかういふ「呼び」がたいせつだ。「みんなみの」の句のどこをつかまへるかと云やァ「南」でも「遠い」でもいい。地名でもよし、つまり南國とか南方とかさういふところにだけあるやうな物をつかまへて出すことだ。「ゆく心」が戀なので直接戀といはなくてもいい。ぢかに「戀」ぢやあ、雪のなかへはいつて雪をさがすやうなものだ。さあ、鳥もよし植物もよし。……ほほう、たくさん出てきたな、なんだ。椰子やカヌウや黒潮や兵隊や、どれもこれもみんなおんなじ穴から出てきたやうな。うむ、これとこれが先づいいが、この「黒潮」は前の「海」と即くからいけねえけれど椰子はわるくない。そこで兩方の句をあはせて群生は「群立」とでもして

10『日の丸光る椰子の群だち』——

さあつぎはもう何とでもなる。いつたい椰子の季は新しい歳時記ぢやア夏にはいつてるさうだがこりやどうかな。いや、こんどの句は、季はどうでもいいので、うむ？スコオル、敵機、つぎは哨戒機、このつぎは鳥の聲……これがいい、いちばん歩き出してる。さあそこまでいつたら、鳥なら南洋のやうなところにア何がゐるか、暖國だから、たとへばあうむがゐやしないか、といふふうに諸君はなぜ歩き出さないか。うむ「萬歳を白き鸚鵡のさへづりて」か「さへづりて」は「よばはりて」あるひは「くりかへし」とでもするんだな。

11『萬歳を白きあうむのくりかへし』

あうむが日本語を使ふなんぞアいい、ハハハ。さあこれで戀もぬけたから次の句はまた季無しだ。植物も生類(しょうるゐ)も出たし、いや、なにも遠くの國をおもふ必要アもうない。うむ「人だかりする町角の店」か。かういふのは「やり句」といつて大いにけつかうだ。進行するからいい。だが「人」は前に「よき人の」があるから「子供

の群る」いや「群れる」とわざとくだけるか。

12『子供の群れる町角の店』

さあこんどア秋で月を出すところだから、前句によくつくはうがいい。月が出なくても季は秋にして、店にも街にも群衆にもつくやうにするんだな。いやいや月見團子なんざア重なるからもう一歩あるき出さなきアいけねえ。うむ「月のぼり小さき御輿さわがしく」この「さわがしく」は前句の「むれる」と重なるから、そこで

13『新しき御輿きらめく月のもと』

秋祭で、月下の風情がある。さあ祭となつたから神さまの句でもいいぞ。ずゐぶんいろんなものが出てきた、なんぞと思つちやいけねえ。このくらゐぢやアまだまだだめで、勇氣をおこしてどんどん出さなきやあ駄目だ。いつかう口に出てこないのを「口づかない」といふ。三味線でも、考へ考へ彈いてゐちやアだめなのとおんなしだ。おめず憶せずどんどんやつて、人を押し倒しても自分の句を、といふくらゐに初心者は心がけなきやアいけねえ。それアうまけりやあ結構だが、巧拙は別と

してまづ口づくやうに努めることだ」――
○昭和十七年（一九四二年）十一月十四日。
またも遅參、日記に「大いに雨ふる。父京都より來る」とある。――
「鷄は、雨がふりつづけてゐるときは一日ぢゆう表にゐるが、ちよつとふるときは中へ驅けこむものだ。「雨白う松青々に紅葉かな」かういふのは色繪の句といつて、いい句にアならねえが、しかしわりあひ効くものだ」――
「ぎぼしは、擬寶珠より葱寶珠と書くはうが字がいい。「橋のぎぼしに」は「古橋」の擬寶珠だ。前句に「新しき」があるから「古橋」のはうが「うちむかひ」「對附」けになつておもしろい。そこで
14『古橋の擬寶珠露の流るる』――
つぎは秋だが、素秋といつて秋の字さへあれアいい。うむ早い、「行く秋に」は「行く秋を」だ、「やせ姿」は「影やせて」として

15『行く秋をひとり旅する影やせて』――

こんどァ雜だな。そのつぎに花が來るからで、それァ秋は四句も五句もやづても いいが、あとの人のためにもこんどァ雜のはうがよくそれもあんまり墨色でない句 のはうがいい。うむ、けふはみんな早いぞ。「名もなき鳥の囀りをきく」か、「名 もなき鳥」は「名知らぬ鳥」だな、又「さへづり」よりもたんに「聲」として、 「聲をきくなり」のはうがいい。いや「知らぬ小鳥」かな？

16『知らぬ小鳥の聲をきくなり』――

さあ花は何でもいいぞ。だがたとへば「菊の花」などとことわる必要はない、た だ「菊」だ。花の字は使ひかたに氣をつけなきやァいけねえので、「櫻」といやァ 櫻の「花」のことだが、「梅」は「梅の花」といふふうに花の字がいる。ところで、 「國堺こゆれば桃の花さきて」か、これァ元來桃にかぎらねえァから花だけでもつ と工夫するところだ。また櫻ならば花の座にァ「櫻」とことわる必要がねえ。「う む「立ちならぶ石燈籠の夜の花」か。燈籠はけつかうだがこれァ夜の景色だから前

句とあはねえし、一巻のすがたもわるくなるから、畫になほして

17『燈籠の奥ふかふかと花にほふ』

となほして、さいごは「花ざかり」でもよからう。さあ春だ、もう景色ばかりでなく人情の句にして、怒りでも怨みでもなんでもいい、さうでないと風景ばかりの映畫みてえだ。うむ？「春風」ももちろんけつかうだ、いつだつたかおれが、

『なで肩の錦紗をすべる春の風』（露伴）

とやつたら、こみや（小宮豊隆氏か）がすつかりまごついたので、「土筆々々」といつたところ、こみやが『土筆をつつむ絹のハンカチ』とやつて一同の大喝采をうけたことがある。うむ、できたか「僧の衣に輕く春風」か、はじめて坊主が出たな、「輕く」は「輕き」あるひは「輕い」または「衣をあふる」だ、「僧の衣」は「紋紗の衣」のはうがいいな。そこで

18『紋紗の衣輕い春風』

こんどア雜だが、うむ「寺の庭か」これアもちろん「砂庭を」とでもするところ

で「鶴の歩めるうららかさ」か。「鶴歩みゐる」としたはうがいいが、どうも「鶴」も第十六句に鳥があるしすこし早すぎるやうだな。三句ざりならいいが、まだ二句ざりだし、うむ、「猿澤の池畔の柳緑にて」か、池畔は固つくるしい、「池の柳の」とすれば

19『猿澤の池の柳の緑にて』

となるが、すなほすぎてどうも曲に乏しいやうだな。それにこれぢやア戀のよびだしだ？「一花三月」で花は二度まで月は三度までだが、戀はひとりでよむのぢやないから前に出てゐてもかまはない。前に名所があればあとには近所の名所、ここでは若草山などを入れてもよし、奈良の遊廓の木辻のさとが出てもかまはねえ。なに、「主まつ家に萌ゆる若草」？「ぬし」なんぞア都々逸だ。俳諧ぢやァ「ひと」だ」——

「宿題にもいいのがねえな。炭竈がくづれるなんぞア夏の景色で、冬は冬竈はちやんとしてるものだ。「切り張りや禪尼の戀のしのばるる」ぢやア、まるで小學校の

讀本だし、唯しのぶなんぞもおもしろくない。これア『切りばりや老いのしわ手に日のあたる』とでもするところだ。それからこの枯蘆の句は風が鳴つてゐるよりも風が無くなつたはうがよく「死ぬ」は緣起はわるいが『枯蘆に風の死したり沼の萍』のはうがいい。さういやアいつか選をしたとき『かうもりや刺客を送る軒の闇』といふ句を出した者がある。伊庭が星亭を殺したときの句だが伊庭はおれもちよつと知つてゐたからすこし變な氣がした。だがこれアわるい句ぢやねえ」——

〇昭和十七年（一九四二年）十一月二十九日

私の記錄はこの日が最後になつてゐる。日記をみると「ひるま俳句會、おもしろからず、伯父上お氣の毒なり」とあり、さらに四五行つづいてある。この「おもしろからず」といふのは、俳諧ノオトだけでは一見判然としないがあとの四五行のことが反映したものであつたか。いづれにせよ再度にわたつて私の記錄では一卷がつ

ひにまかれなかつたのは残念至極なことではあるが、やむをえない。――

「ここはまたふつうの景色になつてもおもしろくないし、飲食などを出すのも一興で、奈良は酒の名所だから「足もと輕き奈良酒の醉」なんぞとやつてみるか、あるひは三笠の山に鞠をころがしてもいい。三笠山にア山腹に門をつくつて遊覧の人々に鞠をころげさせて門を幾つくぐつたらどうといふ遊びを商賣にしてゐる者があつたからだ。うむ、「三笠の山に燃ゆるかげろふ」か、ただ景色ぢやアおもしろくねえ、やつぱりこつちの鞠の句にして、三笠の「山に」は「山を」として子供の鞠よりもただ「鞠のころがる」のはうがいいな。うむ、たくさんあるからおればつかりでなく前の句主が選ぶのもよからう、元來はさうするものだ。誰だ前句は――」

まつたく赤面にたへないことであるが、猿澤の池の凡庸きはまる句の作者は私であり、すなはち私はさいごまで弟子のうちでも最も拙劣な句作者の一人であつた。

私は、露伴が加朱した伯母の句

20『三笠の山を鞠のころがる』

を選んだ。この日誰が又いく人が出席してゐたか、それはいま明らかでないが、右の伯母をはじめ私の老母、べつの伯母、と、この日曜日は老女が五句中三句まで選に入り、あとは例の若い従弟が占めたが、たしか弟が冗談にいつたやうに、このさいごの日は「ばあサンデエ」の觀があつた。かつて誰かがへんな句を出したとき露伴の娘、私には從姉にあたる文子が「これ熙（ひろし）（私）さん？」といつたことを今私は思ひだす。私はわれながらじつにへたな句作者であつた。このノオトをとりえたのがせめてもの慰めである。——

「この鞠の句はもとどほり子供が遊んでゐる景色とみてもいつかうさしつかへないが、さあ地名が二度つづいたからこんどア地名でないはうがいい。季節は勝手で雜の句だから手柄があつていいところだ。前の句をうけることとばかりア考へねえで、思ひきつてはじきとばしてもいい。前句は春らしい景色ながら春をぬけてゐるから、そこにも注意することだ。さあ、あとにいくらでもいい句がつけられる句だ。たとへば子供なり犬なり蝶なりが鞠を追つてもよし、また鞠だから女の子にして花簪（はなかんざし）

や下駄を出してもいい。イゴ（動）き出しさへすりやあいくらでも景色はある。奈良にこびりつく必要はねえ。いつまでも前句につかまつてちやア「執着」でよくねえ。鞠はまた柳にかよふものがある。さあまだか。機轉がねえと舞臺の騙けだしで一つとこにとまつてゐることになる。さあ——どうだ。三笠の山におほぜい人間がゐてもよし、千人もある同社もあるから田舍のぢいさんばあさんなんぞがまじつてゐる千人同社もいいぞ。うむ「よそほへる幼な兒うばにいだかれて」か、これア前に即きすぎる。「案内者つまらなさうに說明し」か、これア川柳だ。やつぱり子供の句のはうがいいが、子供が抱かれてしづかにじつとしてるのでなく、騷いで賑やかにしてゐるはうが、句もいごきだす。よし、これアいい、これア「どよめきまじる」とすれアいいし、品もなくはない。

21『子供らのどよめきまじる青嵐』

これは夏の句だが、あとは夏にしてもよし、他の季でもよし、雜だからいい句を出すところ、この靑嵐も手をさしのばしてあとの句をひつぱりたてるところがある。

いや、前句と兄弟みてえな句はいけねえ、他人をもつて來なけりやァ夫婦にァなれねえ。さあ、どうだ。前句は街なかぢやない、といつて深山幽谷でもない。さあ郊外ででも、飛行機がとんでも、雲がとんでも、何でもいい。だが赤道の上に立ちながら南極のことを云ひだすなんざあいけねえ。さあ、雜の句だから勢ひよく空をグライダァがかけつてもいいぞ。また空に鐵塔がそびえてもよし、送電線のケエブルでもかまはないぞ。さあまだか、うむ、たうとうグライダァがとびだしてきたか。さうだな、これァだな、かう「大空高く」とすなほにすりやァいい。

22『大空たかくグライダァ飛ぶ』

さ、つぎも雜でいい。こんどァ何でも附くぞ。田舍のちよんぼりした山、そこへ村長が出てきたり、いつそ東京から人がきたり、さあ何でもいい。グライダァで勢ひもよくなつたし、田舍のぢいさんや劍術使ひがアッと驚いて空を見あげてもいいぞ。もつともこれァ前の句をつぶすおそれもなくァない。蕪村はうまいにァちがひないが急におどかしをするし、またさういふ材料をたくさんもつてゐる。芭蕉は一

生杜甫の詩をしよつてゐたが、蕪村は、芭蕉が杜甫や西行をつかつたから、自分はほかのものにくひついた。いろいろ食やアおどかすこともできる。明治時代の耶蘇教が宇宙(コスモス)がどうのかうのとおどかしたやうなものだ。さあ、誰かまだか、かういふときア月をもちだすのも「繰りあげ」だからかまはないが、しかしいい句をもつてこなきやアだめだ。いい句なら規則からはづれても通るので将棋でも定跡はづれの手を初盤でさすこともある。芭蕉は定跡に拘泥するのアけつして好きでなかつた人だから、いつかも云つたやうに、「龜の甲煑らるるときは鳴きもせず」など妙な句を發句として認めたことあるので、さあ、グライダアのあとがつづかねえなんぞアはどうしたつていふのだ。田舎の連中が空を見ながら追つかけて田甫のどぶへ落ちてもいいぞ。どうも……かう出てこねえとおれも所在ねえ。附句は、前句を侮辱したのでもないかぎり、ふざけた句もたまにアよく、「買ひたての靴に田螺をふみつぶし」などととやるか。芭蕉に「田螺をくうてなまぐさき口」といふのがあるが、これア「田螺もなまぐさのうち」の諺をしやれたもので、前句はたしか念佛の句だ

が念佛だからかまはないのだ。こんにちぢやあ諺が知られてないからわからないのだが、さあ、グライダアがとぶのを追つかけて、「かけ歩く鯨の靴の早われて」なんぞとしやれてもいい。さあどうした、芭蕉は連句のときあんまり大ぜいの相手にアなつてやらない。大ぜいになるとみんなが芭蕉ひとりにくつついてくるやうになつておもしろくないからだ。それで芭蕉は、劒術がちやんとつかへるやうになつた者だけを相手にし、未熟な者にア連句でないのを教へた。嵐雪と越人の連句を半歌仙で切りすてたこともあるくらゐだし、しかも版行のときア弟子の句も苦心慘憺してなほした。それが證據にア芭蕉が死んでからガタ落ちの句が多くなつたのア「續猿簑」をみりやアすぐわかる。ところでもう出さうなもんだな、誰でも一句だちのおもしろさがたいせつだが、なに？どれどれ、ハツハツハ、これアをかしい、ハツハツハ。これア、かうなほさう。

23『あれあれと町長區長田にはまり』

ハツハツハ口調もおもしろいし、これアをかしい、品(ひん)はないがじつにをかしい、

さあ…このあとはどうしたらいいか、ちよつと難儀だな。「年をへし糸のみだれの古禮服」式にやるか、こんども雜だから增產獎勵で田へ立つことなどを考へるか。さあ、もつとどんどん口づかなきやアだめだ。太閤はいくらでもできた、そのかはり明治天皇とアちがつて何しろ「鳴くほたる」だから、ハハハ。明治天皇は工夫もなかなかあられたが、太閤はさうぢやねえ、「奥山に紅葉ふみわけ鳴くほたる」細川幽齋が附けろといはれて大いに弱つて「しかとは見えぬ森のともしび」ハハハ。うまくはないが、かうすぐあざやかになかなかできることではない。もちろん嘘話だらうが、そのくらゐのことは太閤はやりかねない。知行所を太閤からもらつた男があるとき松茸をささげて「知行所に生えました」三日たつて又おなじことをいつてささげると、太閤が「生えすぎるな」ハハハかういふ人だ。もののよくわかつた、小言が滑稽にいへるえらい男だ。うむ？　できたか。これアいい、かうあらためて

24『增產ほこる豐年の秋』

としよう。うむ、なかなかよくできた。ちよつと動かすとかうなる。外から動かすこと、それから句によつちやア中が動くこどもたいせつだ。「肩に紅葉」ぢやあ動かねえ。「肩を紅葉」で動きが出てくる。さあこんどア秋の句、月を入れてもよく、前句に「秋」があるから、元來はこれから五句目が月の座だが、月をくりあげてもいい……」

私の記錄はここで終つてゐる。昭和十五年（一九四〇年）十二月一日から、同十七年（一九四二年）十一月二十九日まで、まさに滿二ケ年である。

露伴娘の言葉から

私（文子）は子供のころ近所の白鬚神社の縁日へ父露伴とともにしばしば行つたが、父は植物がすきで花や鉢植をよく買ひ、私たち子供らにも植物を買ふことだけはゆるした。いはゆる「夜店の植木屋」で父はよく値切つたものであるが、買ひ上手なのか賣り上手なのか、われわれが去らうとするとうしろから植木屋に呼びとめられてけつきよく買はされたことがよくあつた。

露伴は私たち子供らに、これは何といふ花か、なんの木かなどとたづね、私たちが答へられないと、その名や特徴など、花瓶なり鉢植なりのそばで直接教へてくれたものである。部屋の中だけでなく、私たちを庭へつれだして植物を眺めさせたこともあり、さういふ場合は植物をいはば間接に觀察することをも教へられた。たとへば桐の木の下に立つたときそこに小さい糞が落ちてゐれば虫がついてゐることを知つたたぐひである。とくに思ひだすのは公孫樹で、せいの高いこの樹に百舌鳥がよくあつまることを知り、銀杏と百舌鳥といふ組みあはせをもおぼえた。秋になつて銀杏の葉が黄ばむころ、じつさい百舌鳥がたくさんきて騒ぐのであつた。小柄だ

が鋭い鳥であることを知り、また「もずの枝さし」すなはち取つた餌を枝に刺す習性があることなども教はつた。

櫻には又べつな毛虫がゐた。毛虫といへば、音響で害虫を追ふことを、父は私が幼なかつたそのころすでに語つてゐた。しかしそれを實驗するまでにはいたらず、やはり棒の先のぼろに石油をかけ火をつけたので毛虫を焼くといふ普通の方法をとつてゐた。蜜柑の木にたかる貝殻虫をも父はひどくきらつたが、この虫についても父は音響で驅除する話をしたやうに思ふ。のち小石川へ移つてから、法螺貝を父が吹いてゐたことがあり、いまおもへば音響による害虫驅除の實驗だつたらしいが、どの木の何虫であつたか、又その實驗が成功したか否かはこんにち遺憾ながらたしかめるすべもない。虫を音で追ふことは昔からあるさうで、また人の耳にはきこえない音で虫にはつたはるのがあるときいたやうにも思ふ。なほ虫については、竹と虫とのことをも思ひだす。竹の葉がてらてらしてゐるころ、虫はほとんど必ずついてゐるのであつた。

梅は鋏で切るものではなく、手で折るものだときき「折りだめ」のことも教はつた。折りだめとは梅の枝を曲げるのにたとへば一寸ごとに折つていつて枝ぜんたいを曲線に折りためることであるが、のちに生花を習つたときこの幼時の教へを私は思ひおこした。觀察は庭だけでなく、隅田川の土手や、社寺の境内や、さらに公園などでもおこなはれた。松は向島では枯れやすく、父はその理由をいろいろ考へてゐたが、それかあらぬか、松を庭に植ゑることは好まなかつた。父の教へかたは觀察のほか實際に重きをおいてゐたので、梅の實なり葡萄なり、まだ熟さないものも食べたければ食べるがいいといふ多少強引なところもあつた。

のちに私は庭の一隅に畑をつくつたが、父から促がされたのではなく、さういふ趣味を父によつておのづから養はれたのである。その畑に父は出てきて、たとへば豆をみれば「豆を煮るに豆殼を以てす」ることなど教へ、かつ私を相手にその實驗をも試みた。いふまでもなく、豆の枯れだのはやわやわと燃えていくので、松の薪などのやうにかツかツと燃えあがるのではない。さういへば、はじめて枝豆(大豆)

ができたとき、父はよろこんで和歌を詠んでくれたが、今はつきり記憶してゐないのはまことに惜しいと思ふ。父の教へかたは、たしかに實際に卽した直接の教育であつた。たとへば「花のいろいろ」にある「貝殼のやうな」といふ父の文章の表現は、私にとつては子供のころ乙女椿の花瓣を父が一枚々々私の目のまへでとつてみせながらさう教へてくれた思ひ出とつながつてゐる。「廢園に藤の花」などもいかにも向島らしいほんたうの景色であり、また蓮を庭の池にそだてたときは、子供の私はその開花はつひに見なかつたけれども、開花と音の話やまた早起きの德などのことを敎はり、かつ父が幼時眼病をわづらつた話をも印象ふかくきいた。蓮といへば、花でなく實を砂糖づけにすれば美味であることをある時敎はつて私はさつそくその實驗をしたことがある。

動物には、植物ほど緣がなかつた。飼つたものでは犬がいちばん期間が長いが、はじめはポインタア種の仔犬でこれは澤田撫松氏から贈られたもの、つぎはセッタア種の獵犬でこれは眼病で棄てられて迷つてゐたのを拾つて育てたのである。この

セッタア種の犬に父が「フェス」といふ名をつけたのは、その尾が建築のはうでいふ懸華(ノエストウン)に似てゐるからといふことであつた。フェスは長く飼はれ、大正震災後向島から小石川へ移轉した後までも生きてゐて、父にも弟にも可愛がられたが、のちに病死したときは私も一晩徹夜で看護してやつたほどである。死んだ日の朝であつたが、父はフェスの息が今たえたときくと、二階からおりてきて、亡犬の頭をなでながら短い經文を誦した。

父は猫はこのまなかつた。若いころ北海道時代にひとから頼まれて、あるとき猫を海に棄てたところ、翌日その猫がずぶぬれになつて歸つてきたのを見て心をうたれたことがあるさうで、これが猫ぎらひの原因らしい。鳥では鷄も飼つたが、ひところめづらしくも鷹を飼つたことがある。これは湯河原溫泉で弟が手に入れてきたものであつたが、片目のふびんな鳥で、父が棒のさきに小板を付けたのの上に牛肉をのせてしばしば鷹にあたへてゐたさまをいま思ひだす。あるときこの鷹が籠からにげだして、私らがそのあとを追ふと、屋根のうへをいういうと舞つたが、やがて

棟のうへにとまつた。父や私らは庭からこれを見上げたが、父もこればかりはいかんともしえず、つひに鷹がとび去つていくのをひじやうに殘念さうに見送つてゐたことを思ひだす。これはフェスよりも前の古いことで私が十のころ、すなはち父が四十六七のころのことであつた。

私は女學生になつたころ弟とともに一時ひじやうな映畫ファンになり、これは當時向島に日活撮影所があつたためもあらうが、今おもへば父から影響されたところも多かつたやうである。日活撮影所は白鬚橋の手まへ、もとのキリンビイルの跡にあり、われわれの家の近所でもしばしばロケエションがあつて、目玉の大きな尾上松之助など私もいくたびか見かけたものであるが、あるとき父が淺草で松之助映畫をみてきて、仕方噺をしたことを思ひだす。たしか鍋島の猫騷動の映畫であつたが、「怨みをはらさでおくべきか」の、さいごの「か」の字に不氣味な調子をもたせて語つた。もちろん辯士はなやかなりし活動寫眞の時代であつたが、辯士といへば、父はあるとき某辯士が「怪猿はましらのごとく木にのぼり」と說明したといつて呵

呵大笑したことなどもある。女形の立花貞次郎がカチュウシャを演じた活動寫眞についても感想をのべたこともあつた。しかし父はそれらの邦畫よりも一そう洋畫を好んだやうである。父がいかに映畫がすきであつたかは、當時すでにかかさなかつた晩酌を、浅草へいくときは早目にきりあげた一事によつても想像されえよう。さういへば毎週エデ・ポロの連續活劇を私や弟も父について見にいつた記憶がある。洋畫初期に多かつたいはゆる喜劇映畫では父は「新馬鹿大將」ことアンドレ・デェドややぶにらみのベンタアビンのをかしさをよろこんだが、「デブちやん」ことアアバツクルは好まなかつた。本格的な映畫では、題は忘れたがヤニングスとリア・ド・プティ主演の曲馬團映畫をどこかで見てきて私たちにも見るやうにすすめたことがある。おもへばすでに大正のはじめごろマアトル・ゴンザレス主演のクレオパトラ映畫を帝劇で見て私たちに薦めたのも父であり、たしかに私や弟の映畫熱は父からそそられたものも多分にあると思ふ。父の俳句の中にリア・ド・プティをよんだのがあるはずで、女優はこのプティや、クレオパトラのゴンザレス、連續活劇では

パアル・ホワイトなどがひいきであつた。父の好んだ女優の型は、概して痩せ型よりも小肥り型、また小柄よりも大柄だつたやうである。震災後は淺草からも遠ざかり映畫をみる機會も少なくなつたが、それでも映畫はけつしてきらひではなく、ときどきは見た。長い生涯のさいごに父のみた映畫は、中谷宇吉郎氏監修の文化映畫「雪」であつた。晩年、今次の戰爭中病床にあつても、洋畫の進歩に接しえないのが殘念だといつてゐた。米獨佛伊その他どこの映畫でも、いい作品はよしとして、國籍びいきはなかつた。晩年病臥中も私にニュウス映畫を見させてはくはしくその話をきくことをよろこんだが、あるとき私が日本兵の突貫の場面をみて、それがどこかつくりものらしく迫眞性に乏しかつたといふ感想を述べたとき、父は病床に同意して、さもあらう、さううまくはおそらくいくまい、と云つた。そのまへに私がある外國ニュウス映畫で飛行機が墜落して塔乘者が燒死した瞬間的場面をみて父に語つたときは、父はニュウスはさうあるべきだと云つたと記憶する。

映畫ならぬふつうの寫眞では、父はひところ撮影に凝つたことがある。フィルム

普及以前の乾板時代の古いことであるが、大きな重い機械をあちらこちらかつぎまはり、とくに水や舟に縁のある風景をこのんで撮影した。今回の戰災でそれを悉く燒失したのはまことに殘念である。撮影するのでなく、されるはうの寫眞では、父は、いはばおしやれなところがあつて無雜作にうつされることをよろこばず、したがつてスナップはことにきらひであつた。たいていかまへて寫させたものであり、そのために父の寫眞は多少顏を上向けにしたものが多い。自分だけでなく、私などにもうつされかたを敎へたもので、父はわきからみてゐながら私のポオズにも細かすぎるくらゐの註文をつけたものである。たとへば女の寫眞は正面から寫されるよりも七三に斜めにむくのがいいと云ひ、左手で袖口をつまみ肩をおとすやうに前に出すポオズを私につくらせて、さうすれば撫で肩になつてうつくしくみえるといつた。顏の化粧も、ただ白粉をぬるのではなく、鏡をみてみづから工夫せよといつたこともある。女が帶を胸高にしめるやうになつたのは大正中期以後とおもふが、父はさういふ帶の位置は美しいとしなかつた。その着付けやまた襟もとの恰好などに

も註文をだした。すべて猿まねはいけない。ほかのひととちがふ恰好をしてそれでをかしくないやうになればいいのだともいつた。姿のととのはないものを父はこのまず、いやな恰好に禮儀は伴はないものだといつたこともある。ことに女の手については、文子の手は白魚の手でないから置きかたに注意せよといひ、そのほか日ごろから、たとへばくそづかみなど女がぜつたいにすべきではないといつた。土瓶や鐵瓶のつるは手のひらを斜めにあてて取るのがよい、とみづから取つてみせたが、ただし大きくて重いものは、むんずと摑んだ方がいい、と芝居で義經が煮湯をうけとるくだりの話をして、だから正月つかふ廣蓋の盃などは親指を中へかけてじつかりと持つにかぎる。そのはうが自分も安全であり、ひとにも安全かつ安定した感じをあたへるといつた。

父は着るものにも註文が多く、下着なども絹の起毛下をこのんだ。起毛下とは表はなめらかで裏のけばだつてゐる布地である。シャツはこのまず、着てゐてもボタンはかけなかつた。足袋は白足袋しかはかず、それももとは海老屋や中川屋や茗荷

屋へあつらへたものである。足袋がぶくぶくしてゐるのは田舎くさく、足の指のかがまりが外からみえるのは下等であり、もちろん皺などはもつてのほか、また色足袋は品がないが、しかし元祿の色足袋は足を小さくみせるためゆゑ、小櫻の足袋などはなかなかりかうな考へかたなのだといつた。私は身長五尺二寸で足袋は九文であるが、父はそれでは足が不つりあひに小さい、どうも不仕合せな相だといつたことがある。私は辰年だが父はかつて、龍には雲にのぼるものがあり地にもぐるものもある。お前はもぐるはうだともいつた。私はひとびとから日ごろ強い性格とみられてゐるやうだが、父は私を弱いやつだといひ、又べつな時だが、父は私を評して何をさせてもできねえやつだ、また、金はたまらねえやつだ、しかしあたじけないことはしない奴だといつた。私とちがつて弟は兩眉に渦のあるめづらしい相だつたので、何かになるだらうと父は期待してゐたやうであつたが不幸早逝した。幸田家の人々の相貌は遺憾ながら好男子型や美人型とはおよそ緣がなく、私が子供のころある新聞配達夫が父の顔を評して盤臺面といつたのをいま思ひだす。子供の私がそ

のとき「ばんだいづらつてなんのこと？」ときくと、父は「おれみてえなのさ」といつた。父の妹である叔母たちも顔はまづいが、あるとき私が老紳士たちばかりの會へ出席して、歸宅後父に、男は年をとるとりつぱになるものだと語つたとき、父はりつぱになるのは男ばかりではない。叔母たちをみよ、世間のばあさんたちと並べてみれば光つてゐる、といつた。父は、延叔母はさておいて幸叔母は火形の相で男まさりだから融和の性質がすくないと評した。

父は將棋をこのんだが、私や弟には敎へなかつた。しかし子供のころ私は棋譜を讀まされたことがあり、なぜかいつも盤から離れたところで讀めといはれたことを思ひだす。挾み將棋や五目ならべならば私たちと遊んでくれたこともあり、私の女學校のころからは百人一首なども好んでしてくれたことを思ひだす。父のよみかたは「小野小町花の色は……」といふやうに名からよむよみかたで、又いはゆる標準がるたよりも古風な書體のものをこのみ、とりおくれると、「この巾着きりめ」などといつた。坊主めくりなどをしてくれたこともあり、正月ならぬ夏から取りだ

した年もある。子供の私らが相手のとき父はみづからのことを「おとッつァん」とよんだ。

父は孔子を孔子さま、家康を家康公とよんだが、秀吉らはよびすてだつたと思ふ。耶蘇敎はきらひなはずであつたが、私が繼母（後妻）の影響でひところ近所の子供たちをあつめてクリスマスの催しなどをしたときは格別反對もしなかつた。私はそのクリスマスで子供たちに蜜柑など贈るのに小遣ひがたりないためセルロイド玩具の內職を家へもちこんだことがあるが、父はだまつて私にその內職をつづけさせ、クリスマスの當日になつて多額の小遣ひをくれた。私は女學生のころは耶蘇敎熱がたかく、近所の子供たちを集めてはオルガンで讃美歌を敎へたりして何かと父の勉强や仕事を妨げたものであるが、父はいちども小言はいはなかつた。アンダアソンといふ宣敎師の紙芝居などには、父も興味をもつてゐたやうである。やはりそのころであるが、近くにゐる素人落語家をよんで、こんにやく問答など一席かたらせて近所の人々とともにそれをきき、自他共にたのしんだこともあつた。

私は父から何を讀めといはれたおぼえはほとんどない。私は讀書よりもむしろほかのことにいろいろ手をだしたが、理屈ならぬ實行については私は娘のころは不平をいはずすぐ實踐にうつるたちだつたので、このことは父からほめられた。畑に鍬をふるつたのも一つには父からほめられたためであるが父はほめられる愉しさを私に教へてくれたと思ふ。のちに結婚したときも、嫁入教育は、私は父からこれといつて受けなかつた。亡夫との縁談がきまつたとき私があまり乘氣の樣子でなかつたことは父にずゐぶん心配をかけたやうである。ある晩私が眠れずにゐると、父が二階からおりてきて、さう物を思ふな、心配しないで寢ろ寢ろ、といつたが、その言葉には眞實があふれてゐて私は泣いた。その一兩日後であつたらうか、下の句が「いざ白糸の身を惜しむかな」すなはち染める糸ではあつてもいざ白糸のといふ意味であるが、もとよりいさぎよく染めよの心をよせた和歌を、父は私によんでくれた。さきの枝豆のどきの和歌同樣に、私はこの白糸の和歌も、恥づかしいことながらいまはつきりと記憶してゐない。私は入嫁するはずが、弟が亡くなつたので、夫

を婿養子として迎へた。ときに昭和三年、私は二十五歳であつた。やがて私は夫と父との間にはさまつて苦勞することになり、のちふたたび父の家に住む身となつたのであるが、このころから父は自作の小説のことを私にも時折話すやうになつた。

小説といへば、いつたい明治文學については私は父からほとんど何もきいたことがない。先刻の映畫談のときにも思ひうかべたことだが、父はポォヱルの「影なき男」のやうな映畫を案外おもしろがつてみたやうに、探偵小説をこのむ面があり、ひところ「新青年」などにも目をとほしてゐた。小栗虫太郎の作品を、くちやくちやしてゐる、と評した言葉をいま思ひだすが、ルパンやホオムズなどは私も父とともによんだやうに思ふ。父は涙香はつまらないといつた。ポォは好んだやうである。私はそのころポォの渦卷を學校で習つてゐたが、ある日、談たまたま水渦のことにおよんだとき、父は、萬一のために敎へておくといつて渦について語つた。渦は藁一本でも縱にまきこむものだが、人が渦に卷かれたときは身體をえびのやうに曲げるがよい、渦は底につづいてゐるものゆゑ、底まで身が沈んだとき、脚を曲げてゐ

ればば衝撃もすくなく又そのとき底を蹴つて浮きあがることもできるといつた。翌日私は學校の歸路に吾妻橋で一錢蒸汽にのるさい足をすべらせて水中に落ちた。そのとき船の下にもデッキの下にもはまらずさいはひ助けあげられたのは、渦とは關係がないとはいへ、前日の父の敎へが閃いて少くとも私が慌てなかつたためである。もつとも私を引きあげてくれたひとの話によれば、水中に袴がひろがつてひじやうに重かつたさうである。私は當時麴町の女子學院の五年生であつた。

父は晩年、まだ書かない小說の素材や梗概についても私に語つたが、それは例の仕方噺で、女の言葉などは女になつて話した。父の仕方噺は、前述の映畫にしてもこれら小說にしてもまた芝居にしても、私にはひじやうにおもしろかつた。芝居といへば、ある脚色のことに關して、芝居者には手がつけられない、といふやうな感想をもらしたことがある。晩年の仕方噺を私はただおもしろく聞きすごしてしまつたが、小說のかきかたといふやうなものは私は父からはいちども敎へられたことがない。しかし、たとへば、着物さへ見えないやうでは小說はかけない、といふやう

な言葉はいくたびかきいたことがある。父は着物の色や地のことにもずゐぶんくはしかつた。私は父の仕事には全然觸れなかつたが、父のかく物に無關心でゐることはできず、父も自分のかいたものを私がよむことはよろこんでゐたやうである。

私は父とは人間的に何か以心傳心以上でさへあるつながりがあつた。私は父のためにはずゐぶん苦勞もしたが、いいときの父のよさは、そのあとでどんな苦勞もいとふまいと思はされるやうなたとへがたいよさであつた。さういふとき私は、いやなときの父を忘れ、心から父の言葉に耳を傾けた。さうして、さういふいいときの父の言葉は、のちにつらいときにしばしば私を救ひ、たとへばかつて家出しようとしたときも私はいいときの父のよさをおもつてつひに家出からひきとめられた。戰爭がすすんで空襲がさかんになつたころから私はまつたく父に左右され、延叔母からは木偶のやうだとさへいはれたが、しかも私はそれをどうともしえなかつた。いやなときの父を知る私には、ちかごろのいはゆる心理的スリラア、たとへば映畫の「ガス燈」など全然スリラアの感じがしない。長年のあひだに私は父からさんざん

に斬られ、私も又斬りかへしたが、しかも父のいいときのよさのため私は最後まで父に死なれるのがいやでならず、父の生きながらへることに私はつよく執着し、それだけまた病勢の一進一退にはたえずはらはら心をつかつた。しはぶき一つでも、私はそれが苛責になるくらゐ胸がいたんだ。それでこそ、父が逝いたとき私はいい別れかたをすることができたのだと思ふ。

露伴妹の言葉から

私（安藤幸）がヴァイオリンを習ひはじめたのは、十二のとき、明治二十一年（一八八八一年）であつたが、このとき露伴兄は北海道から前年歸京して親きやうだいたちとともに神田の末廣町の家にゐた。

私たちきやうだいの父は當時紙屋の店をひらいてゐたが、店舗は住宅とは別だつたので、同じ町内に幸田姓の家が二軒あつたわけである。店は末廣町の表通り、いまの電車通りである御成街道に面し、住宅はその裏通りにあつた。店の屋號は「愛々堂」といつたが、この名は耶蘇教からきたものらしい。父はそのころ耶蘇教に凝り、私なども日曜學校へ行かされて、カアドをもらつたりオルガンをきいたりしたおぼえがある。「愛々堂」ののれんは父の命によつて母がしぶしぶ天竺木綿を縫ひ、私が墨すり役となつて硯からいくども擂鉢のなかへ墨汁をすりだめたのを、長兄が五六本も束にあはせた細筆で「愛々堂」の三文字をかいた。母や私たちは紙屋をいやがつたので、日ごろ父だけが店に住んでゐたが、父は客への應待が「さやう然らば」のため商賣がうまくいかない。そこへ露伴兄が北海道から瓢然歸京したの

でさつそくその店番を仰せつかつたわけである。露伴兄はしかし一日ぢゆう本ばかりよむ不熱心な店番であつた。五厘の釣銭を客から「要らないよ」といはれて憤慨したといふのはこのころのことである。

兄がけしからん本を讀むといつて父が苦笑してゐたのは、西鶴の本のことだつたらしい。しかしさういふ小說勉强のおかげで「露團々」ができ、その原稿料で京大阪へ旅行したので、父は「鐵四郎（露伴兄の幼名）に物が書けるのか」とおどろいてゐた。「一刹那」や「風流佛」や「對髑髏」ができて、文名にはかに高まるにつれて、末廣町宅に露伴兄を訪ねてくる人々が多くなつた。

そのなかにひじやうに美しい娘がゐた。いつも俥できて俥をまたせて露伴兄と話しあつた。この美しい令孃は双子木綿の問屋の愛娘で、齋藤瑩（えい）といつた。髮は高田にゆひ、鼻がたかく、からだがすんなりした美人であつた。双子問屋の娘としては今おもつてもふしぎなほど學問ずきで、小說ばかりでなく佛敎書などもよみ、露伴兄も瑩子があふたびによく本をよんでゐると感心してゐた。この「お瑩さん」は

いつのころからか齋藤紫英と號し、さういふ名で手紙などもかいてきたが、字もなかなか上手できれいであつた。この瑩子には、露伴兄はかなり好意をよせてゐたやうである。やがて露伴兄が谷中に家を買つて神田末廣町を去るまで瑩子はしばしば訪ねてきたので、私たちとも知りあひになつたが、長女で跡とり娘なので、のちに養子を迎へた。齋藤瑩は二人姉妹の姉で、その妹の齋藤悦は上田敏氏に嫁いだひとである。私は妹の「お悦さん」とはひところ黑川眞道先生の許で偶然同門になつたこともあつた。姉の「お瑩さん」には末廣町以後はながらく會はなかつたが、のち私が結婚したとき祝ひをのべに京橋の安藤の家へ寄つてくれたことがある。兄を度たづねてきたころは瑩子は淺草にゐたが、私をたづねてくれたときは神奈川片瀬の龍口寺の日迦上人のもとに夫君とともに入門して、優婆塞優婆夷になつてゐた。そのとき片瀨へ遊びにくるやうに瑩子は私にすすめたが、それを果さずにゐるうちに不幸病死した。

露伴兄は明治二十四年、下谷の谷中に家を買つた。おそらく原稿料で買つたもの

で、値段は百何十圓ぐらゐであつたか、私たち兄弟のうちで最初に借家ならぬ家をかまへたのは露伴兄である。まだ獨身で、飯たきの婆やと書生とをおき、ややのちには父も露伴兄のもとに同居した。父が家族と離れて兄と共に住んだのは、息子が一家の持主になつたのをよろこんだためらしく、やがて父のほかに私も兄の家にしばらく同居することになつた。明治二十四年、市區改正のため神田末廣町の家が店も住宅も共に立ちのきをよぎなくされ、幸田一家は向島須崎町にひつこしたが、そのとき私は高等小學四年（當時小學校は尋常高等八年制）の卒業期が近かつたので、向島から神田の芳林學校までは遠路すぎる、そのうへ私は小學生でありながら同時に音樂學校の選科生でもあつたので、上野へ通ふためにも向島須崎町の親の家より谷中天王寺町の兄の家からのはうが好都合だつたわけである。谷中の家はすなはち兄が「五重塔」をかいた家で、天王寺五重塔を東南のかたに見あげるやうになつてゐた。

天王寺の家は日暮里の墓地に接して、氣味のわるいほど靜かな家であつた。五重

塔にちかい通稱銀杏横町といふ半町ほどの細道のつきあたりにあり、三原屋といふ花や線香を賣る店よりもさらに奥のはうであつた。墓場の隣りといふよりも、むしろもう墓場の中であり、便所の窓から新佛の白張りの提灯などがみえたり、天王寺の讀經がきこえてきたり、もちろん電氣や蓄音機などない時代で、しかも家が大きかつただけにひつそりかんとしてゐた。南むきで、八、八、六、四半、そのほか三疊が四つ、二疊が一つ、合計九間といふ大きな平屋であつた。父が私よりもさきにこの家へ移つてきたのは、さういふ淋しさを、たとひ隱居ひとりでも頭數を多くして賑はすためもあつたかもしれない。ともかく父は前述のやうに露伴兄が家を買つたことをひじやうによろこんで「離れ」と稱した四疊半の茶室の外まはりにみづから竹の羽目を張つたり、天井も紙で貼つたり、いろいろ手を加へたが、この「離れ」の茶室がすなはち露伴兄の仕事部屋でもあつた。門から玄關へいく生垣道の、右手にその「離れ」はあり東は窓、南は障子、西は壁、北は廊下で母屋につづき、露伴兄は南に面して東南隅にそまつな机をおいてゐたやうに記憶する。これが「五重塔」

の部屋であつた。

ふしぎなことに私は、私や父自身が當時この家でどの部屋にゐたか、今はつきりおぼえてゐない。記憶してゐるのは、ほぼ下のやうな 338 2 3638 4 といふ間取りや、中廊下ぞひの戸棚に「一切經」がはいつてゐたことなどである。その一切經は和綴の活版本であつた。

この谷中の家で露伴兄は文名ますます高まつたので、しだいに知名の人々も訪ねてくるやうになつた。私は神田の芳林學校を明治二十四年七月卒業、ときに十四歲であつたが、ひきつづいて音樂學校へかよふため寄寓をつづけたので、露伴兄の家でときどきそれらの人々を見かけたことがある。なにぶん十四やそこらの小娘として婆やや書生にかはつて茶など運んだとき目耳にしたことにすぎず、しかも五十餘年も以前のことなので、印象がすつかり薄れてゐるのは殘念ながらやむをえない。

幸堂得知は、おしやれ坊主の感じの、あたまの禿げた、てれてれしたところのあるひとであつた。一中節が大すきで又大とくいでもあり、露伴兄に一中節の稽古熱

をふきこんだのもこの人である。下谷の上野町、いまの廣小路から上野公園へいく、電車通りの右側の死せんべい屋の横町に住んでゐたが、もちろんそのころは電車はなく鐵道馬車の時代であつた。露伴兄よりもよほど年上のふざけたぢいさんといふ感じの人で、羽織よりもひふにた道行を着てゐたが、露伴と一中節とについてはのちにも語ることにする。

山田美妙齋は、なにかべろんと舐められたやうな感じがあり、ある日私はべろんとした瓢簞をみてこれは山田さんのやうだといつて兄から苦笑されたことがある。誰であつたか、それでは美妙は「なめひよう齋」だな、といつてから、さういふ綽名がひそかに通用してゐた。

齋藤綠雨は頰がこけて顏色が蒼く、三角形の、怨めしさうな、不氣味な目なざしした人で、どこか皮肉な陰氣な感じがあつた。すでに露伴兄が神田にゐたころからときどきたづねてきたが、來るとまたいつも長つ尻なので書生や婆やがぶつぶついつた。綠雨の家は本所のはうだつたやうに記憶する。いつたい誰がきても、晝と

夜とをとはず、「おい、酒だ」といふ聲がかかり、酒がすむと客も兄もいつしよに外出することがしばしばあつた。私はおあいそができず、茶なり酒なりをもつて時たま客の前へ出ても長座しなかつたので、客の人々をせいぜいこの程度にしか知らないのである。ある日も誰がきたときであつたか、私はその客からどうですすこし話していきませんかと云はれたが、ただ、はあおそれいりますと短くこたへてすぐ引きさがつてしまつた。あとで露伴兄から、そのくらゐなら、いつそ「私は無駄口はきらひです」となぜはつきりいはなかつたかと云はれた。幸堂、美妙、緑雨の三氏のほかにも、たとへばつぎのやうな人々をおもひだす。

森田思軒は、大目玉のぐりぐりッとしたひとで、糸切齒が二本みえてゐた。高橋太華は、頭のまんなかが禿げた、布袋さまのやうな、氣がよささうなおぢいさんであつた。石橋忍月は、角ばつたにいッとした顔で眉がふとかつた。淡島寒月はあつさりしたぢいさんで、色白の長い顔に目が大きかつたが、いかにも善人にみえた。向島に住んでゐて、おきようちやんといふ九つぐらゐの小さいりかうな娘があり、

このおきようちやんがあるとき露伴兄に葡萄の食べくらべをしませうといつて、房から實をちぎらずに食べて露伴を負かしたといふ逸話がある。なほべつのときだが、露伴が寒月と旅行をしたとき、あるところで寒月がちよつと待てといつて立ちどまるとスケッチ帳を出して悠々そこの風景を寫生しはじめたが、そこの眺めがどこが繪になるのだか露伴にははじめちよつとわからなかつた、しかし、繪ばかりでなく俳句などでも、自然をよく觀ることのたいせつさについて、このとき露伴兄は寒月から印象ぶかい示唆をうけたさうである。

宮崎三昧(さんまい)は、でつぷりした。いかにも榮養が甲といつた感じ、石橋思案はいがぐり頭で、饗庭篁村(あへばかうそん)は目のほそい老人、遲塚麗水(ちづかれいすい)ははつきりおぼえてゐないが、しかしこのひとは神田のころから露伴兄のところへときどき出入してゐた。麗水、忍月太華、つづいて緑雨、美妙の諸氏は谷中の家へも數多くたづねてきたはうのひとびとで、みな兄の友人であつたが麗水だけは何か習ひにきたひとのやうに子供の私には思はれた。森鷗外はさうたびたびはこなかつたが、森田思軒といつしよのことも

あつたと記憶する。いつたいそのころの訪問者は、洋服はひとりもなくみな和服で鷗外も例外ではなかつたが、しかし着流しでなく袴をはいて、髯のあるまじめな顔で端然とすわり、子供心にもすこしこわいやうにおもはれた。露伴兄も鷗外には他のひとに對するよりも丁寧だつたやうである。鷗外は訪問の回數はすくなかつたが、手紙はしばしばよせてきたので、宛名の幸田成行（露伴）の「行」の字のつくりの縦の棒が長くひつぱつてあるかきかたをした表がきの封筒をみると、一目でああ森さんからだなとすぐわかつた。「樣」でなく「君」で、その「君」の字の形もいまだに記憶してゐる。綠雨の右さがりの、くせのある書體とともに印象にのこる筆蹟である。

幸堂得知から一中節への興味をそそられた露伴兄は、自分が習ひたいのだが何となくてれくさいのかあるひは臆劫なのか、まづ妹の私に習はせ、私を通じて習ふといふ方法をとつた。いつたい一中節には、元祖ともいふべき宮古のほか宇治と管野の兩派があつたが、その宇治紫喜部といふ老女がすなはち私の師匠で、私は根岸の

宇治紫喜部の家へ一中節を習ひにかよつた。おツしよさん紫喜部の家は、茶の指南所でもあり、紫喜部のつれあひの通人ふうのぢいさんが茶道の稽古をしてゐたのでつまり夫妻そろつて師匠であつた。私はそこへ一年半ぐらゐは通つたやうに思ふ。

稽古はまづさいしよが近江八景、つぎが紙屋治兵衞（小春紙治）といふ順序であつた。私はおぼえがよかつたので紫喜部師匠が乘氣になつて、のちに私が谷中から向島の兩親の家へ移つたときも、わざわざ向島まで出むいてきて、ひきつづいて稽古をするやうに私にすすめたことがある。

露伴兄はどの曲よりも「小春紙治」が習ひたい、そこで私も主としてこれを兄に稽古したが、成友（露伴弟、私の兄）が當時一高生でよく谷中の家へ遊びにきて、ときどき露伴兄といつしよに稽古した。いつたい幸田兄弟は、長男成常（幼名貞太郎）次男成忠（金次郎、郡司大尉）三男（早世）四男成行（鐵四郎、露伴）長女延、五男成友、次女幸（私）六男修造の八人のうち、姉と私と亡弟修造とは直接音樂に關係したが、兄たちもみな音樂はすきであつた。長兄成常はいはゆる道樂をした人

で、もと藝者だつた妻の三味線にも註文をつけたほうだし、郡司姓をついだ次兄も聲がよく、まだ子供のころ「手習つ子」といふ踊りをすぐおぼえたほどであり、成友兄も姉の長唄稽古をわきできききおぼえたくらゐであるが、ひとり露伴兄にはそのやうな思ひ出がない。しかし谷中の一中節の稽古では、とくに調子をはづすといふほどのこともなかつた。

露伴兄への稽古はたいてい夕食後で、紫喜部師匠のところとちがつて机も何もつかはず、私はきちんと坐つたが露伴兄や成友兄は火鉢のそばであぐらなども時々かいてゐた。露伴兄が習つてゐるときのくせは

「黒髪のォ、か」

「亂れて今のォ、か」

「憂きおもひ、か」

といちいち「か」をつける。おぼえてしまふまでは付ける。露伴、成友兩兄に同時に敎へる場合は、成友兄のはうがはるかに早くおぼえた。いつたい稽古は二人同

時よりも露伴兄ひとりのときのはうが多かつたから、しかも兩兄はほぼ同程度に習ひ進んだから、音樂は露伴兄よりも成友兄のはうが素質がずつと多かつたわけで、事實旋律などの記憶も成友兄のはうがよく、露伴兄は稽古にも必ずしも熱心でなかつたのは音樂あるひは音曲が元來さうすきでない證據でもあらう。しかし「黒髮の」などは露伴兄も一段よくおぼえた。師匠役の私は「これ、もうし、小春さん」などといふ言葉のところなどは何かてれくさく、さういふところは拔かして教へたといふこともあつた。いつたい幾たびぐらゐ教へたであらうか。私自身が根岸へ稽古にかよつた日が二七に四九、つまり十日間に四日の割合だつたので、谷中でもかなりたびたび稽古したやうに思ふ。そのおかげで私は黒髮は今でも隅から隅までおぼえてゐるが、ききどころの「さりとは狹きご量見」などといふところは、ふたりのお弟子ともそろうてじつに熱心であつた。

同じころ私のはうから露伴兄に本を教へてくれるやうに請うたところ、兄は「古列女傳」を選んで講義してくれた。和綴の木版の大型の本で、いまおぼえてゐるの

は「周室の三母」の「三母は太姜、太任、大姒なり」といふところぐらゐであるが、私が兄のひまをみて本をもつていくと奥の八疊で教へてくれた。私はよみかたを教はつて兄のまへで朗讀し、そのあとで兄が解釋してくれるのであつた。やはり机もなく、疊の上においた本をはさんで私はきちんと兄と對坐したが、兄は教へながらときに煙管でたばこなどをのんでゐたやうに思ふ。兄はながいきせるを使つたもので、兩切りや口つきのたばこをのんでゐるのは見たことがない。古列女傳を習つたのはほぼ半年ぐらゐだつたと記憶する。

兄は知友とのつきあひの一方、勉强や仕事でもいそがしかつた。書きものは氣がむいたときは晝も夜もしてゐたやうで、例の東南の「離れ」の四疊半に、衣桁を二つ三つたてて白い寒冷紗を蚊帳のやうにかけたり、また石油の大ランプを用ひてゐたりしたのをいま思ひだす。讀書は、ときには寢ながらもしてゐた。例のひじやうに靜かな環境で、客がないかぎりは、あたりが墓場のためしんかんとしてをり、向島の親の家のひとびとも、谷中へ出かけるなら午後二時まへに、といつてゐたくら

ゐで、雨がふる日の夕方など、その雨の音さへ茅葺き屋根のなかへ妙に吸ひこまれ、それに便所の窓からは例の白張り提灯がゆれるのがみえたりするのでまつたくさびしく薄氣味わるかつた。

私は明治二十五年、十五歳の九月、音樂學校の選科から豫科へ入學しなほし、そのときからは向島の親の家から上野へ通學したので、つまり露伴兄の谷中の家には二十四年の春、芳林學校生徒でかつ上野選科生だつた時代から、この豫科生となるまで約一年半のあひだ寄寓してゐたわけである。さうしてその一年半のあひだにも學校の休暇のときはいつも向島の親の家に歸つてゐたので、もし谷中に居つづけたならば上述の客たちのほかにもなほ幾人かのひとを見かけたかもしれない。もとよりいま私が忘れてゐるひとや、また私の留守中にきたひともあらう、しかしたとへば紅葉山人の姿など私はいちども見かけた記憶がない。

露伴兄は谷中の家では怒つたこともめつたになくやさしい態度であつた。旅行がすきで、有馬までいつたときなど、土産としておそらく紅筆であらう、四寸ほどの

軸に色絹糸のまいてある有馬の巻筆をくれたり、その他何かと親切にしてくれた。旅行は露伴兄のそのころほとんど唯一の道樂で、將棋は谷中時代にはまださゝず、旅行にもその時代ゆゑ和服の着流しにとんびなどかけて俥で上野なり新橋なりへ出かけていつた。

私が谷中の家を出て向島から上野へ通ふやうになつたのは、あるひはそのころすでに家を賣る話があつたためかもしれない。賣つた理由は今はわがらないが、おそらく維持が困難だつたところへ高橋太華山人からとくに所望されたためであらう。いづれにせよ明治二十五年中に急に手放したので、私が去つたのちもなほ谷中宅にゐた父など、かねて竹羽目張りや天井貼りなど丹精しただけにひじやうにがつかりしてゐたことをおもひだす。ともかく谷中の家は太華山人にたしか六十圓だかで讓られ、そのため父も谷中から向島の家へ歸つてきたが、このとき幸田家は向島須崎町でなくすでに向島元寺島村（もとてらじまむら）へ移つてゐた。長兄が鐘淵紡績へ入社したためである。露伴兄は父や私とおなじく向島元寺島の家へきたやうに思ふが、京橋のはうに

ゐたこともあり、二十六年三月には郡司兄の千島探検行などもあつて、そのころの記憶は今はつきりしてゐない。しかし露伴兄が一時われわれといつしよにゐたことはたしかで、成友兄や長兄甥たちが花がるたを弄んでゐたのを花札ぎらひの露伴兄が怒つて便所へすててしまつたのもたぶんこの頃である。私の記憶では、露伴兄は谷中時代後は、轉々時代よりもむしろそのあとの上總ゆきや鍛冶町下宿のはうに思ひ出がつながつてゐる。上總へいつたのはたしか二十七年の暮頃で、望陀郡横田村の佐久間もよの家に寓居したのである。佐久間家は幸田家の遠縁で、すなはち露伴兄や私ら八人きやうだいの祖母よしは久留里藩の御家中者の娘が幸田家へ嫁いできた者であつたが、このよし祖母の里方が佐久間家の一門なのであつた。佐久間もよは佐久間家の家つきの娘で農家をついだが、婿が放蕩者だつたうへ長男も道樂者で家が沒落し、三男はわれわれの末廣町紙屋時代に店へ小僧としてきたこともある。佐久間家と幸田家はだいたいさういふ關係であつた。そのころ東京から上總へいくには靈岸島から汽船で木更津へわたるので、私もたぶん明治二十八年の夏ごろ母とと

もに佐久間もよを訪ねたことがあるが、そのときは露伴兄はすでにゐなかつた。したがつて露伴兄の上總滯在は短かつたわけであるが、上總は當時ごく簡易な暮しができるところだつたので氣分轉換と仕事のためにいつたのであらう。さうして上總から歸京後、二十八年の春ごろから神田鍛冶町の下宿、つづいて結婚、となつたのである。

神田鍛冶町の下宿は姉妹の素人下宿で、姉が采配をふり妹はじつさいに働いてゐた。この妹の幾美が露伴兄の氣にいつて、やがて結婚することになつた。きみ姉妹には當時すでに兩親がなく、擧式の當日には琴の山室夫妻が先方の總代格となり、仲人は小田直太郎醫師であつた。かうして虎の門にちかい芝の南佐久間町で露伴兄の新家庭がはじまつたのである。

新婚の家は路地にそつた平家で、八、六、四半、三、ぐらゐの間數であつた。庭はせまかつたが、のちにアンダラシヤン種の鷄が飼はれ、また弟修造がここに寄寓して中學へ通ふことになつた。南佐久間時代には、露伴兄には子供は生れなかつ

た。
「おきみ姉さん」は、目が大きく髮がすこしちぢれてゐたが、美人であつた。背は高くなく、肥つてゐるはうで、いつも日本髮をいつてゐた。きみ姉は私とは「おきみ姉さん」「お幸さん」とよびあつたが、露伴兄とは「あなた」「おきみ」であり、ときに露伴兄は二十九、きみ姉は二十一であつた。きみ姉は、自分のなりふりかまはず夫によくつくしたひとで、昔流の女の仕事はみなできて、なかでも料理がとくいであつた。

露伴兄ときみ姉とが云ひあらそひをしたといふやうなことは私はいちどもきいたことがない。まだ南佐久間町のころ、あるとき私は、露伴兄が考へごとをして居眠りかけてゐたときにきみ姉が兄の顔へいたづらに墨をぬつたのを見かけたことがある。仲がよかつた證據であらう。その後も夫婦の爭ひなどたえて耳にしたことがなかつた。それはきみ姉が、ひじやうにひかへ目なひとだつたためもあるやうで、すなはちきみ姉は親がなく育つて苦勞を知つてゐたからであらう。思ふことを輕卒に

ふ前にまづ用心するたちであつた。きみ姉は兄嫁たちのうちでは兩親にも私たちきやうだいにも受けがよかつたはうで、私たちがある夏鎌倉に家をかりたときも十日ほどさぞつたことがある。もつともこのときは歸京後、鎌倉の史蹟見學を怠つたといふのできみ姉は露伴兄から叱られたさうである。さういへば露伴兄はある時きみ姉を評して、きみの節約々々はけつかうだが、ちよつと變へればきれいに快くなることを知らない、たとへば古びた夜具を變へない、といつたことがあるが、しかしさういふ節約や內助の功があつたればこそ、のちに露伴兄は向島寺島新田に家も建てられたのだと思ふ。きみ姉は、自分は粗食しても露伴兄にはつねに美食させるやうに心がけ、料理がとくいなので、たとへば魚をやいてゐ、それに胡桃やしようがや青味（菜）をくばるといつたやうな心がけがあつた。胡桃は、甘くまぶしたのを五六粒ほど魚のまへに置くのである。したがつて露伴兄は旅行をしても歸京後わが家の食膳につくのをたのしみにしてゐた。また露伴兄は若いころは冬でもしばしば足袋をはかず、素足を着物の裾につつみ、そのため裾が脂つぽくなつたり切

いれたりするのを、きみ姉は女中の手にまかせずみづから洗つたり縫つたりした。きみ姉は愚痴をこぼさず獻身的なところがあり、露伴兄にとつてはかけがへのない妻であつた。

向島元寺島村の幸田家はやがて對岸の淺草側の橋場へ越したが、それはおそらく長兄が橋場の製革會社に關係したためで、橋場の家も會社々長の北岡文兵衛所有の家屋の一つであつた。一方、私たちがゐた元寺島村の家へは露伴一家が越してきたのである。南佐久間町から直接ではなく一時ふたたび神田鍛冶町にゐて、それから元寺島村へ移つてきたと思ふが、のちに私たちが橋場から再び暫時元寺島村へ逆もどりしたので、露伴兄は元寺島村から寺島新田にうつつた。しかも新田ではのちに一軒を新築してそこへ越したので、寺島新田の露伴兄の家は前後二回あつたわけであり、又ひところはこの寺島新田の幸田家（露伴）のほかに元寺島村の幸田家（長兄）と向島に二軒が並存してゐたわけで、そのため長兄の家のはうが、「奥」または「奥の家」とよばれ、露伴兄の新田の家と區別された。ひじやうに煩はしい話である

が、要するに露伴兄は舊市内から向島元寺島村へと明治三十年に移つてきて、のち寺島新田に再度ちがつた建物に居をかまへて大正大震災にまでおよんだのである。

きみ姉は、いちど人工流産ののち長女歌子がうまれたが、このごろ私は文部省の留學命令ですでにドイツに渡つてゐたので、露伴兄がいつ新田へこしたか又おなじ新田にいつ新築したかその邊の記憶などもうたしかでなく、むしろ「奥の家」――借家ながら敷地が六三〇坪もあつた元寺島村の家のはうが、兄の新田の家よりも却つて印象ふかく殘つてゐるくらゐである。きみ姉はのちに不幸三十七歳の若さで亡くなつたが、大正大震災まで露伴兄が住んでゐた向島寺島新田の家は、露伴兄の努力はもとよりしてきみ姉の丹精によることも多かつたのはたしかであり、まことに痛惜にたへないひとであつた。

私は明治三十二年ドイツへ出帆、足かけ四年目の三十六年に歸朝して小石川の姉延の家で旅裝をといたが、そのころから私も忙がしくなり向島からは遠ざかつたので、露伴兄に接する機會も少なくなつたわけである。

あとがき

さきごろ露伴が逝いたとき新聞雑誌にいくつかの短文をかいたことが動機となつて、本書の上梓を慫慂されることになつた。

「露伴の思ひ出」は「群像」九月號に、「露伴の片鱗」は「光」十月號に寄せたものである。露伴については、かつて露伴が文化勳章をうけたときなどにも小文をかいたことがあるが、かういふ謂はば慶弔の機會でなく、ふつうのときに三四たび

求められた評論乃至評傳は、私はつひに一つも脱稿しえなかつた。私も私なりに、露伴の世界像ともいふべきものをいちどは描いてみたいと以前も今も思つて居るが、しかし私はさしあたつてはなほ勉强が不十分で殘念ながらそこまでに至つてゐない。慶弔の機會に小文を書くにつけても、私は自分がたまたま露伴の甥なるがゆゑに伯父について拙文を求められることを思はざるをえず、さういふ要求にあへて添つてきたことや又したがつて拙文が祝儀不祝儀文的な要素を加味された隨筆に止まつてゐることを誰よりも私みづからあきたりなく思ふ。本書にはそれら小文のうちしばらく、「思ひ出」と「片鱗」とを收めたが、故人への追想はもとよりこれらだけで盡きるものではない。なほ右の兩文はほぼ同じころ同じやうな課題に應じてかいたため、多少の重複は免かれえなかつたが今はあへてそのままにすることにした。

「露伴の俳話」は、より正しくは、露伴の俳話及び雜談とでも名づくべきであらう。くはしいことは本文にゆづるが、この俳話は私のノォトには文語文および文體

をなさないメモとして記錄されてゐるのを、今回すこしでも露伴の直話の調子を再現するやうにといふ意圖のもとにかきあらためたものである。したがつて引用符內の露伴の言葉は、內容はもとより表現も文責は私にあることはいふまでもない。二重の文責はつらいが、しかし露伴が事實いはゆる講義調ではけつして話さなかつたことを思ふとき、かういふ口調復原の試みもあへて許されるのではなからうかとおもふ。この俳話は部分的にはすでにいくつか他の文、たとへば「思ひ出」や「片鱗」などにも入れたので、今回はそれらの重複はもちろん省いたが、さらに右の兩文中に發表したものでも本書では「俳話」のはうへ再び移したものも少數ある。今回ノオトを整理すると「露伴の俳話」は豫想以上に量があり、本書の頁數の半ば以上を占めるにいたつたので、私はよほど表題もこれにあらためようかと思つたが、諸種の事情でやはりそのままにすることにした。「人間露伴」といふ表題はもと書肆の試案で私も同意したものであるが、あとがきをかく今となつてみるとこの表題は本書にはいささか重すぎるやうな感じもする。人間露伴について私がより直接に語る

ことは今でもできなくはないが、素材の如何その他によつては、時機の適否やまた私自身の見方の補正のためにも、なほしばらく歳月の經過を待つはうがよささうである。したがつて本書は内容からいへば純然たる著作よりもむしろいはゆる編著の性質をおびてゐる。

「露伴娘の言葉から」は、つぎの「露伴妹の言葉から」とともに書肆の希望によつて書きそへたものである。露伴は先妻（幾美）との間には三子があつたが、後妻（八代）との間には子供がなかつた。長女歌（うた）、次女文（あや）、長男成豐（しげとよ）の順序であつたが、長女長男は不幸父にさきだち、現在次女文（通稱文子）のみがその娘玉（たま）（露伴孫、通稱玉子）とともに健在である。私の從姉にあたる文子は、父露伴についてこのたび既にいくつかの文章をかき今もなほかきつつあり、それが單行本になるはずなので本書にはなるべくそれと重複しないやうな素材を主として綴つたつもりである。やはり、私に文責があることはいふまでもないとともに、私事ながら文子の著書についてみられんことをのぞむ。

「露伴妹の言葉から」は、私の母安藤幸がかつて兄露伴の許にすごした谷中時代およびその前後の時代の思ひ出話をまとめたものである。「鐵ちやん兄さん」（當時の露伴）「お幾美姉さん」（露伴妻）を本書では「露伴兄」「きみ姉」としたのをはじめ、敬語その他もはぶいて綴つた。記憶の內容がとかく外面的なものであるにせよ、「五重塔」の谷中時代の露伴と一つ屋根の下に起居した現在唯一の生存者として、その話は興味がなくはないと思ふ。

本書の刊行については、企畫から校正にいたるまで、丹頂書房の諸氏、とくに阿部仁三、加藤正明兩氏のお世話にあづかつたことがひじやうに多い。末筆ながらつつしんで感謝の意を表する次第である。

昭和二十三年三月

高木卓

人間露伴

定價百圓
送料拾五圓

印刷　昭和二十三年六月一日
發行　昭和二十三年六月五日

著者　高木卓

發行者　東京都中央區日本橋濱町一ノ一五　中山吉郎

印刷者　東京都中央區日本橋茅場町一ノ六　原川力

印刷所　東京都中央區日本橋茅場町一ノ六　日章印刷株式會社

配給元　東京都千代田區神田淡路町二ノ七　日本出版配給株式會社

發行所　東京都中央區日本橋濱町一ノ一五　株式會社丹頂書房

凡ゆる藝術はより多數の人々に依つて賞鑑され、以て其の存在意義と價値とを高めるものである。

知識の泉、美の殿堂は常に國民大衆の前に歡喜と希望により開かるべきものであらう。

文藝圖書の刊行を以て廣く江湖にまみえんとする我社の念願も又實に此處にある。

若い希望と逞しい情熱を持ち、あかるい明日への大いなる理想を具現せしむる大作品を有名無名の別を問はず、廣く天下に求め、いはゆる野に遺賢なからしめ、以て人類に貢献するを存立の唯一の目的とする。

作品の種類形式の如何を問はず若い國民大衆の明日への理想具現の爲のよき指針たるべき作品を如何なる犧牲をも敢て忍び欣然刊行する用意を有するものである。

廣く文學藝術家諸賢の賛同と聲援並びに御寄稿を賜らん事を切望する次第である。

丹頂書房

藤澤主計

丹頂書房版